桜井市埋蔵文化財
発掘調査報告書　第39集

桜　井　市

平成23年度国庫補助による
発掘調査報告書

纒向遺跡第171次調査

談山神社・妙楽寺跡第１次調査

纒向遺跡第172次調査

吉備池遺跡第15次調査

2013. 3. 29

桜井市教育委員会

桜　井　市

平成23年度国庫補助による
発掘調査報告書

2013. 3. 29

桜 井 市 教 育 委 員 会

16

輪宝１

17

輪宝２

※番号は本文に対応

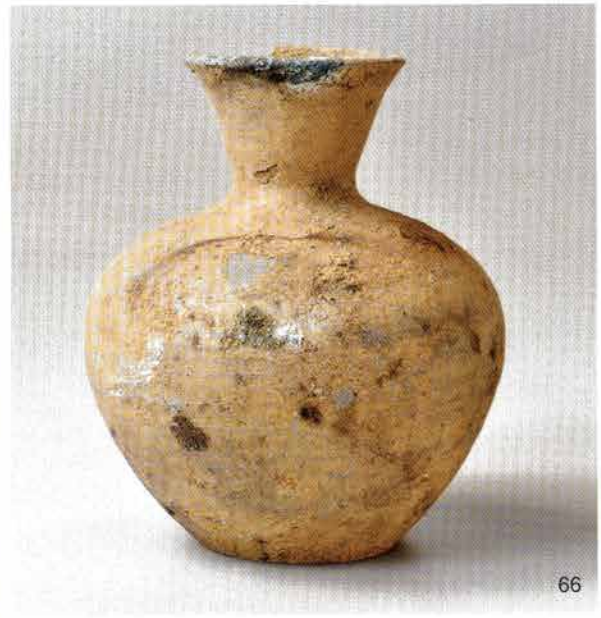
談山神社・妙楽寺跡第１次調査出土遺物

昭和20年出土遺物

銅製筒

内面の布目痕

銅製筒蓋



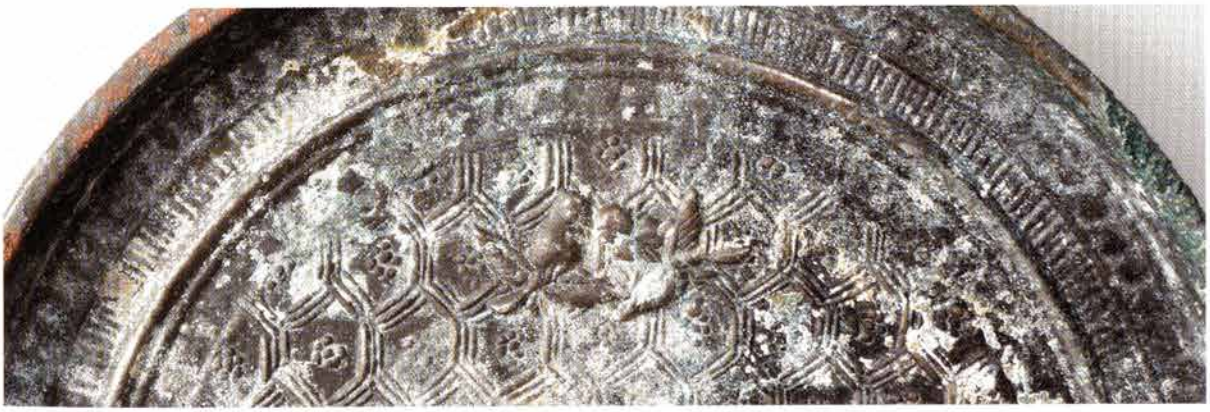
須恵器壺

※番号は本文に対応

談山神社　本殿床下出土遺物①（昭和20年出土）

64

亀甲地双雀鏡



※番号は本文に対応

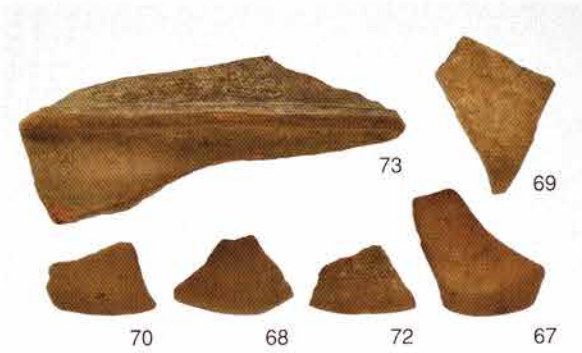
談山神社　本殿床下出土遺物②（昭和20年出土）

65

銅製小箱

63

金銅製五鈷杵



71

74

銅製筒内残存物

※番号は本文に対応

談山神社　本殿床下出土遺物③（昭和20年出土）

序

私達の桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この地を生きる多くの人々に限りない豊かさを与え続けています。

桜井市内で過去の営みを示すものとして、大和川の北側は芝遺跡、纒向遺跡や箸墓古墳、纒向石塚古墳をはじめとする纒向古墳群、南ではメスリ山古墳、桜井茶臼山古墳、上之宮遺跡、大福遺跡、吉備池廃寺など、全国的にも貴重な文化遺産が多く存在しています。これらの遺跡はこれまでの数々の発掘調査の積み重ねによって日本の歴史を塗り替える多くの事実を私たちに提供してくれています。

桜井市ではこのような遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力を入れており、本書には平成23年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち纒向遺跡第171次、同172次、談山神社・妙楽寺跡第１次、吉備池遺跡第15次の調査成果をおさめております。本報告によって貴重な歴史遺産に対する理解と愛着を深めていただき、調査した資料が広く活用されることとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

最後になりましたが、現地調査にあたりまして協力していただいた地主及び地元協力者の方々、指導・助言を頂いた多くの関係諸機関の方々、また、酷暑、極寒のなか作業に従事していただいた作業員の方々や学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力していただいた整理員の方々に深く御礼を申し上げ、序の言葉にかえさせていただきます。

平成25年３月29日

桜井市教育委員会
教育長　雀　部　克　英

例　　言

1．本書は平成23年度国庫補助事業として桜井市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。本報告書では、纒向遺跡第171次調査（堤野欣孝氏）、談山神社・妙楽寺跡第1次調査（談山神社）、纒向遺跡第172次調査（裏出禮次氏）、吉備池遺跡第15次調査（米田進彦氏、株式会社カワタテック）の、4調査の成果を報告している。

2．調査主体：桜井市教育委員会

教育長　雀部克英、事務局長　松田至功、事務局次長（文化財課長兼務）竹田勝彦、
桜井市纒向学研究センター設立準備顧問　寺沢薫、
文化財課主幹　川本光司、文化財係長　橋本輝彦、主任　松宮昌樹、福辻淳、丹羽恵二、
技師補　森暢郎、臨時職員　木場佳子、武田雄志、苅谷史穂、福家恭、西岡恵美

3．調査担当者：丹羽恵二、森暢郎、武田雄志、福家恭、苅谷史穂

4．調査補助員：堂浦千景、甲谷晋平、小島宏貴、広瀬侑紀（京都橘大学）、吉村和也、
中尾芙貴子（立命館大学）、千葉与寛（同）、竹田一貴（奈良大学）、
高橋直大（奈良大学）、神所尚暉（同）

5．調査作業員：井上久幹、上田猛、北村勝弘、田村則佳、吉岡靖夫、吉田友侈、中西智子、
澤田巳喜雄、甲谷郷美、生島紀夫、南幸弘、森貞之

6．整理作業及び報告書作成：上記補助員及び嶋岡由美、北畑陽子、吉川晴美、太田久仁子、
小松令子

7．現地調査及び遺物整理に関して以下の機関、団体、個人の方々からさまざまなご指導、ご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県文化財保存事務所談山神社出張所、
奈良文化財研究所都城発掘調査部、古代寺院史研究会
森郁夫（帝塚山大学）、関根俊一（同）、清水昭博（同）、甲斐弓子（同）、大脇潔（近畿大学）、
菱田哲郎（京都府立大学）、吉澤悟（奈良国立博物館）、小澤毅（奈良文化財研究所）、
大西貴夫（奈良県立橿原考古学研究所）、重見泰（同附属博物館）、
森下恵介（奈良市教育委員会）、三好美穂（同）、中島和彦（同）、
西田敏秀（(財)枚方市文化財研究調査会）、下村節子（同）、丸山香代（(財)桜井市文化財協会）、
長岡千尋（談山神社）、室原慶和（談山神社談の会）、山口文章

8．本書の執筆は各調査担当者がおこない、文末に明記している。編集は丹羽がおこなった。

9．本書における方位、座標は世界測地系によるものを示す。第2章第4節のみ旧日本測地系を併記している。方位は座標北を示し、レベル高はすべて海抜高（T.P）を表す。

10．本書記載の遺物は、土師質のもの－白抜き、須恵質のもの－黒塗り、瓦質・瓦－網目、金属－白抜きとした。

11．図版の遺物番号は、該当する各節の図の遺物番号に該当する。

12．出土遺物をはじめ、調査記録の一切は桜井市教育委員会で保管している。活用されたい。

目　　次

巻頭図版
序
例言
目次
表・挿図・図版目次

第１章　平成23年度国庫補助による発掘調査……1
第２章　発掘調査の成果
　第１節　纒向遺跡第171次発掘調査報告……3
　第２節　談山神社・妙楽寺跡第１次発掘調査報告……6
　第３節　纒向遺跡第172次発掘調査報告……23
　第４節　吉備池遺跡第15次発掘調査報告……37

図版
抄録

表　目　次

表１　平成23年度国庫補助による発掘調査一覧……1
表２　土層名一覧（纒向遺跡第172次）……28
表３　出土遺物観察表……36
表４　土層名一覧（吉備池遺跡第15次）……41
表５　瓦各遺構出土別　重量……56
表６　平瓦・丸瓦一覧表……61
表７　各遺構の規模……61

挿　図　目　次

図１　桜井市の位置……1
図２　平成23年度国庫補助による調査位置（Ｓ＝1/5000）……2
図３　調査トレンチ位置図（Ｓ＝1/1500）……3

図４　トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/100）……４
図５　ピット断面図（Ｓ＝1/50）……５
図６　調査地の位置（Ｓ＝1/20000）……６
図７　調査区と建物の関係（Ｓ＝1/250）……７
図８　調査区平・断面図（Ｓ＝1/60）……９
図９　調査区出土土器（Ｓ＝1/3）……10
図10　調査区出土輪宝（Ｓ＝1/2）……11
図11　調査区出土金属器・銭貨（Ｓ＝1/3）……12
図12　調査区出土瓦（Ｓ＝1/3）……13
図13　談山神社保管遺物（Ｓ＝1/3　63、64はＳ＝1/2）……15
図14　表採遺物（Ｓ＝1/3）……17
図15　多武峯縁起絵巻に描かれた本殿……18
図16　本殿平面図……19
図17　出土鏡の類例……20
図18　調査区位置図（Ｓ＝1/5000）……23
図19　調査区平面図１（Ｓ＝1/80）……24
図20　調査区平面図２・断面図（Ｓ＝1/50）……25
図21　調査区平面図３・断面図（Ｓ＝1/60）……27
図22　遺構断面図（Ｓ＝1/20）……28
図23　出土遺物１（Ｓ＝1/3）……29
図24　出土遺物２（Ｓ＝1/3）……30
図25　出土遺物３（Ｓ＝1/3）……31
図26　出土遺物４（Ｓ＝1/3）……32
図27　出土遺物５（Ｓ＝1/3）……32
図28　出土遺物６（Ｓ＝1/3）……33
図29　出土遺物７（Ｓ＝ 1/10）……34
図30　吉備池遺跡第15次調査位置図（Ｓ＝1/2500）……37
図31　平・断面図（Ｓ＝1/100）……39・40
図32　SD104埋土横断面（Ｓ＝1/40）……42
図33　SD104盛土状堆積断面・遺物出土状況（Ｓ＝1/40）……43
図34　遺構断面（Ｓ＝1/40）……45
図35　軒丸瓦（Ｓ＝1/3）……46
図36　軒平瓦（Ｓ＝1/3）……47
図37　丸瓦Ａ類（Ｓ＝1/4）……49

図38　丸瓦A・B類（S＝1/4）……50
図39　平瓦A類①（S＝1/4）……51
図40　平瓦A類②（S＝1/4）……52
図41　平瓦A類③（S＝1/4）……53
図42　平瓦B類（S＝1/4）……54
図43　平瓦B・C類（S＝1/4）……55
図44　出土土器①（S＝1/3）……57
図45　出土土器②（S＝1/3）……58
図46　柱材（S＝1/6）……59

図　版　目　次

巻頭図版1　談山神社・妙楽寺跡第1次調査出土遺物
　輪宝1
　輪宝2
巻頭図版2　談山神社本殿床下出土遺物①（昭和20年出土）
巻頭図版3　談山神社本殿床下出土遺物②（昭和20年出土）
巻頭図版4　談山神社本殿床下出土遺物③（昭和20年出土）

図版1　纒向遺跡第171次調査（1）
　調査地全景（西より）
　サブトレンチ土層断面（東より）
図版2　纒向遺跡第171次調査（2）
　ピット1土層断面
　ピット2土層断面
図版3　談山神社・妙楽寺跡第1次調査（1）
　調査前の防空壕（南より）
　輪宝出土状況
　防空壕東・南壁（北西より）
図版4　談山神社・妙楽寺跡第1次調査（2）
　防空壕北壁（南より）
　防空壕西壁（東より）
　埋戻し後の防空壕（北より）
図版5　談山神社・妙楽寺跡第1次調査（3）
　出土遺物①
図版6　談山神社・妙楽寺跡第1次調査（4）
　出土遺物②
図版7　談山神社・妙楽寺跡第1次調査（5）
　出土遺物③
図版8　纒向遺跡第172次調査（1）
　調査前の調査地（南西より）
　中世の遺構面（南東より）
図版9　纒向遺跡第172次調査（2）
　SD02（北より）
　西壁断面（東より）
図版10　纒向遺跡第172次調査（3）
　SD01遺物出土状況（北より）
　SD01断面（北より）
図版11　纒向遺跡第172次調査（4）
　SD01・SD02掘削状況（北東より）
　SD04掘削状況（北より）
　SD05断面（東より）

図版12　纒向遺跡第172次調査（5）
完掘状況（北西より）
SK01・SD05完掘状況（北東より）
埋戻後の状況（南より）
図版13　纒向遺跡第172次調査（6）
包含層出土土器
SD01出土土器①
図版14　纒向遺跡第172次調査（7）
SD01出土土器②
図版15　纒向遺跡第172次調査（8）
SD01出土土器③
SD04出土土器
SD02出土土器
SK01・SD05出土土器①
図版16　纒向遺跡第172次調査（9）
SK01・SD05出土土器②
出土木製品
図版17　吉備池遺跡第15次調査（1）
全景（南より）
全景（北より）
南ピット群（南より）
図版18　吉備池遺跡第15次調査（2）
調査区中央部ピット群（南西より）
SD101西壁断面（東より）
SD101東壁断面（南西より）
図版19　吉備池遺跡第15次調査（3）
SD102西壁断面（東より）
SD104A地点断面（南より）
SD104B地点断面（南より）
図版20　吉備池遺跡第15次調査（4）
SD104C地点断面（南より）
北拡張北壁断面　SD104D地点断面（南西より）
北拡張北壁断面SD104・盛土状遺構検出状況（南より）
図版21　吉備池遺跡第15次調査（5）
SD104北側盛土状遺構縦断面（北西より）
SD104北側盛土状遺構遺物出土状況（北西より）
SD104北側盛土状遺構断割状況（南西より）
図版22　吉備池遺跡第15次調査（6）
SD104遺物出土状況（上より）
SD104南側盛土状遺構縦断面（西より）
南拡張区SD104検出状況（南より）
図版23　吉備池遺跡第15次調査（7）
遺構断面①
図版24　吉備池遺跡第15次調査（8）
遺構断面②
図版25　吉備池遺跡第15次調査（9）
軒丸瓦・軒平瓦
図版26　吉備池遺跡第15次調査（10）
丸瓦
平瓦①
図版27　吉備池遺跡第15次調査（11）
平瓦②
図版28　吉備池遺跡第15次調査（12）
平瓦③・出土土器①
図版29　吉備池遺跡第15次調査（13）
出土土器②
出土土器③
図版30　吉備池遺跡第15次調査（14）
柱材
SD104出土木片

第１章　平成23年度国庫補助による発掘調査

1. 桜井市の位置と環境

桜井市は、奈良盆地の南東部に位置する人口約６万余人、面積98.93㎢の都市である。鉄道や国道により、大阪などの大都市と結ばれるなど近郊都市としての様相をみせる一方で、文化財が豊富な観光都市としての側面をもっている。北は天理市・奈良市、東は宇陀市、西は田原本町・橿原市、南は明日香村・吉野町と境を接しており、奈良盆地と山間部の宇陀、吉野地域との結節点で古くから交通の要衝であったと考えられ、数多くの遺跡が存在する。

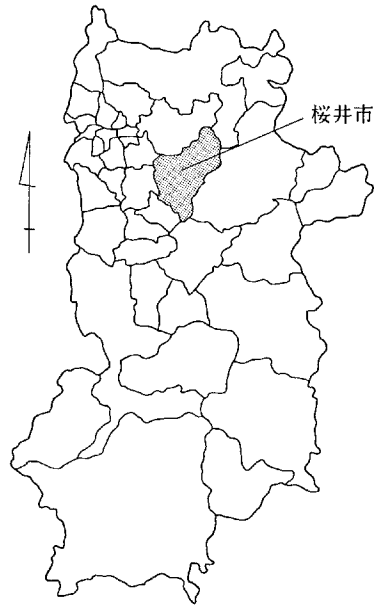


図１　桜井市の位置

弥生時代では銅鐸、木甲などが出土した大福遺跡や、絵画土器の出土した芝遺跡が平野部に立地する。古墳時代前期では市北部に広がる纒向遺跡が日本列島における中心的な集落と考えられており、その範囲には箸墓古墳をはじめとする出現期の古墳が数多く分布する。平地の南縁では桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳という２基の大型前方後円墳が存在する。古墳時代後期から飛鳥時代にかけては赤坂天王山１号墳や文殊院西古墳、欽明陵に比定される段ノ塚古墳などが存在し、古代寺院では吉備池廃寺、安倍寺跡、山田寺跡などがある。これらはいずれも大王家や有力氏族と密接な関係があるもので、桜井市周辺が古代国家の形成期に重要な役割を果たした地域といえる。桜井市ではこのような市内遺跡の範囲確認調査を行うとともに、開発に先立つ緊急調査を日々行っている。

2. 平成23年度の発掘調査

平成23年度に実施した国庫補助による発掘調査は６件である（表１）。このうち、纒向遺跡第171・172次調査は個人住宅建設に伴う発掘調査であり、それ以外の４件の調査は範囲確認調査であった。また、小川西塚古墳、小川東塚古墳では測量調査を行っている。本書ではこれらの調査のうち、纒向遺跡第171次、同172次、談山神社・妙楽寺跡第１次、吉備池遺跡第15次調査の成果について報告している。

表１　平成23年度国庫補助による発掘調査一覧

地図No.	調査名称	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	担当者
1	纒向遺跡第171次調査	巻野内632番	５月31日～６月９日	36㎡	ピット	武田
2	談山神社・妙楽寺跡第１次調査	多武峰319番	５月24日～７月６日	４㎡	土坑、輪宝	森・丹羽・武田・福家
3	纒向遺跡第172次調査	東田358番の３	８月５日～９月７日	42㎡	溝、埴輪	森・苅谷
4	茅原大墓古墳第５次調査	茅原718ほか	11月９日～３月27日	100㎡	葺石、渡土堤、埴輪列	福辻
5	纒向遺跡第173次調査	辻48番、41番	12月５日～３月26日	360㎡	溝、土坑	橋本、森
6	吉備池遺跡第15次調査	橋本49番	１月16日～２月28日	127㎡	溝、軒丸瓦、軒平瓦	丹羽、福家
7	小川西塚古墳・小川東塚古墳・サシコマ古墳（測量調査）	巻野内、箸中地内	３月27日～３月28日	－	－	森

図２　平成23年度国庫補助による調査位置（Ｓ＝1/5000）

第２章　発掘調査の成果

第１節　纒向遺跡第171次発掘調査報告

1. はじめに

纒向遺跡第171次発掘調査は、桜井市大字巻野内632番において、住宅の建築に先立って実施された。調査地は纒向遺跡の北東に位置し、渋谷向山古墳のある丘陵と珠城山古墳群のある丘陵に挟まれた標高約90mに位置する。

周辺の状況を見てみると、本調査地から南西約80mで行われた第65次調査では、溝状遺構から巾着状絹製品や漆塗り盾などが出土しており、この遺構が特殊な木製品を加工するためのものであった可能性が示唆されている。北西で行われた第80次調査N区では、布留式期の区画溝とそれに伴う柱列が確認され、区画溝は段丘の端面に掘削されたもので幅・深さともに約２ｍを測る。この溝の西側には土塁があり、約1.6mの間隔で柱が立てられていた。落ち込みからの出土ではあるが、鍛冶関連遺物も出土している。また、本調査地に東接して第132次調査が行われており、布留式期に属する溝や井戸を検出している。出土土器の中には漆の付着したものがあることから、第65次調査で見つかった漆塗り盾などとの関連が指摘されている。このように特殊な遺構・遺物が出土するこの地域は布留式期の中心域であったことが想定されている。

このような周辺の状況から本調査地が布留式期の遺構を包含し、特に第80次調査で確認された区画溝の延長線上にあたる可能性が高く、同様の遺構・遺物が期待された。なお、調査区は南北２ｍ×東西18m、面積36㎡のトレンチを設定し、調査期間は平成23年５月31日から６月９日までであった。

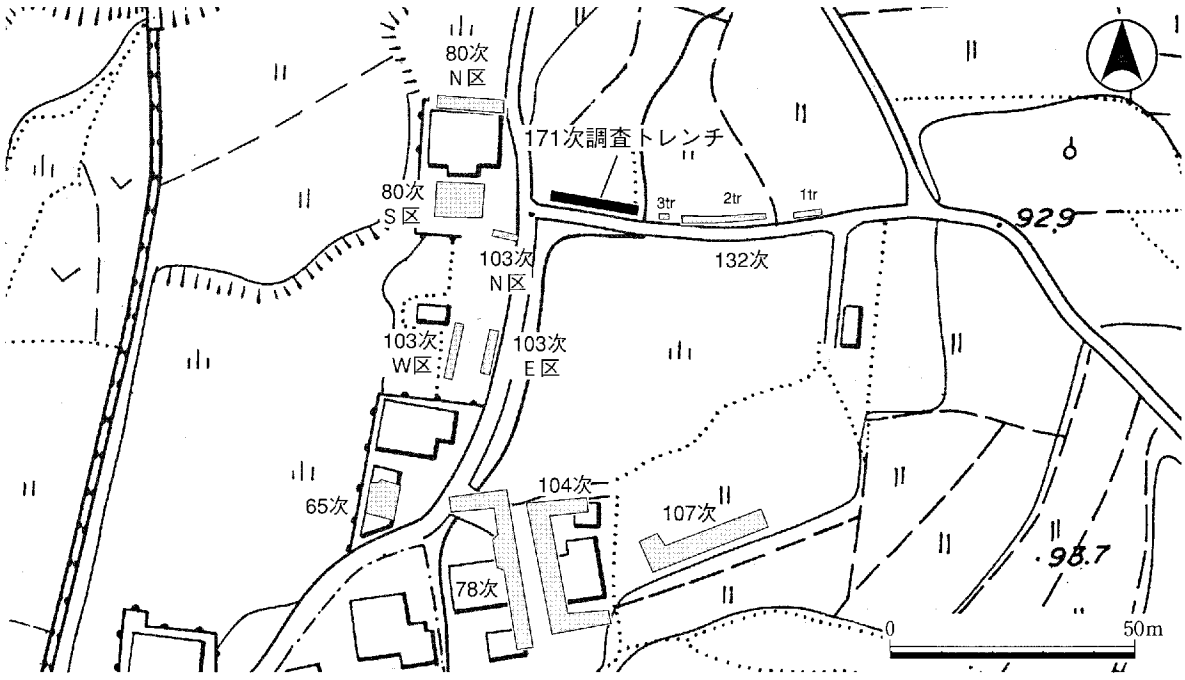
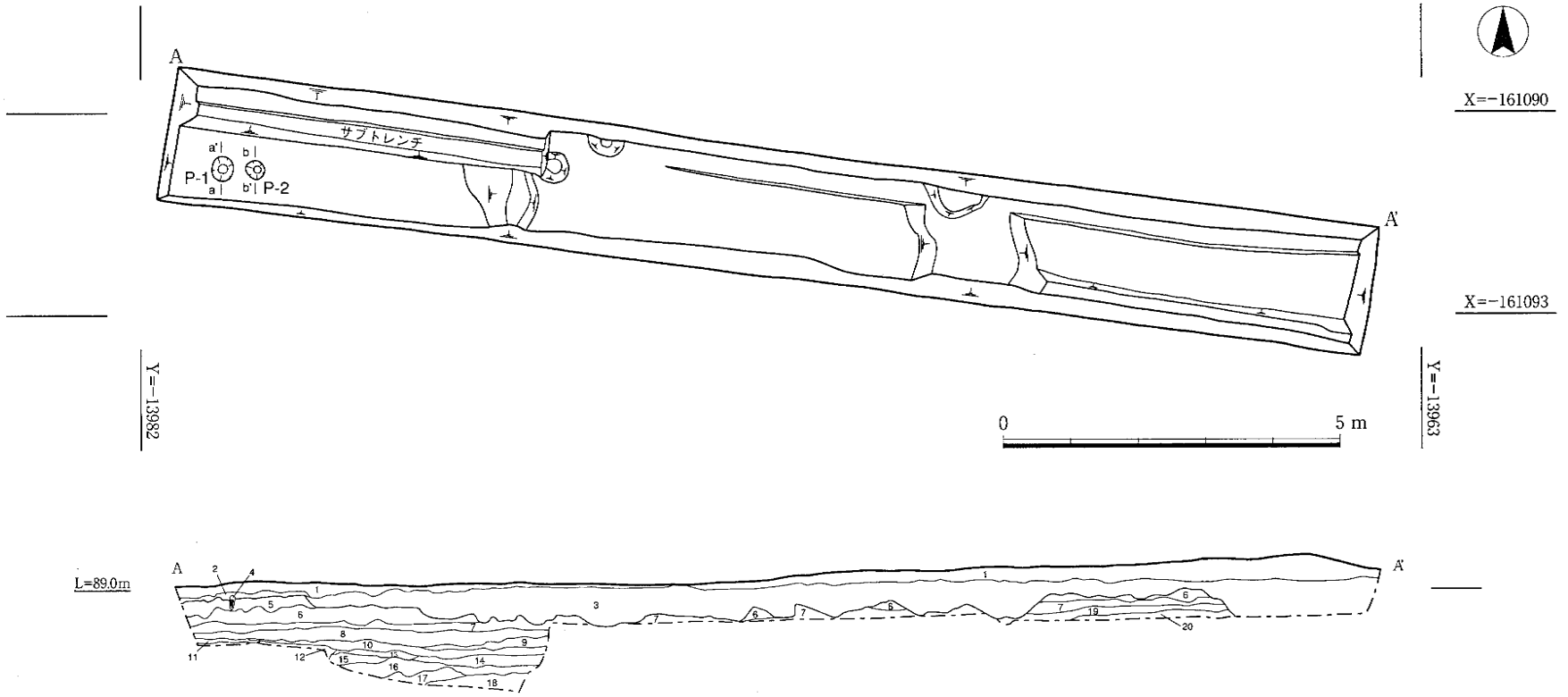


図３　調査トレンチ位置図（Ｓ＝1/1500）



1：現代耕作土
2：現代盛土
3：攪乱
4：2.5Y6/2灰黄色シルト（杭痕）
5：10YR3/4暗褐色粗砂混じり粘質土（良く締まる）
6：5Y6/1灰色粗粒砂（φ5㎝程度の礫が混じる）
7：10YR6/1褐灰色中粒砂
8：10Y7/2灰色細砂と7.5Y7/2灰白色シルトの互層
9：2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂
10：5Y7/3浅黄色シルト（暗灰黄色粗砂がラミナ状に混じる）
11：10YR7/8黄橙色粘質シルト
12：N3/暗灰色粘土
13：5Y6/1灰色シルト
14：10Y6/1極細～粗粒砂（下部は粗砂が多く堆積）
15：10Y7/1灰白色極細～中粒砂
16：10Y6/1灰色極細～粗粒砂（下部に粗砂が多い、褐灰色粘土が小ブロックで混じる）
17：7.5Y4/1灰色シルト（やや粘性あり、小木片が混じる）
18：7.5Y7/2灰白色極細粒砂
19：7.5Y5/1灰色シルト
20：N3/暗灰色粘質シルト

図4　トレンチ平・断面図（S＝1/100）

2. 調査の方法と基本層序

調査は耕作土・現代盛土をバックホーで除去した際、さらに下位に廃棄物の混じる撹乱層が堆積することからこの層位もバックホーで除去し、トレンチ西端に暗褐色を呈する粘質土をベースにしたピットを２基検出したため以降を人力掘削に切り替えた。この遺構面を形成する暗褐色粘質土層は、現地表から70cmの深さにまで達する撹乱層によって調査地内の80%が削平され、わずかに残るのみであった。しかし周辺の成果から、布留式期の遺構を形成する地山層は黄灰色を呈するものであり、さらに下位に遺構面がある可能性が考えられたことから、トレンチの西端に幅80cm、長さ５ｍのサブトレンチによる層位確認を行うこととした。その結果、周辺の成果に見られるような地山層は確認できず、堆積状況がシルト～粗粒砂と河川堆積に類似するものであった。すべてが無遺物層であったことも含めて、上記の暗褐色粘質土層が地山層にあたると考えられる。

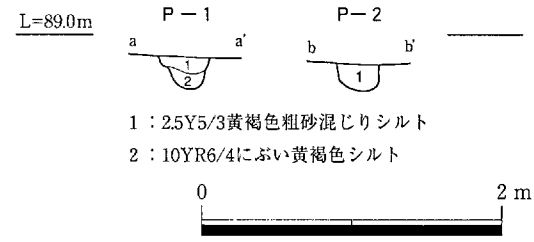


図５　ピット断面図（Ｓ＝1/50）

3. 検出遺構

トレンチ西端でピットを２基検出した。Ｐ－１は直径約35cm前後の楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。埋土は上部が黄褐色粗砂混じりシルト、下部がにぶい黄橙色シルトであった。遺物は土師器が出土しているが細片であるため詳細な時期は不明である。Ｐ－２はＰ－１の東に位置し、直径約30cmの楕円形を呈する。深さは約20cmを測り、埋土は黄褐色粗砂混じりシルトであった。遺物は出土していない。

4. まとめ

今回はトレンチの大半が撹乱層によって削平されていたため、検出遺構はピットのみであった。しかしながら、この撹乱層には地山層と考えられる暗灰色粘質土ブロックが混じっていることから本来は周辺一帯に拡がっていたことが想定できる。

これまでの調査成果から、依然として調査地周辺は布留式期の遺構・遺物が期待される地点であり、溝による区画の内側にあたる。また、本調査地より東側と南側は0.5～１ｍほど標高が高く、遺構の残存状況が良好である可能性がある。特に東側は中心域と考えられ、今後の調査によって居館跡や建物跡が見つかることが期待される。　（武田）

【参考文献】
萩原儀征　1987『桜井市巻野内　纒向遺跡発掘調査概報』　桜井市教育委員会
萩原儀征　1993「纒向遺跡巻野内尾崎花地区」『大和を掘る12』　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館
橋本輝彦　1995「纒向遺跡第80次発掘調査報告」『平成６年度国庫補助による発掘調査報告書２』　桜井市教育委員会
橋本輝彦・木場佳子　2003「纒向遺跡第132次発掘調査報告」『桜井市内埋蔵文化財　2002年度発掘調査報告書３』
（財）桜井市文化財協会

第２節　談山神社・妙楽寺跡第１次発掘調査報告

1. はじめに

談山神社・妙楽寺跡第１次発掘調査は、桜井市大字多武峰に所在する談山神社の本殿床下でおこなわれた範囲確認調査である。調査期間は平成23年５月24日～７月６日である。

談山神社は桜井市南部の山間部、大和川の支流である寺川の最上流部に所在する。周囲は山に囲まれ、標高500m程度と、桜井市の平野部にくらべて約400m高い。『多武峯縁起絵巻』によれば、乙巳の変（645年）の準備に中大兄皇子と藤原鎌足が談合した場所とされ、「談山」の由来となっている。社寺としては678年に藤原鎌足を改葬し、十三重塔を建築したのが始まりとされる。中世には神仏習合により、多武峰寺あるいは妙楽寺として僧兵を有して隆盛を誇る一方、興福寺や室町幕府などとの抗争により、1214年（建保二年）、1438年（永享十年）、1506年（永正三年）と何度も焼き討ちにあっている。近世には3000石を領して隆盛を誇ったが、明治維新以後は廃仏毀釈により仏教寺院は破却・転用され、談山神社として現在にいたっている。現在の本殿は1850年（嘉永三年）に再建されたもので、重要文化財に指定されている。1559年（永禄二年）に造営された本殿はその設計図が国指定文化財「談山神社本殿造営図並所用具図」として残っており、その後の本殿も絵図として描かれている。

近年談山神社周辺では、奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査がおこなわれており、中世～近世の遺構が検出されている[1)]。桜井市教育委員会でも平成23年に『多武峰念誦崛地区の研究―増賀上人墓及び中・近世石塔群の調査―』として中近世の石塔群について報告をおこなったほか、談山神社所蔵遺物についても紹介をおこなっている[2)]。

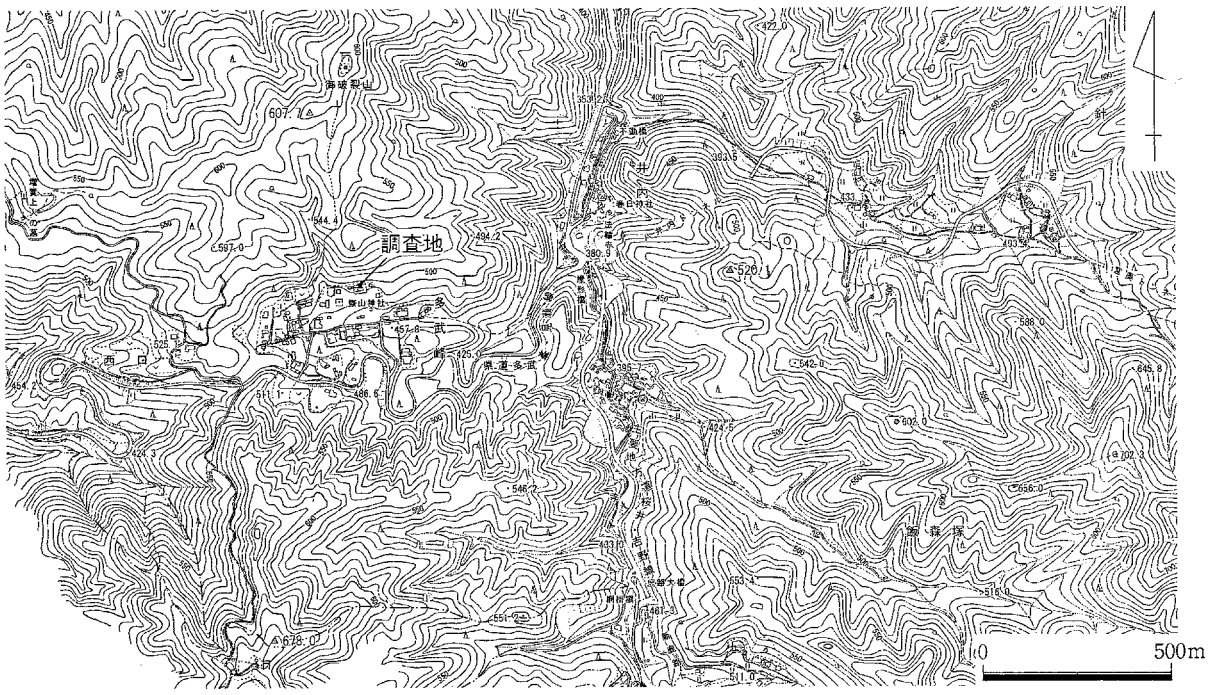


図６　調査地の位置（S＝1/20000）

2. 調査の経緯と経過

調査地は談山神社本殿の床下である。本殿は御破裂山南斜面の談山神社境内最高所に位置する建物で、談山神社の祭神である大織冠像が祀られている。本殿は東西透廊で拝殿と連結される独特の形態をとる。本殿は一辺６ｍの正方形で、東西10.0m、南北10.8mの高さ0.8mの基壇の上に位置している。床下は基壇縁部から続いて石敷きとなっており、本殿を支える柱と礎石がある。基壇中央にはその石敷きを剥がして土坑が掘削されていた。この土坑は第二次世界大戦末期に、談山神社の神像を退避させるべく掘られた防空壕である。防空壕周辺の床下石敷きの大半は、この防空壕の掘上土に覆われていた。防空壕掘削後、間もなく終戦を迎えたため、実際に使用されたかどうかは確かでないが[3]、防空壕は神像を納めるための木箱を設置した状態で半世紀以上開口したままであった。また、防空壕掘削の際には漆塗りの木箱に入った銅製筒、鏡、五鈷杵、銅製小箱、壺などが発見され、一部散逸したものを除き、大部分が社宝として大切に保管されてきた。

この防空壕は本殿を支える礎石の近くまで掘られており、本殿建物に与える影響を考慮して埋め戻す必要があった。その過程で遺構の有無や遺物の状況を確認するために調査をおこなった。

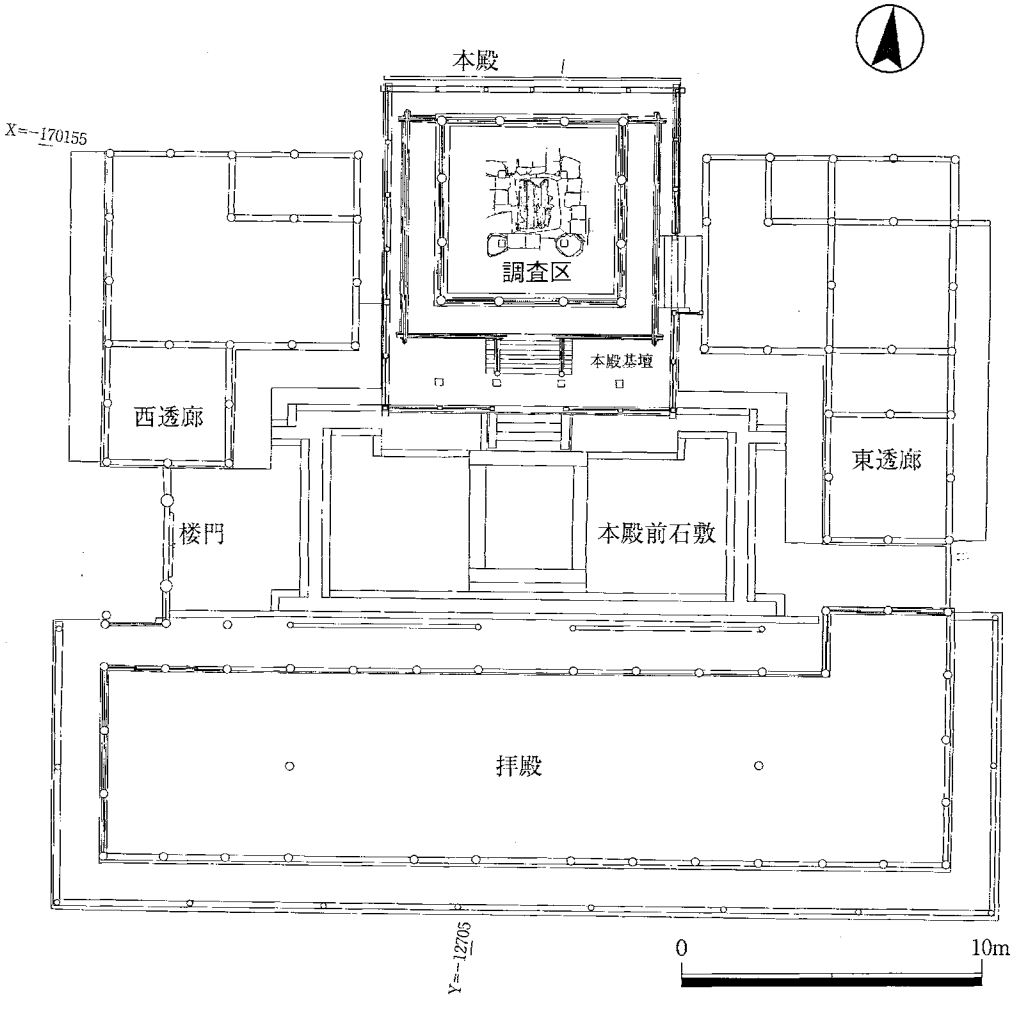


図７　調査区と建物の関係（Ｓ＝1/250）

調査は５月24日より木箱を解体しつつ防空壕内に再堆積していた土を取り除き、土坑が掘削された状態に復元したうえで壁面を精査した。その後に掘上土を篩掛けで精査し、遺物がないか確かめたうえで防空壕内に埋め戻し、７月６日に全ての現地調査を終了した。

3. 発掘調査の成果

（1）層位と遺構の概要（図８）

防空壕は南北約2.1m、東西約2.2mをはかる平面正方形で、床下から約1.8mまで掘り下げられ底面は平らになっていた。神像を納めるための木箱は、南北173cm、東西125cm、高さ約170cmで、１面に４～５枚ほどの板材を釘で緊結していた。また木箱に対応する蓋が床下に置かれていた。木箱上部は原形を保っていたが下部は腐朽し土圧で大きく変形していた（図版３上段）。蓋も木箱も床下入り口よりも大きく直接外部から持ち込めないため、床下で組み立てたものと考えられる。

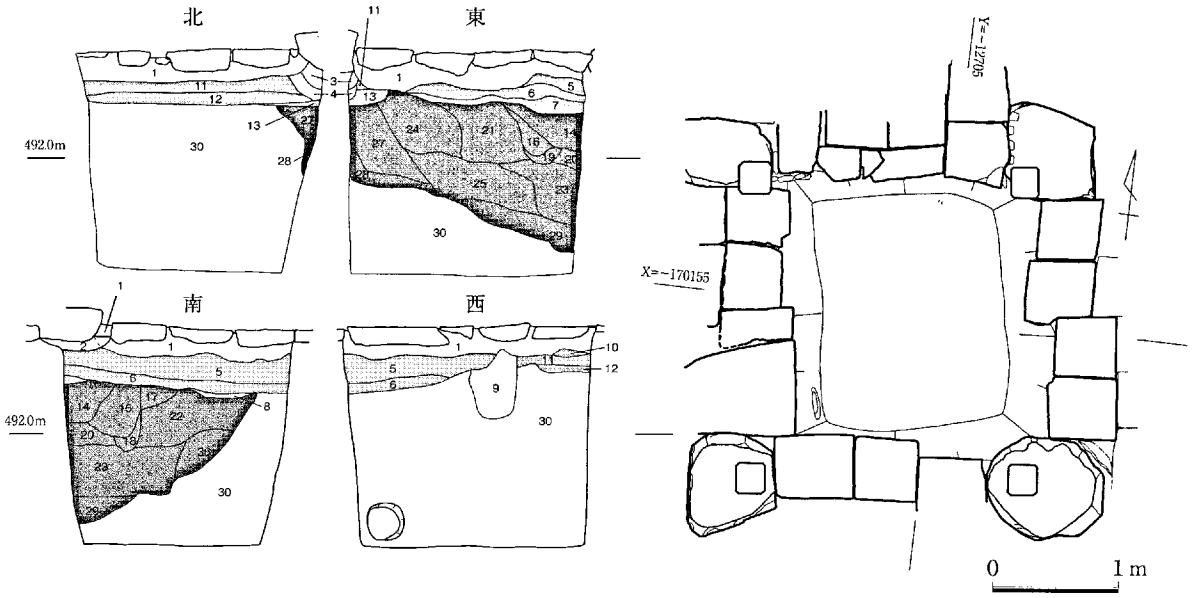
層序は敷石の下に敷石や礎石に伴う整地層（１層）やそれ以前の整地層（５～７層、11～13層）がみとめられ、その下に地山（30層）がある。また南壁と東壁、北壁の一部に整地層以前の土坑断面が確認できた。防空壕はこれらの土層を掘りぬいて掘削されていた。

礎石・敷石　礎石は長辺１m、短辺0.8m程のものである。

１～４層は現在の敷石と礎石に伴う層で、１層から瓦片、３層から土器片が出土している。断面精査で遺物が出土した層は１～７層に限られる。１層は敷石の据付に伴う土層で全ての壁面で認められる。２～４層は礎石の据付に伴う層で２・４層はややシルト質の締まった土を用いている。２層は１層に削られているが、防空壕壁面を見通しているため図８のような表現となっている。３層には炭化物が含まれている。礎石を再配置した痕跡は認められず、礎石は当初設置された状態のままと考えられる。

また、北東隅礎石には矢穴が認められたため、これについても調査をおこなった。矢穴は概して断面台形をしており、矢穴は長辺幅6.6～8.9cm、深さ4.0～7.5cm、矢穴間隔4.0cm前後をはかる。１列のみであるが個々の矢穴の形態にバラツキがある点や、短側面がアシンメトリーになる点はやや古い特徴ともとれる。森岡秀人・藤川祐作氏の分類によればＡタイプないし古Ａタイプに分類できる[4]。Ａタイプは慶長・元和・寛永期に城郭系石垣に採用されるものとされる。古Ａタイプは寺院系の石垣にＡタイプに先行して認められるものとされる。談山神社がもと寺院であることと、古い要素を持つことから北東隅礎石の矢穴は戦国期に遡る可能性も考えられよう。

整地層　５～７層は新しい整地層である。全体で層厚25cmをはかる。５層の断面に白色の微細な結晶が析出しており、整地する際に土層を固めるための苦汁などではないかと考えられる。６層は東壁で古代の瓦片を含む。８層はシルトで礫を含まない。８層は後述する土坑上面で最も低い位置のため、流水によって形成されたと考えられる。そのため、土坑上面は雨水にさらされる環境の時期があったと考えられる。９層は西壁断面のピット埋土で、11～13層を掘削している。５～７層は９層よりも後に堆積しているため、５～７層と11～13層は先後関係がある。新古の整地層上面のレベルはほぼ一定



1：オリーブ褐色（2.5YR4/6）青灰色礫混じり細粒砂層（敷石据付土）
2：にぶい黄色（2.5YR6/4）白色シルトブロック混じり粘質細～微細粒砂層（東南側礎石据付土）
3：褐色（10YR4/6）炭化物混じり中～細粒砂層（土器片含む）（東北側礎石据付土）
4：黄褐色（2.5YR5/6）細粒砂層（東北側礎石据付土）
5：褐色（10YR4/6）青灰色礫混じり中～細粒砂層（整地土）
6：褐色（7.5RY4/4）粘質微細粒砂層（瓦片含む）（整地土）
7：黄褐色（10YR5/8）白砂混じり細粒砂層（整地土）
8：黄褐色（10YR5/6）粘質シルト層（流土）
9：オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルトブロック混じり細粒砂層（ピット埋土）
10：黄褐色細粒砂層（整地土）
11：明黄褐色（10YR6/8）白砂混じり細粒砂層（整地土）
12：黄褐色（10YR5/6）細～微細粒砂層（整地土）
13：黄褐色（10YR5/6）シルトブロック混じり細粒砂層（整地土）
14：褐色（7.5YR4/4）粘質微細粒砂層（土坑埋土）
15：にぶい赤褐色（5YR4/4）粘質微細粒砂層（土坑埋土）
16：褐色（10YR4/6）粘質細粒砂層（土坑埋土）
17：にぶい赤褐色（5YR5/3）微細粒砂層（土坑埋土）
18：黄褐色（10YR5/8）礫混じり細～微細粒砂層（土坑埋土）
19：にぶい褐色（7.5YR5/4）細粒砂層（土坑埋土）
20：褐色（7.5YR4/4）粘質細粒砂層（土坑埋土）
21：にぶい赤褐色（5YR5/4）白砂混じり細粒砂層（土坑埋土）
22：褐色（10YR4/6）白砂混じり細粒砂層（土坑埋土）
23：褐色（7.5YR4/6）白砂混じり細粒砂層（土坑埋土）
24：褐色（10YR4/6）白砂・礫混じり細粒砂層（土坑埋土）
25：褐色（7.5YR4/6）白砂・シルトブロック混じり細粒砂層（土坑埋土）
26：にぶい赤褐色（5YR4/4）白砂混じり細粒砂層（土坑埋土）
27：にぶい赤褐色（5YR4/4）細粒砂層（土坑埋土）
28：赤褐色（5YR4/6）白砂混じり細粒砂層（土坑埋土）
29：暗赤褐色白砂混じり細粒砂層（土坑埋土）
30：花崗岩（地山）
※各層の白砂は地山の花崗岩起源

図８　調査区平・断面図（Ｓ＝1/60）

であるため、新しい整地層は古い整地層上面のレベルにあわせて整地されたと考えられる。10～13層は古い整地層である。北壁を中心に認められる。全体で層厚20cmをはかる。

本殿基壇は水平ではなく、北から南に向かって下っており、１ｍ毎に３～４cm低くなっている。また地山と整地層の境界も南に下っており、地山の高さは本殿前の石畳付近で雨落溝の高さとほぼ等しくなるとみられる。このことから当初地山を掘削した際にも完全には平坦にはなっておらず、傾斜を持っていたことがわかる。また整地層はすべて現在の基壇内部の土層であるといえる。

土坑　土坑は整地層以前のもので、土坑断面が南面、東面で確認できることから、本殿床下の中心に位置しているわけではなくやや南東よりに穿たれていることがわかる。全体の規模は不明であるが、少なくとも長さ２ｍ以上、深さ1.1ｍ以上ある。全体にすり鉢状を呈している。

14層～29層は土坑内埋土である。土坑埋土は土質や壁面での土層の形状から見て、14～20層（上層）、21～23層（中層）、24～26層（下層）、27～29層（最下層）に大別できる。14～17層、20層は褐色でやや黒みがかっており粘質である。18・19層は黄褐色のブロック状の層で形状から見て類似する層とみ

られ、15・16層と関連するとみられる。いずれも白砂をあまり含まない。14～20層全体で断面方形を呈している。21層～23層はわずかに黒みがかかるものの、白砂を多く含む点で14～20層と異なる。2段に掘りこまれているとみられる。24～26層はそれ以前に堆積した層で、25層上面には径約10cmのシルトブロックが複数みとめられる。27～29層は地山掘削後に堆積したもっとも古い層で地山起源の白砂を多く含んでいる。14～20層のように断面方形を呈する層があることは、これらの層が掘りこまれたものであることを示す。

土坑から遺物は出土せず土坑の形成年代や漆塗りの木箱等との関係は不明である。しかしながら、「地表よりやく六尺の位置に漆塗りの木箱があり、その内部より銅麻笥一、亀甲地双雀鏡一、金銅製五鈷杵一、平底壺一、小型銅箱一、刀子若干、古銭若干等が出土した[5]」との証言を重視するならば、断面で観察できる土坑の底が地表下165cmであることから六尺に近く、土坑にこれらが埋納されていた可能性が高い。

（2）出土遺物

（1）～（13）は土師器皿である。（1）～（7）は土坑内埋土、排土から出土した皿で、口径7.2～7.5cm、器高1.5cmのほぼ同一の法量をとり、外面ユビオサエ、内面ヨコナデと特徴が共通する。胎土に多量の雲母を含み、にぶい橙色の色調で硬質に焼成される点も共通している。他の土師器皿に比べて完形に復元できる個体が多く、破断面も新しい。また（5）は完形で、本殿床下側壁西側の北から2番目の礎石の上に置かれていた。これらのことから、本来（1）～（7）は一括して床下に搬入されたもので、防空壕掘削の際に排土や土坑再堆積土に混じった可能性があろう。時期は江戸時代後半～近代とみられる。（8）は北東角礎石の据付に伴う3層から出土した。内面ナデ調整で、外面はマメツしている。小片であるが唯一層位がわかる土器片である。断面の形態は後述する（11）に類似する。（9）は排土から出土した土師器で、口唇部が内側に丸く肥厚し、不明瞭だが体部外面にケズリ調整、ミガキ調整が施されているようにみえる。色調は明赤褐色である。8世紀の所産であろう。唯一古代に遡る土器片である。（10）～（12）はいずれも乳白色で軟質の胎土をもつ。調整はすべて外面底部がユビオサエ、他はナデである。奈良市東大寺81－3次調査SK02出土土器[6]と類似する。（8）もその前

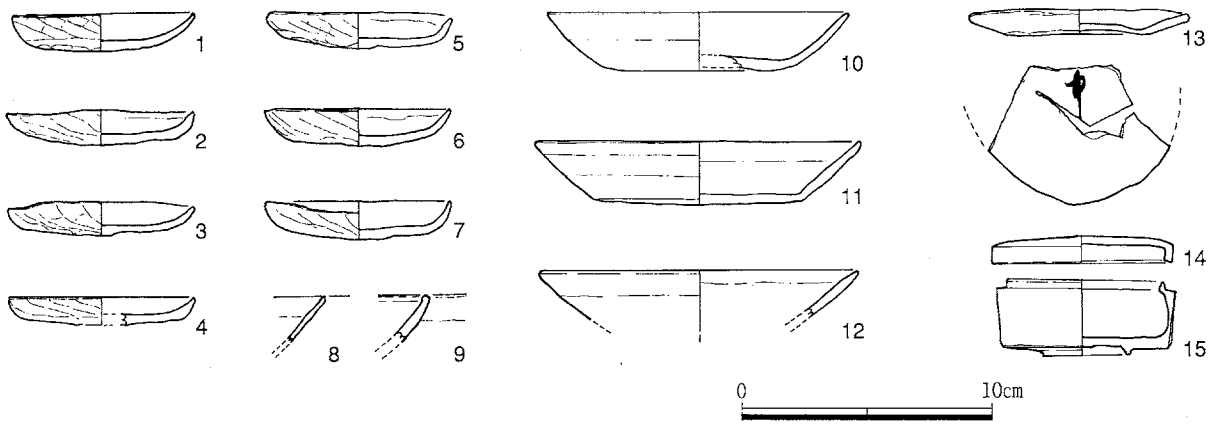


図9　調査区出土土器（S＝1/3）

後の時期であろう。(11) は（8）と同じく口唇部が尖る。(13) は底部外面に「中」ないし「申」の墨書をもつ土師器皿である。口唇部は丸く整えられる。底部は上底となる。体部はヨコナデ、底部外面はユビオサエである。焼成は堅緻である。(14)、(15) は合子身とその蓋である。(14) は細片となって排土や再堆積土に混じっていた。外面を回転ヘラケズリした後に灰釉が施釉されている。回転方向はいずれも右回転。身との接地面と内面は露胎である。(15) は完形で再堆積土中から出土した。体部外面を回転ヘラケズリ調整し、高台はケズリ出しである。体部に灰釉がかけられ、底部と内面は露胎である。蓋との接合面に残る痕跡から、重ねて焼成したようである。身は完形であったが、蓋が破砕した状況で排土から出土したため、防空壕掘削時に残されたものではない。

(16) は銅製輪宝である。防空壕南壁際の再堆積土中で地表より1.5m付近で出土した。表面には立体的な造形で八弁の蓮華が作り出される。裏面は平らで文様もない。内区の轂、放射状の部分を輞、外側の輪を輻、突出部を峰と呼称する。文様は鋳出した輪宝に彫金している。最大径は13.05cm、外輪の径で11.0cm、厚さ0.5cm、重さ254ｇをはかる。

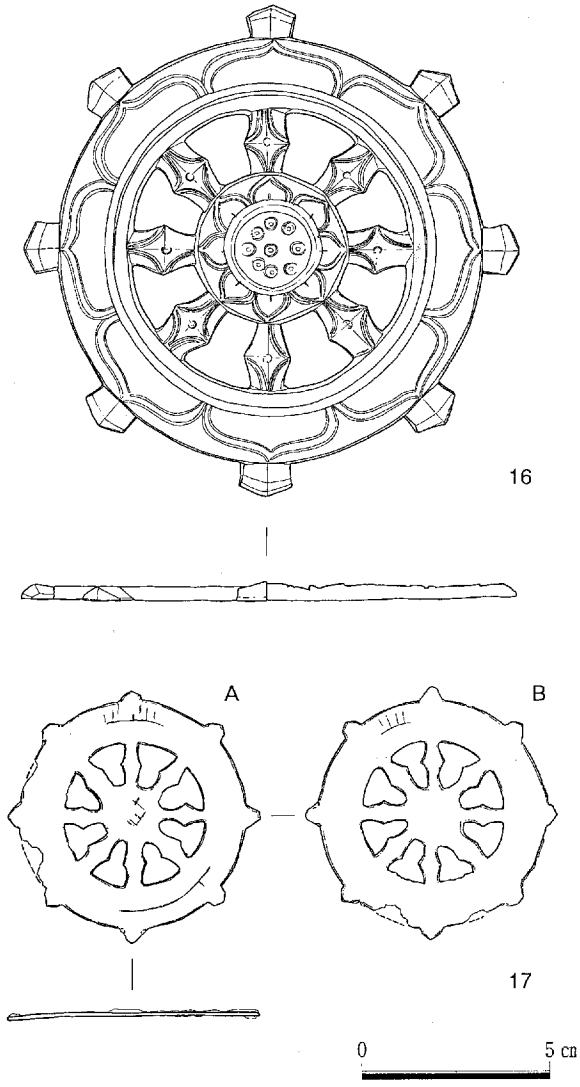


図10　調査区出土輪宝（S＝1/2）

轂の中心に蓮子を９個と８枚の蓮弁、輻にも８枚の蓮弁を配する。輞にも文様が刻まれる。輞には２条１単位として沈線が彫り込まれるが、３ヶ所で沈線が欠落する。輞の中央には逆Ｃ字形の文様が配される。轂と輻の蓮弁を構成する沈線は蓮弁の先端から中心に向かって彫りこまれている。断面がＶ字形になる工具を用いている。一方、轂の蓮子は管状の工具をドリルのように回転させて彫り込む。彫り込んだ所が斜めになっているにもかかわらず、工具の先端が輪宝に垂直に接していたため彫り込みは均等にならず、蓮子の外側は浅くなる。江戸時代の所産と考えられる。

(17) も銅製輪宝である。排土中から出土した。(16) に比べて小型で薄い。最大径6.1cm、外輪の径で6.6cm、厚さ0.1cm、重さ21ｇをはかる。錆着が著しく一部は剥落している。土圧のためかやや歪む。両面とも平滑で、(16) のような凹凸は認められない。(16) と異なり鋳造ではなく金属板から切り出されているとみられる。

両面に文様が認められる。Ａ面の轂にはお

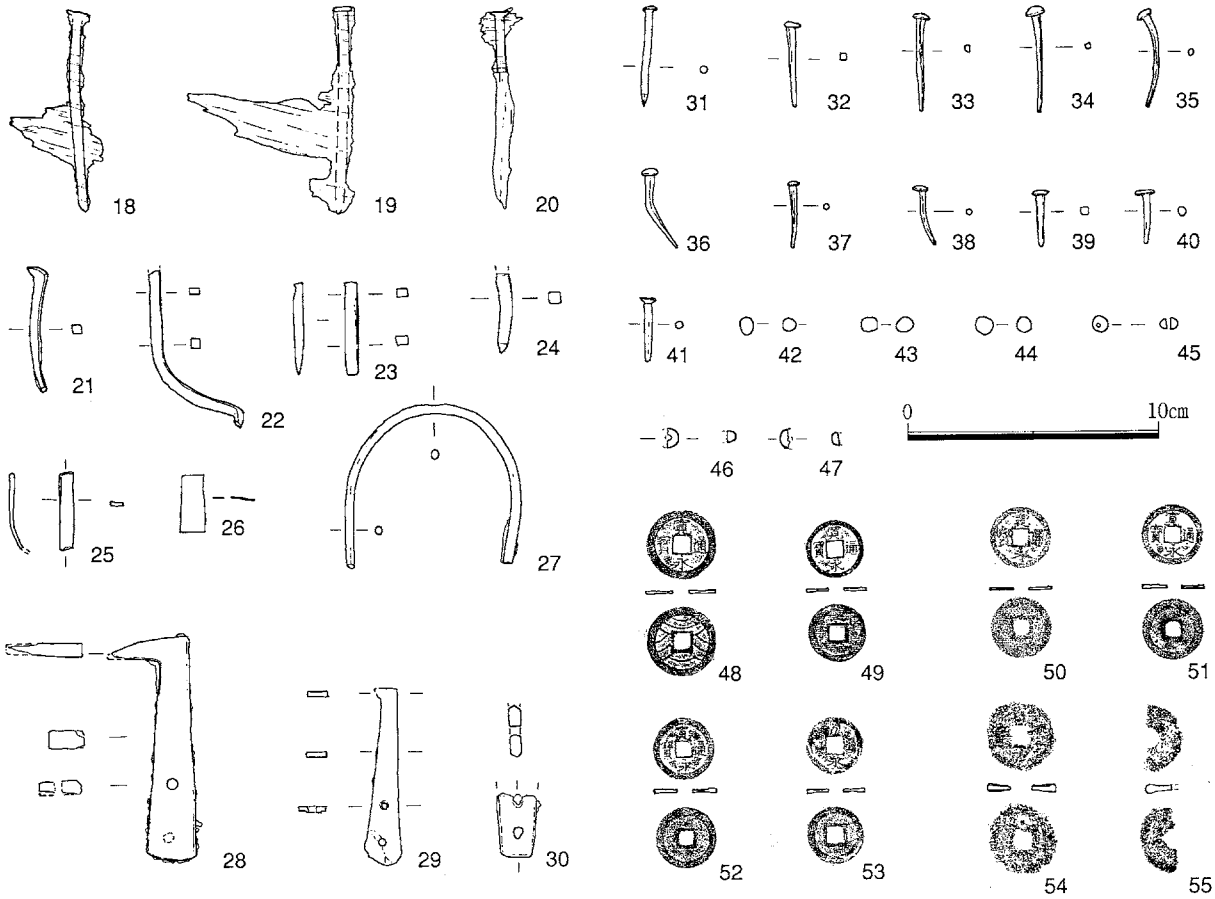


図11　調査区出土金属器・銭貨（S＝1/3）

そらく方形になるとみられる文様があり、輻には一重の圏線と圏線外側への放射状の文様が認められる。一周する車輪状の文様であったと考えられる。B面にも一部に圏線と放射条の文様が認められるため、この輪宝には両面に文様があった事がわかる。

(18) ～ (20) は防空壕内木箱に用いられていた釘である。長さ7.8cm程度、太さ0.5cm程度である。いずれも断面が丸い釘である。木質が付着する。(21) は釘である。断面方形をなす。長さ4.9cmをはかる。(22) も釘であろうか。両端は折損しているうえ大きく曲がっている。(23) は銅製品で、端部が鑿頭状をなす。(24) は端部が四角錐状をなす銅製品で、端部を切断されている。(25) も銅製品で、端部が切断されている。(26) は銅片である。(27) は「U」字状鉄製品で、断面円形である。端部は切断されている。(28)・(29) は同一器種の鉄製品とみられるが用途は不明である。先端が鍵の手状に曲がっており、何かを引っ掛けるものの可能性がある。円孔が２つ認められる。(28) は長さ8.7cmをはかる。下部は叩き伸ばされている。(29) は長さ7.0cmをはかり、(28) よりも薄い。こちらも下部は叩き伸ばされている。(30) は２つ穴の開く鉄製品である。(28)・(29) と同一器種の可能性がある。

(31) ～ (41) は銅製釘である。本殿床下石敷きの隙間から出土したものもあり、本殿の造営や修復に際して使用されたものであろう。(31) は丸釘であるが、他はすべて断面が方形か多角形状になる。(31) は頭が丸く、断面も丸い釘である。(32) ～ (36) は長さ2.7cm程で、頭は円形をなす。(37) ～

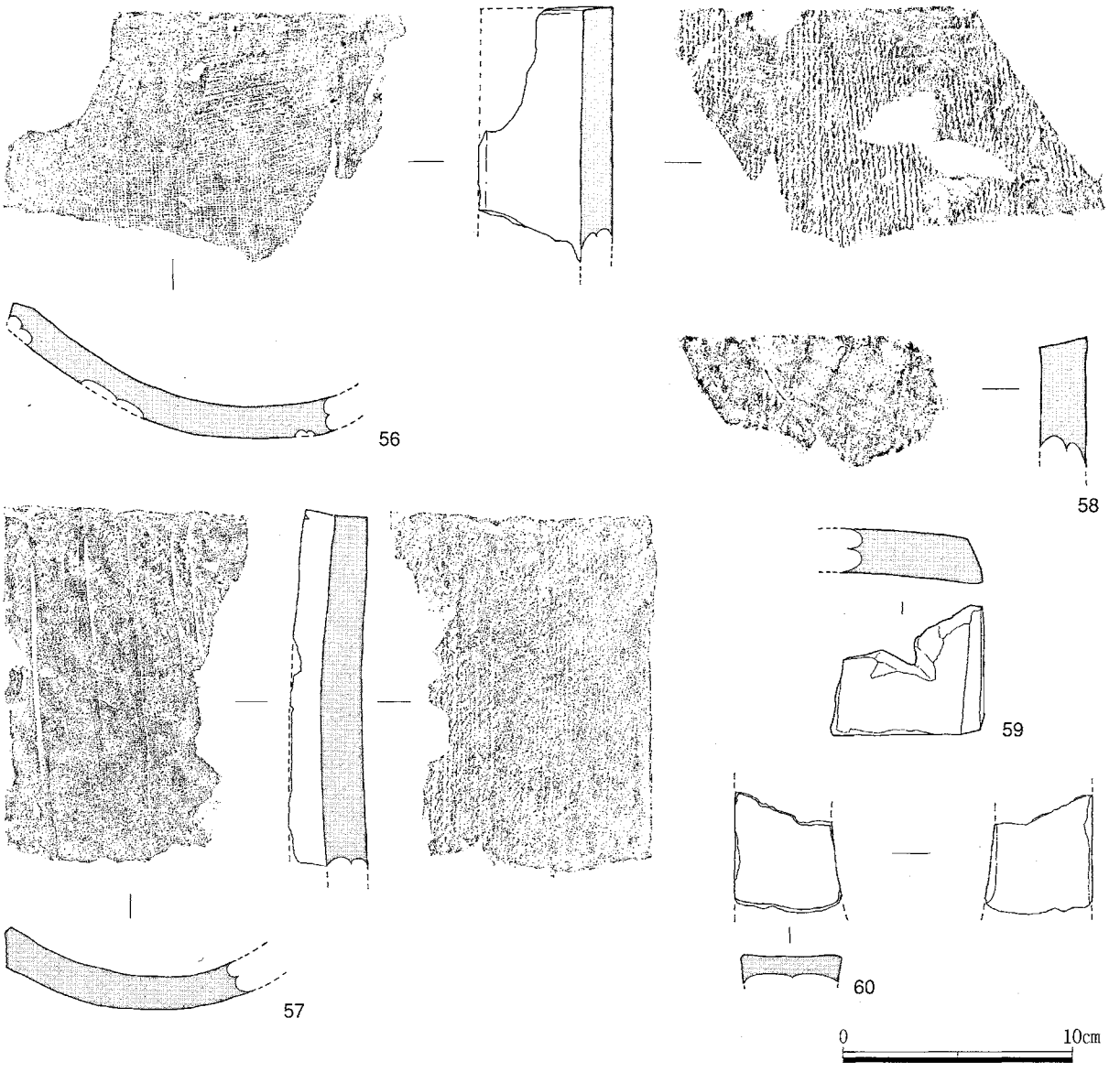


図12　調査区出土瓦（S＝1/3）

(39) は長さ1.8cm程で、頭は円形をなす。(40)・(41) はほぼ同じ長さであるが頭は平頭となる。(35)・(36) は軸の途中で折れており、引きぬかれたのかもしれない。錆着のため表面が見えないが、(42)～(44) は銅製玉である。(45) ～ (47) はガラス玉で、色調はいずれも青である。(46)・(47) は接合しない。(48) ～ (55) は寛永通宝である。排土中以外に床面でも検出した。

(56) ～ (60) は瓦である。(56) ～ (59) は平瓦である。(56) は凸面に縦位の縄タタキを施し、凹面には布目がのこる。布綴じ合わせ目、粘土合わせ目は認められない。軟質で赤褐色を呈する。土坑東壁の6層から出土した。奈良時代後半～平安時代前半の所産と考えられる。(57) も凸面に縦位の縄タタキ、凹面に布目を残す。凹面両側端は布目痕をなで消している。さらに両面に離れ砂を用いている。須恵質に焼成され青灰色で硬質である。平安時代後半から鎌倉時代の所産であろう。(58) は凸面に縦位の縄タタキの後に指ナデを施すものである。軟質で赤褐色を呈する。凹面は布目痕を残す。(58)

は（56）と同一壁面、同一層位から出土し、胎土も共通するため同一個体である可能性がある。(59)は両端を2度面取りする平瓦片である。(60）は道具瓦と考えられる。布目痕跡が残る。両端がナデ調整されている。あるいは熨斗瓦とも考えられるが、やや小さい。

以上のように層位的な情報のわかる遺物は少なかったものの、豊富な資料を得ることができた。青銅釘・寛永通宝・銅製玉については再堆積土・掘り上げ土だけではなく、床下石敷きの床面や石の隙間からも出土した。よって、これらは防空壕掘削に伴い出土したものだけではないと考えられる。銅製品は本殿装飾に多数用いられており、過去の再建・補修時のものが落下していたのではないだろうか。

瓦片は整地土層から出土しているため本来用いられていた地点は不明である。ただし周辺は急傾斜地であり、遠方から整地土を運んだとは考えにくい。よってこれらの瓦片は本殿周辺から持ち運ばれたものと考えられる。8世紀から9世紀には既に瓦葺きの建物が談山神社周辺に存在していた事がわかる。妙楽寺にかかわる瓦片の可能性もあろう。

4. 昭和20年時の談山神社本殿下出土遺物

ここで述べる遺物は、1945年（昭和20年）に、防空壕築造のため談山神社本殿下を掘り下げたところ出土した遺物である。既に『桜井町史　続』に森川辰蔵氏が詳細に報告している。既報告では実測図や写真の提示がなかったため、今回の報告はそれを補足する。

『桜井町史　続』によれば、「地表よりやく六尺の位置に漆塗りの木箱があり、その内部より銅麻笥一、亀甲地双雀鏡一、金銅製五鈷杵一、平底壺一、小型銅箱一、刀子若干、古銭若干等が出土したことを知ることができるも、その埋没状態は判明しない。この出土位置は本造（ママ）が約四尺盛土された上に造営されていることより、遺物埋没の深さは地表より約二尺のところと考えられるのである」（『桜井町史　続』 p.615）とするが、これも聞き取りによる伝聞と考えられ、埋納状況ははっきりしない。また『桜井町史　続』刊行当時、刀子と古銭、漆塗木箱の大部分は失われていた。

現在確認できる遺物は銅麻笥とされた銅製筒1点、亀甲地双雀鏡1点、金銅製五鈷杵1点、平底壺1点、小型銅箱1点があり、『桜井町史　続』刊行当時のまま、ほとんど逸失することなく社宝として保管されてきたものである。またその他に土師器皿類14点、甕1点、焙烙1点が認められる。これらのうち、小片で図化できなかった土師器を除いて図化した個体を掲載した。

(61）は銅製筒蓋である。直径16.5cm、高さ1.1cm、厚さ1.5mmである。縁部に2ヶ所加撃痕があるほか、外面天井部には鍬によると見られる打撃痕が残されている。天井部内面には布目痕が認められる。布目痕は縦糸と横糸の太さ、密度が異なっており、太さ約1mmの横糸は3本/cm程、太さ約0.05mmの縦糸は14本/cm程の密度である。なお『桜井町史　続』では「吹寄織」としている。重さは263gをはかる。(62）は銅製筒である。(61）と組み合う。口径16.2cm、器高13.4cm、底径15.9cmをはかる。一枚の銅板を丸めて側板とし、両端を1.1cm重ねて3ヶ所鋲留している。底板は嵌めこんでいる。銅板の厚さは多くの箇所で1.5mmであるが、側板鋲留箇所の外側銅板は端部の厚みが1.0mmと薄くなっている。胴部

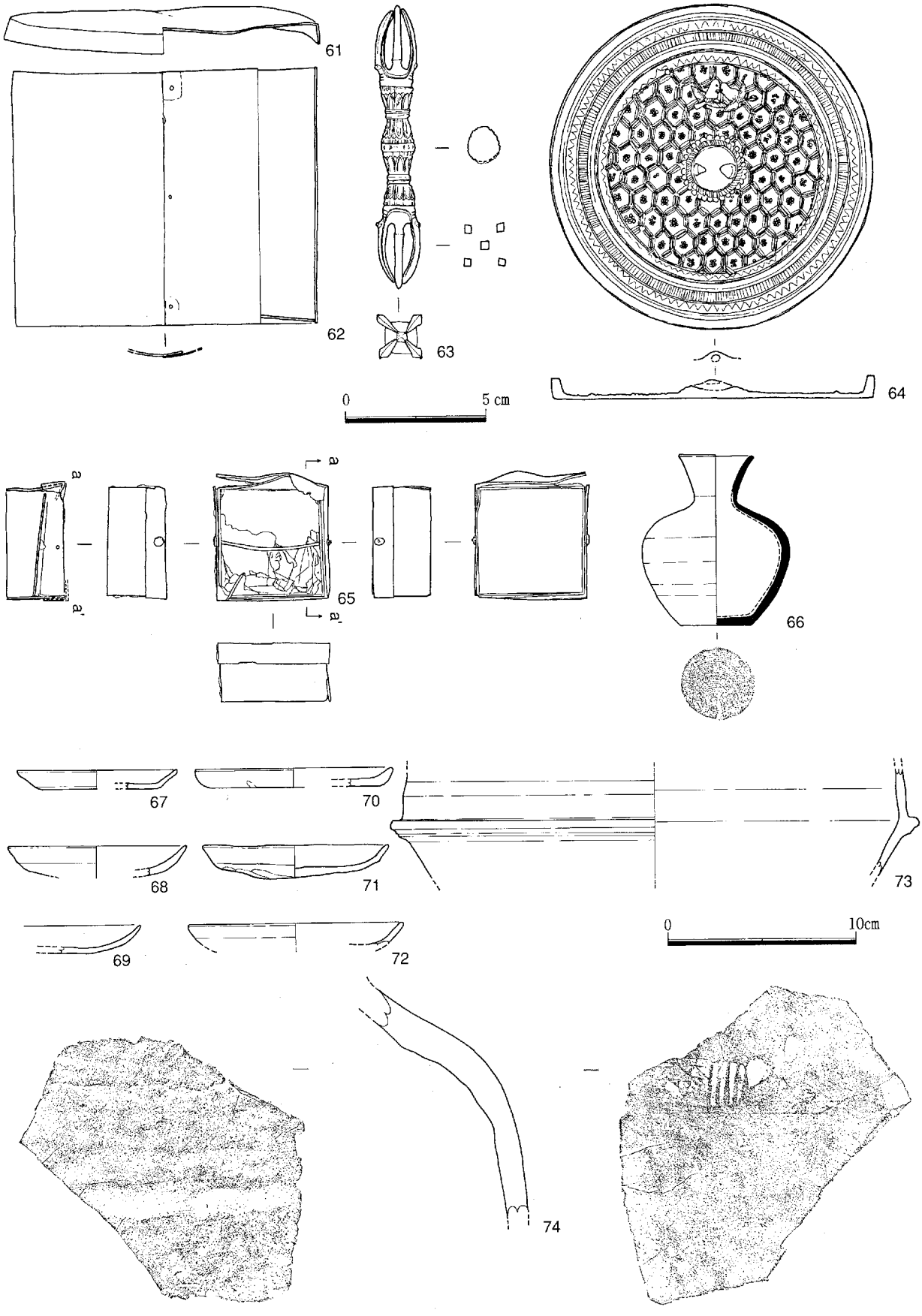


図13　談山神社保管遺物（S＝1/3　63、64はS＝1/2）

外面には紙と見られる繊維が付着している。内面には完周する形で蓋と同じ布目痕が残存しており、縦方向が太い糸が用いられている。胴部内部に土が入っているため正確な重さは不明であるが、約800gである。筒の口縁部は蓋の加撃痕に対応するところが歪んでおり、蓋がついた状態で打撃が加わったものと考えられる。また、はめ込んでいた底板が斜めに浮き上がっている。また筒内部には土に混じって紙片や布片が認められた。布片の糸の密度は18本/cm程度である。布片の一部は、黒色の物質と固着している。

(63) は金銅製五鈷杵である。各部位の名称は関根俊一氏にしたがった[7]。長さ10.1cm、最大幅1.6cm、把部の幅1.2cm、重さ42gをはかる。把の両端に中鈷とそれをかこむ4本の湾曲する脇鈷が付属する。脇鈷の湾曲は緩やかなカーブを描く。鈷の断面が四角形となる。脇鈷には瘤が付き、細い刻線が2本刻まれる。把には蓮弁が施され、2条の約条で括られている。蓮弁は単弁で、把の中央の鬼目は鋳造ではなく刻みを入れただけの単純なものである。手で握るには把部が小さいため、ミニチュア品か、旅先に携行するための旅壇具式である可能性がある。

(64) は亀甲地双雀鏡である。面径11.5cm、外縁高0.8cm、重さ185gをはかる。外縁は直角式中縁で、鏡胎は厚さ1.5mmと薄い。背面は1本の界圏があり、単圏中線である。界圏をはさんで内区に2本、外区に2本の圏線がまわる。内区には亀甲繋ぎ文で埋められ、その外側に鋸歯文が巡る。外区は内側から順に竪線紋、鋸歯紋で充填される。鈕座は花芯座鈕で断面円形の鈕穴が貫く。外区に鋸歯文や竪線文があることから、いわゆる擬漢式鏡[8]である。

内区の亀甲文は、鋳型になる真土に3本の櫛歯状原体で手彫りした文様で構成されている。双雀が描かれた位置を上方とすると、縦方向の櫛歯文様を斜め方向の櫛歯文様が切っていることが確認できるところが多い。1回に施された3本の線は、原体が真土に対して斜めに入ったために、線ごとに太さと高さが異なっている。原体が斜めに入ったのは、工人の腕と工具の位置関係によるものだろう。縦方向の櫛歯文様は上から7段目までは左側が高く盛り上がり太い。8～10段目までは右側が盛り上がる。右肩下がりの櫛歯文様も上から6段目までは下側が太いが、7～10段目は上側が太い。これは、施文する際に工人の位置が変わったためとみられる。一方で右肩上がりの櫛歯文様は、全て上側が太く、工人が位置を変えなかったものと考えられる。亀甲紋の内部には7点を基本として点で菊花紋が描かれている。場所によって施文のばらつきがあるので、1点ずつ施したか、文献に見えるように松葉などを束ねた柔らかい工具で一気に刺突したものと考えられる。亀甲紋や菊花紋は圏界内側の圏線を切っており、鋳型には圏線→内区文様の順で施文されている。外区の鋸歯文は朦朧としている。竪線紋は1cmあたり約10本施されている。また、鏡面には長さ7.8cm以上、幅0.5cmの棒状のものが接していた痕跡が残る。

(65) は直方形の銅製小箱である。箱本体と蓋から構成されている。箱はほぼ完形である一方、蓋は天井部が破損しており天井がほとんど残っていない。小箱本体は高さ3.1cm、幅が一辺5.7cmの平面正方形となる。蓋は高さ1.1cm、一辺の幅5.9cmでかぶさった状態で高さ3.2cmとなる。銅板の厚さは1.0mm、重さ105gである。箱本体は接合してある側板と独立した底板からなり、底板は一方が押し上げられ傾

斜している。また、箱と蓋を貫通する目釘は断面がやや楕円形で蓋の外側から鋲で固定されている。片側には目釘本体の先端がみえている。蓋と箱本体を貫通しているため蓋は外せなかったようである。また箱内部には紙が絡まって入っている。

(66) は須恵器壺である。口径4.0cm、肩部径7.8cm、底径3.8cm、器高9.0cmをはかり、口縁部が僅かに欠けるのみで、ほぼ完形である。口縁部は丸く納め、肩部は張る。高台はつかない。体部は回転ナデ調整される。色調は灰色で硬質に焼成されている。底部は回転糸きりで切り離され、右回転である。口縁部と肩部に緑錆が付着しており、特に口縁部にべったりと認められる。銅製筒、銅製小箱、亀甲地双雀鏡いずれかと接して埋納されていたとみられる。

(67) ～ (72) は土師器皿である。『桜井町史　続』では記載がなく、銅製筒等に伴っていたとは言えない。(71) は灯明皿として用いられている。底部はユビオサエである。口縁部は一段ナデで調整される。(73) は焙烙である。鍔径は28.0cmをはかる。鍔の下はススが付着しており、熱を受けて脆くなっている。内外面共にナデである。形態としてはやや特異で、鍋状になるとみられる。(74) は焼締陶器大甕の肩部である。小片のため径がはっきりしないが、肩部径で約60～80cmになるとみられる。外面に押印紋が認められ、常滑産と考えられる。色調はにぶい橙色で、焼成は良好である。

5. 談山神社境内採集遺物

ここで紹介するのは、談山神社境内で表採された遺物である。

(75) は唐草文軒平瓦である。顎はナデ調整する。色調は橙色を呈し、堅緻な焼き上がりである。(76) も唐草文軒平瓦である。凹面はミガキを施す。黒色を呈する。(77) は巴紋軒丸瓦である。裏面はナデ

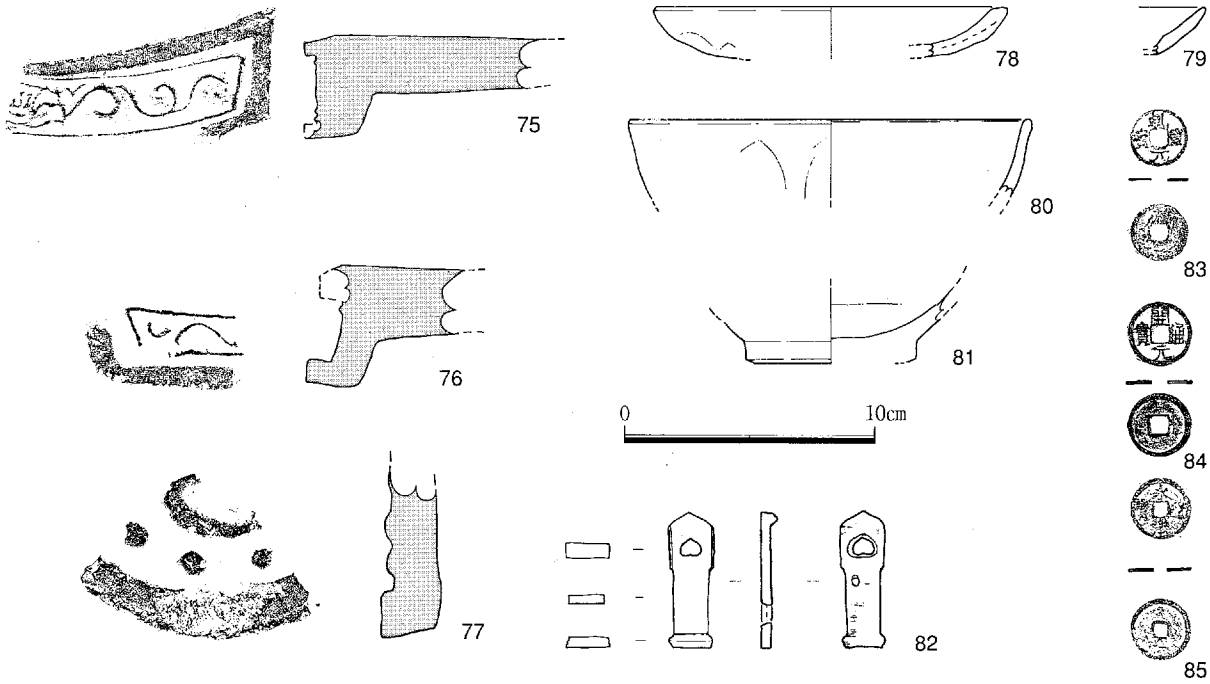


図14　表採遺物（S＝1/3）

調整される。(78) は土師器皿である。体部は一段のナデ調整が施されている。粘土紐が接合する箇所であり分厚くなっている。(79) は土師器皿小片である。口縁部内外面はナデ調整されており、内面は強いナデ調整がなされている。口径は不明である。

(80) は龍泉窯系の青磁碗口縁部である。外面体部に鎬蓮弁文を施す。(81) は白磁底部で内面にのみ釉が施される。外面は底部も含めケズリ調整される。体部外面と高台の側面は同時に調整されているようである。(82) は青銅製品である。猪目文の透かしが施される。一面にはヤスリ痕跡が認められる。切断時のバリが各所に残っているため未成品の可能性があろう。(83) は開元通寶（初鋳621年）である。(84) は乾元重寶（初鋳759年）である。摩滅が著しい。(85) は永楽通寶（初鋳1408年）である。

6. まとめ

（1）本殿平坦地の変遷過程について

本調査地は、本殿が立地する平坦地が造成されるまで急傾斜地であったことが推定できる。平坦地はその傾斜地を大きく削平することで造り出している。いつこの造成が行われたのか不明であるが確実に中世以前に遡る。

その後土坑が掘削され第二次世界大戦時中に出土した一連の遺物が埋納される。その上には整地される。8層の存在からある程度土坑上面は流水があったと考えられ、露出していたものと考えられる。整地は2度にわたりなされており、間にはピットが認められることから、何らかの構造物があったようである。新しい整地層の上には礎石が置かれ、葺石据付層がそののちに施されている。

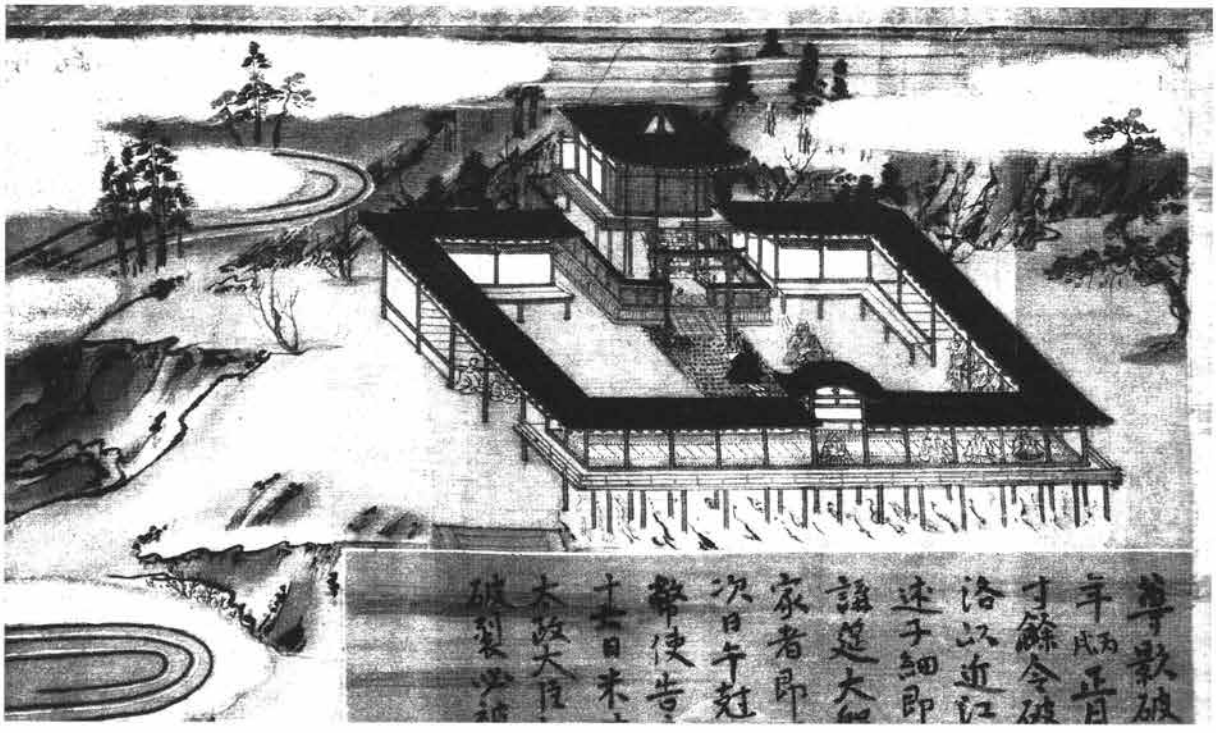


図15　多武峯縁起絵巻に描かれた本殿（註記9）文献より引用）

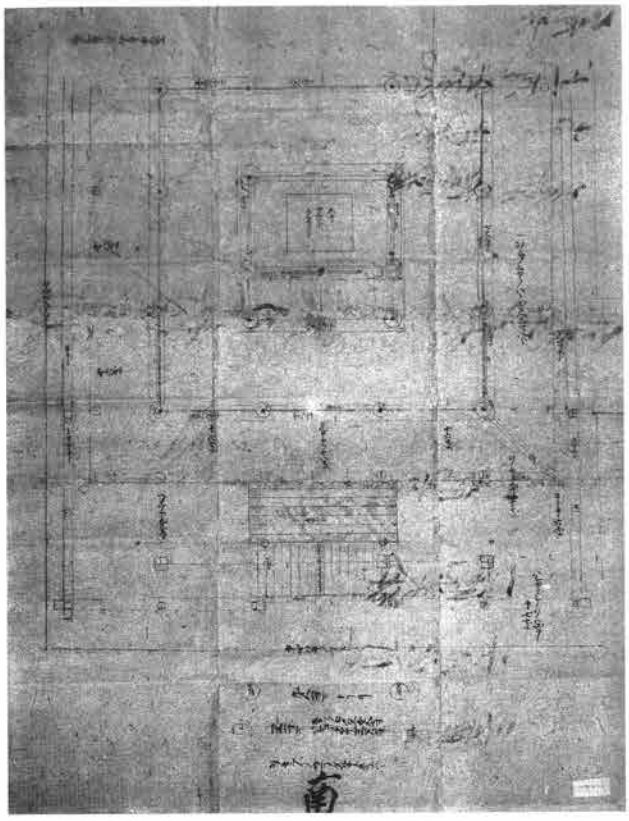


図16　本殿平面図（註記９）文献より引用）

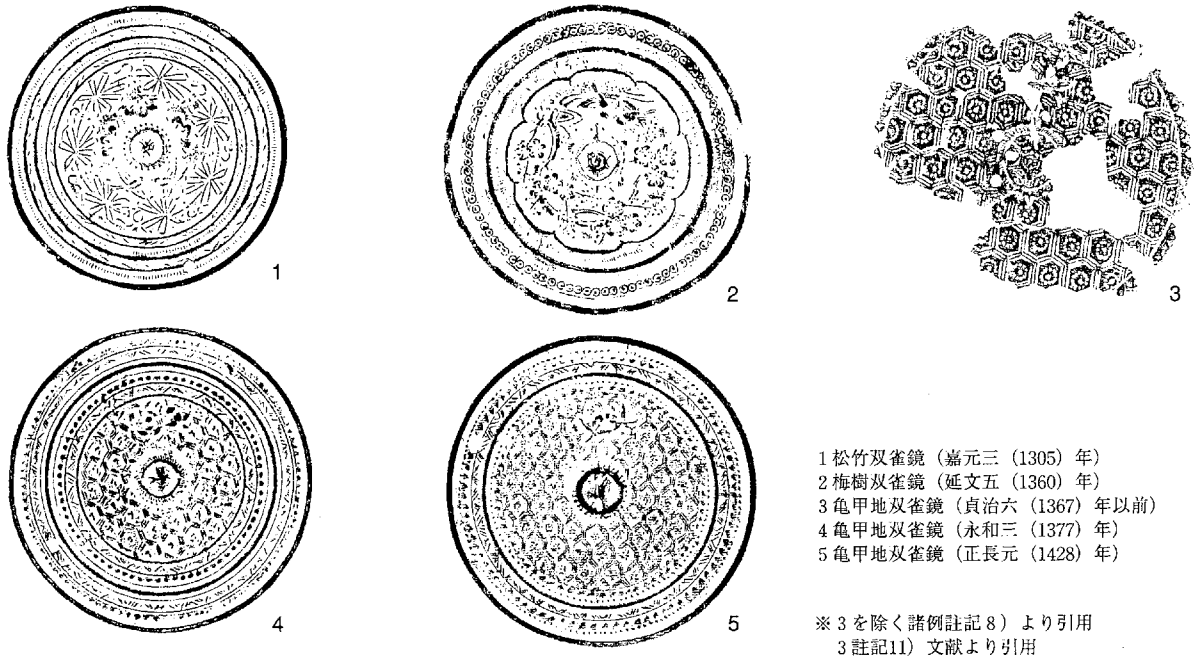
図15に掲げた多武峯縁起絵巻は後世の補足が多いものの、その書風から室町時代中期の作と考えられている。図15の場面は詞書によれば永承元年（1046年）に御神像が破裂し、周防前司頼祐が奉幣使として参社している場面が描かれているが、この図は縁起が描かれた室町時代の情景を描いていると考えられている[9]。絵図に描かれた現在の楼門前の階段は、天文十五年（1546年）に設置されたことが石材に残された銘から推定することができる。よってこの場面は1546年以降の情景を写したものと考えられる。

絵図をみると、本殿基壇外装は石で巡らされている。さらに基壇上面の一部には格子目が描かれている。これは敷石を表している可能性があろう。ただし絵図を見るかぎりこの格子目は本殿床下には及んでいない。これが本殿床下は土敷であったことを示すのか、描画上敷石を省略したのかわからない。本殿の柱は礎石の上に立っており、礎石建ち建物であったことがわかる。図の礎石は廊下を支える礎石であるが、本殿を支える柱も礎石建であったと考えてよいだろう。

防空壕の断面観察では礎石を再置した痕跡は認められなかった。このことから、現在の基壇が築かれてから礎石は移動していないといえよう。また礎石の矢穴が先Ａタイプの可能性があり、戦国期の所産とみられる。現在の礎石据付に伴う層から出土した土器片が15世紀頃と推定されることもこの推論と矛盾しない。このことから現在の基壇は16世紀後半にはすでに完成していたといえる。これを裏付けるように、永禄二年（1559年）の本殿造営図には現在の本殿と変わらない間取りの建物が描かれている（図16）。

ただし、現在の本殿とは異なる部分も存在する。多武峯縁起には本殿前には現在存在しない鳥居が描かれている。この鳥居は、永禄二年（1559年）の本殿造営図や、享保七年（1722年）の絵図[10]にもみえることから、江戸時代前半までは存在していたと考えられる。永禄の造営図には、本殿前の鳥居の幅は「九尺一寸」と書かれており、享保七年（1722年）の絵図でも「鳥居間九尺」と書かれている。この幅は現在の告文使着座の石敷き部分の幅と一致する。現在石敷きには鳥居の痕跡が認められないので、現在の本殿前石敷きは1722年以降に造られたと考えられる。これは享保十九年（1734年）の本殿以下造替修理に伴う可能性がある。

また現在本殿前石敷に設置されている銅燈籠は「譚峯廟前隻鐙臺　宝暦五乙亥秋造」と陽鋳されて



1 松竹双雀鏡（嘉元三（1305）年）
2 梅樹双雀鏡（延文五（1360）年）
3 亀甲地双雀鏡（貞治六（1367）年以前）
4 亀甲地双雀鏡（永和三（1377）年）
5 亀甲地双雀鏡（正長元（1428）年）

※3を除く諸例註記8）より引用
3註記11）文献より引用

図17　出土鏡の類例

いる。このように、本殿周辺は江戸時代にも度々改変を受けていたことがわかる。江戸時代の輪宝が再堆積土から出土したことは、これらの改変にともなって埋納された可能性が高い。ただし、整地層と土坑を16世紀後半以前と考えると、近世の遺物を埋納した遺構は防空壕断面には検出されていないことになる。

（2）銅製筒等の埋納時期と性格

銅製筒等の埋納時期については、『桜井町史　続』では鎌倉中期以降、室町中期以前と推定しており、その性格を本殿の鎮壇具ないし経塚と推定している。

図17の（1）のような擬漢式鏡で最古の紀年銘をもつ個体は鹿児島県姶良市蒲生八幡神社所蔵の松竹双雀鏡であり、鏡面に嘉元三年（1305年）の針書がある。最新の記年銘鏡は奈良県奈良市法隆寺西円堂所蔵の文明五年（1473年）の祈願文書がある楓葉散双鶴鏡である。亀甲地に相接する双雀を配置する構図をもつ鏡としては、平安京八条三坊から、（3）の貞治六年（1367年）以前に製作されたと考えられている擬漢式亀甲地双雀鏡の鋳型が出土している[11]。また、他に法隆寺所蔵の正長元年（1428年）の墨書をもつ鏡や永和三年（1377年）銘をもつ鏡がある。

図13の（64）は鋸歯文・竪線文を伴うので、青木豊氏の擬漢式鏡Ⅰ類に含まれる[12]。竪線文の間隔は密で、法隆寺西円堂所蔵の文明五年銘鏡（1473年）と同時期まで下るとは考えにくい。また変則的な鋸歯文を採用しない点も、時期が古いことを示している。鏡縁は外傾式中厚を採用している。時期が下る図17の（2）の延文五年（1360年）梅樹双雀鏡では直角式の鏡縁を採用しており、これらよりも古く見るべきであろう。ただし平安京左京八条三坊三町出土の亀甲地双雀鏡の亀甲紋の中の菊紋が12点程度と多く点を打ち、丁寧に施しているのに比べて、本例の亀甲紋の中の菊紋は6点程度で、施文

も粗い。これを新相として考えるならば、本例の制作年代は14世紀前半の平安京例よりも遅く、14世紀中頃から後半と考えるのが妥当であろう。

金銅製五鈷杵については関根俊一氏よりご教示を頂いた。約紐が2条である点や、脇鈷と本鈷の頂点がほぼ揃うこと、把部の鬼目が簡略化されて刻みになっている点を考慮すると、室町時代に製作されたと考えてよいとみられる。

須恵器小壺は古代の壷Mであると考えられる。形態からみて8世紀末から9世紀前半の所産と考えられる。口縁部の形態から陶邑産の可能性が高い。他の遺物に比べ時期が著しく遡るが、口縁部に緑錆が付着していることから他の銅製品と共伴していた可能性が高い。近隣では同タイプの壷は長谷寺でも出土している。長期間伝世した後に埋納されたものと考えられる。

本調査時出土の輪宝は、戦時中出土遺物と共伴していた可能性も考えられるが、漆箱に一括して埋納されていた遺物のうち輪宝のみを取りこぼすことは考えにくく、また製作時期も江戸時代と下ることから別の時期の埋納に伴うと考えるべきだろう。これらの遺物の年代を総合すると、漆塗り木箱が埋納されたのは、鎌倉時代まで遡る可能性は低く、埋納時期は14世紀中頃以降と考えられる。前項で述べたように、現在の基壇が16世紀中頃以前に造られたものであると考えられるので、この200年の間に埋納された可能性が高い。

この埋納物の性格ついては、経塚の可能性と本殿地鎮具の可能性が考えられるが、後者の可能性が強いだろう。まず銅製筒形容器は経筒容器としては異例に器高が低い。また経塚に多く認められる伴う石が土坑断面や防空壕埋土に確認できず、漆塗りの木箱に収められていたとされる点は経塚としては珍しいことが挙げられる。またもし経塚であったならば、本殿基壇は経塚の封土を取り壊して基壇を設置したこととなる。以上のことから埋納物は地鎮具と考えるほうが妥当であると考える。以上のことを念頭におくと、1449年（宝徳元年）、1520年（永正十七年）のいずれかの本殿の再建に伴う地鎮具の可能性があろう。しかしながら、本殿基壇は埋納物が土坑に収められてから現在の形になるまでに2度の整地を行なっていることと、土坑が本殿の真下ではなくやや東南にはずれて穿たれていることを鑑みると、必ずしも本殿基壇に伴うものではなく、それ以前の建物への地鎮具であった可能性も考慮する必要がある。

（森）

【註記】

1）小栗明彦　2004「多武峰遺跡群―西口遺跡第3・4・5次調査―」『奈良県遺跡調査概報2004年度』 橿原考古学研究所
　青柳泰介　1997「西口遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1996年度』 橿原考古学研究所
　小栗明彦　2002「多武峰遺跡群―西口遺跡第2次調査―」『奈良県遺跡調査概報2002年度』 橿原考古学研究所
　小栗明彦　2003「多武峰遺跡群―飯盛塚遺跡―」『奈良県遺跡調査概報2003年度』
　川部浩司（編）　2004「多武峰遺跡群　針道地区」『奈良県遺跡調査概報2004年度』 橿原考古学研究所
　廣岡孝信　2003「多武峰遺跡群―針道地区第1次―」『奈良県遺跡調査概報2003年度』 橿原考古学研究所

2）福家恭（編）　2011『多武峰念誦崛地区の研究―増賀上人墓及び中・近世石塔群の調査―』 桜井市教育委員会
　福家恭　2010「桜井市内出土遺物について」『平成20年度国庫補助による発掘調査報告』 桜井市教育委員会

3）談山神社内おける戦時中の状況は社務所日誌に記されている（室原慶和氏ご教示による）。昭和20年ごろになると桜井市内でも空襲警報がたびたび発令され、戦局が一段と緊迫した状況となる。社務所日誌からは昭和20年の7、8月にかけて急

速に談山神社における空襲対策がおこなわれている様子が窺える。日誌には、防空壕の掘削に関しての直接的な記述がないが、空襲から御神像を守る為に掘削されたのは明らかであり、一連の空襲対策の工事でおこなわれたと思われる（『桜井町史』では昭和18年に掘削され、一連の遺物が出土したと書かれているが、社務所日誌には特に記されていない。当時の状況をみても昭和20年の間違いか）。御神像も８月１日に避難のために仮殿に遷座されるなどの記述がみられる。仮殿は通常本殿の西に位置する権殿を指すことが多いが、当時は床下の防空壕を「仮殿」としていた可能性もあり、実際に使用されていた可能性もある。

4）森岡秀人・藤川祐作　2008「矢穴の型式学」『古代学研究』180

5）森川辰蔵　1957「第二章　文化的遺物」『桜井町史　続』

6）森下恵介・立石堅志　1986「大和北部における中近世土器の様相―奈良市内出土資料―を中心として」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会

7）関根俊一　2011『金剛鈴と金銅杵』至文堂

8）青木豊　1997「所謂擬漢式鏡に関する考察」『國學院大學考古学資料館紀要』13

9）宮地直一監修　1942「多武峰縁起」「談山神社本殿等指図」『神社古図集』日本電報通信社

10）福家恭　2011『多武峰念誦崛地区の研究―僧賀上人及び中近世石塔群の調査』桜井市教育委員会

11）網伸也　1996「和鏡鋳型の復元的考察―左京八条三坊三町・六町出土例を中心に―」『（財）京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』3

12）註記７）に同じ

【参考文献】

廣瀬都巽　1928「和鏡」『考古学講座』

松本洋明　1988「十六面・薬王寺遺跡の中・近世土器に関する考察」『十六面・薬王寺遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物第54冊

中野晴久　1995「中世陶器　常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編

佐藤直子　1996「法隆寺西円堂奉納の擬漢式鏡について」『Museum』544

村木二郎　2006「和鏡」『鎌倉時代の考古学』

第３節　纒向遺跡第172次発掘調査報告

1. はじめに

纒向遺跡は弥生時代後期末から古墳時代前期を中心とする大規模な遺跡として知られ、近年は国家形成に関わる重要な遺跡として注目を集めている。桜井市北西部の大字太田・巻野内・辻・東田を中心に、東西２km、南北1.5kmに及び、桜井市北東部より流れでる纒向川や烏田川の扇状地上に立地している。

纒向遺跡第172次調査は大字東田358番地の３において個人住宅の建設にともなう範囲確認調査としておこなった。調査区は長さ８ｍ、幅4.8mの台形で面積は約42㎡、調査日数は平成23年８月５日から９月７日である。

本調査区は前方後円墳成立に関わる古墳として知られる纒向石塚古墳、勝山古墳の間に立地している。纒向遺跡の中でも本調査区付近から大字辻地区一帯は庄内式期の遺構が集中する地区として知られており、纒向石塚古墳第２次調査では弧文円板が出土している。勝山古墳では第４次調査で北クビレ部周濠の調査がなされており多量の木製品が出土している。第５次調査と第６次調査では周濠の南外肩が検出されており、172次調査地は勝山古墳や纒向石塚古墳周濠の外にあたることがわかる。よって両古墳の間にどのような遺構があるか関心が寄せられた。また本調査区は纒向遺跡第４次調査に際して検出されたいわゆる「纒向大溝」の北溝の北東側延長部分に近く関連遺構の検出も期待された。

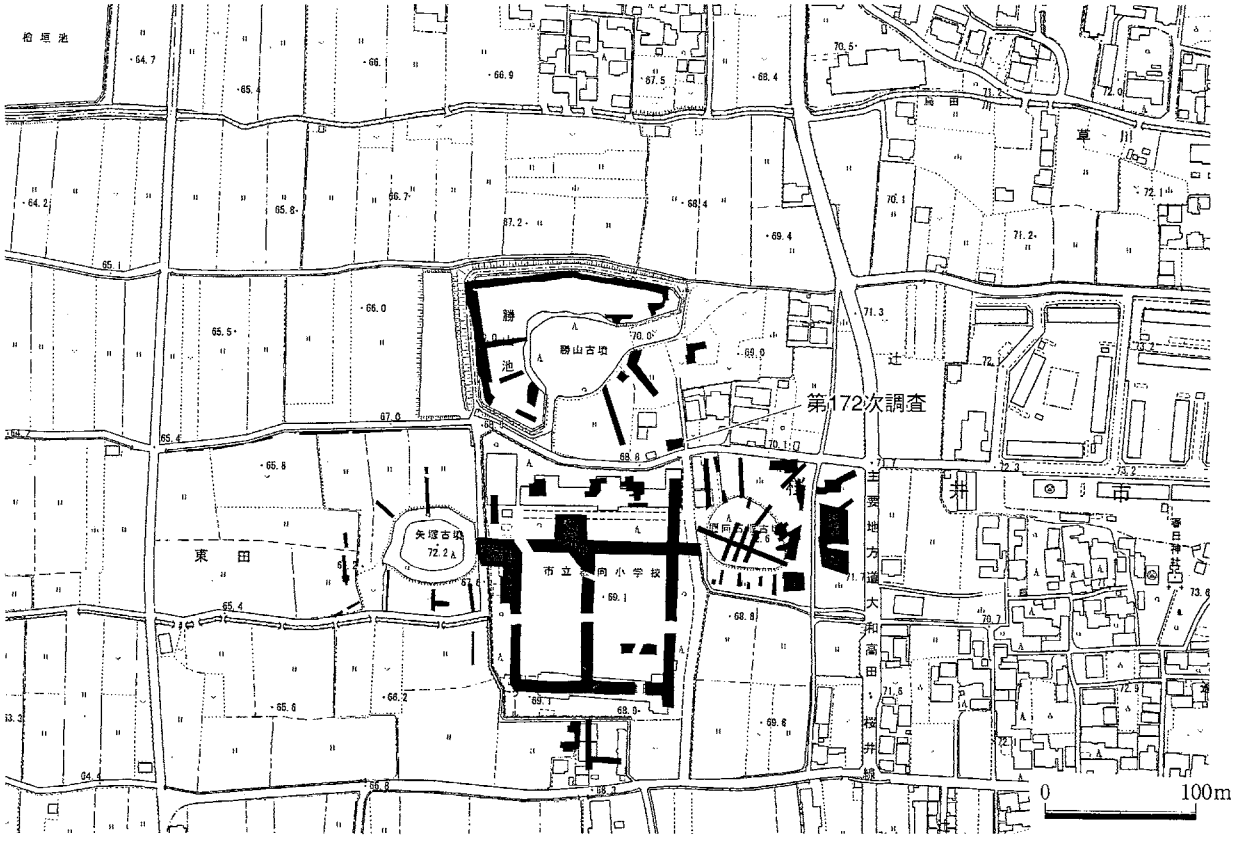


図18　調査区位置図（S＝1/5000）

2. 基本層序（図21）

本調査区の基本層序は、現代の盛土である（1層）、旧耕作土の（2層）、床土（3層）、古墳時代以降の遺物包含層（9～12層）、地山層（78層、81、82層）となる。遺構は古墳時代以降の遺物包含層層と地山を基盤に形成されていた。

3. 検出遺構

調査の結果、中世と庄内式期から古墳時代中期の遺構を確認した。

中世の遺構　素掘り溝は古墳時代以降の遺物包含層を基盤として検出した。埋土から出土した瓦器椀や土師皿から13世紀に形成されたとみられる。素掘り溝は正方位をとる（図19）。調査区内では東側で遺存状態がよく、西にいくほど悪くなる。正方位をとる素掘り溝は纒向石塚古墳第9次調査や纒向遺跡第79次調査など周辺調査でも検出されており、周辺は13世紀には耕地となっていたことがわかる。

中世の素掘り溝の掘削後、地山層を基盤として下層の遺構を検出した。

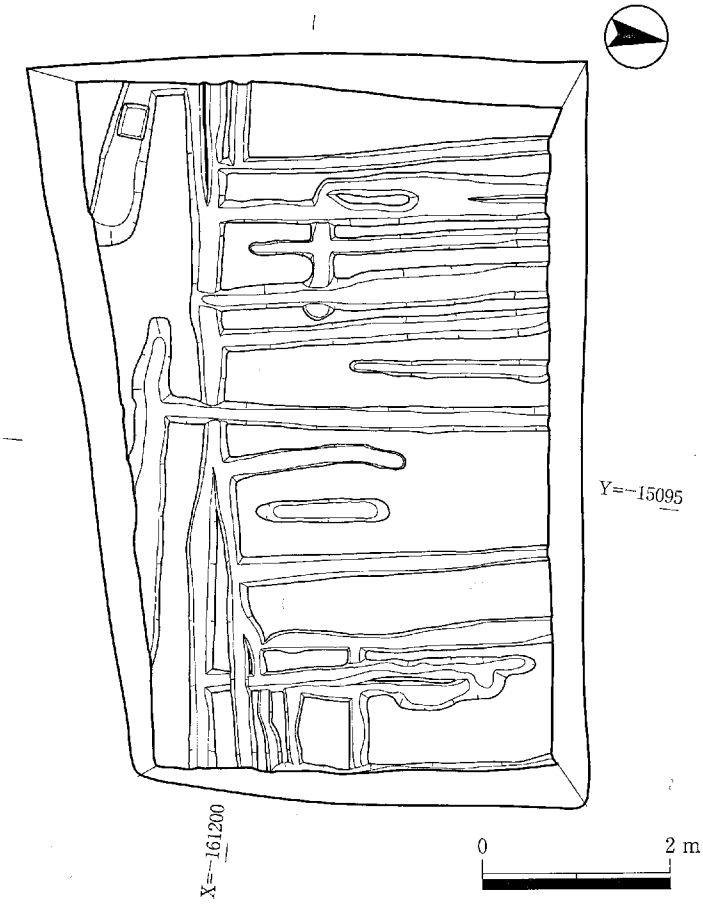
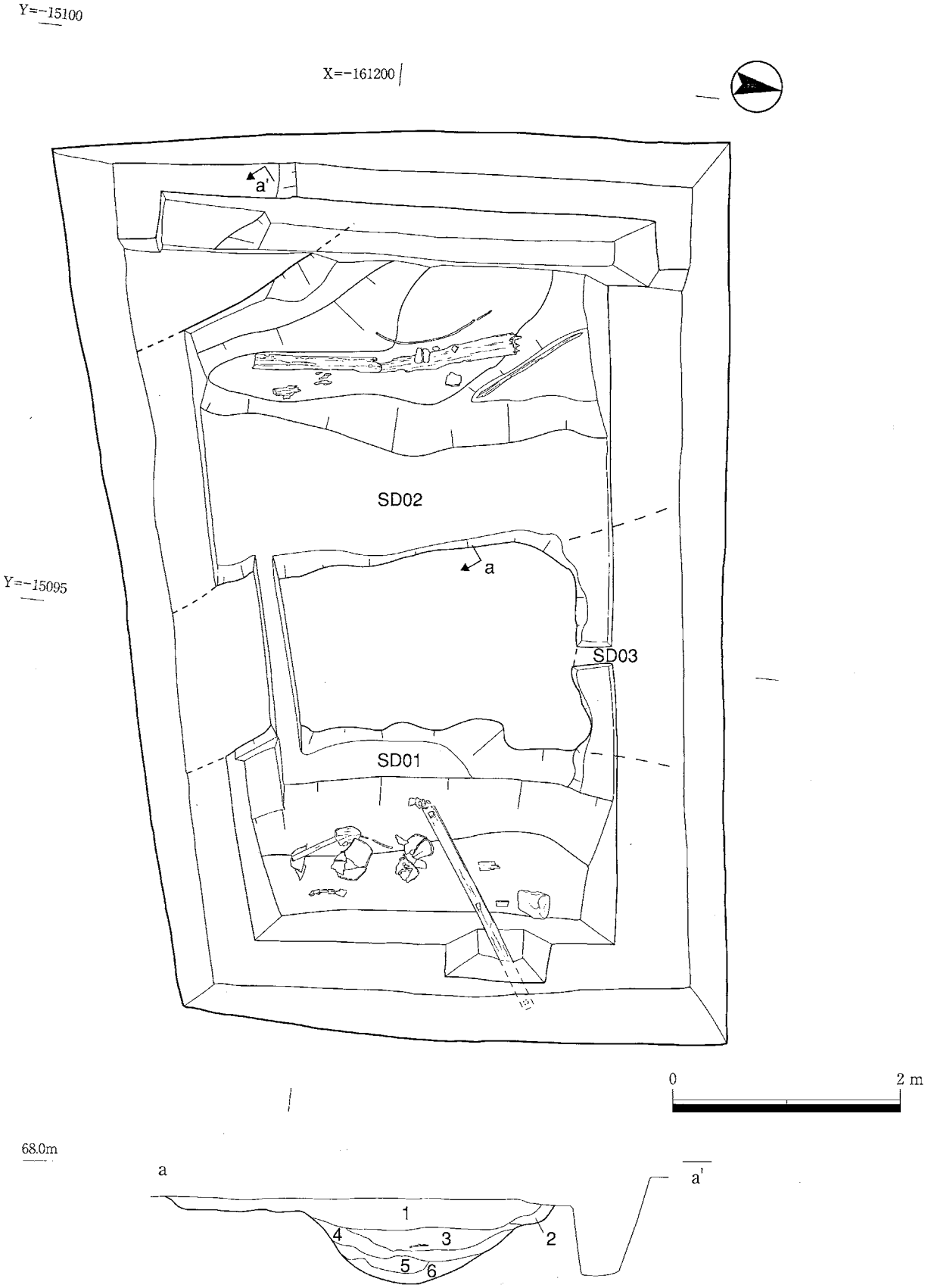


図19　調査区平面図1（S＝1/80）

SD01　SD01は調査区の東側で検出した溝である。SK01・SD05を壊している。西肩のみを検出しており、後述の板材（図29－38）取り上げ時に調査区東壁を掘削した際にも溝の立ち上がりを確認できなかったことから、少なくとも幅2.4m以上あるものと考えられる。深さは0.8mである。南北は調査区外に伸び西肩はゆるい円弧を描いている。西肩には幅0.3mのテラス面が認められる。埋土は最上層、上層（黒褐色シルト層）、中層（砂層）、中層（灰色シルト層）、下層（灰色砂層）、最下層（シルト層）からなり、流水と滞水が繰り返されたものと考えられる。遺物は土師器甑、加飾壺、埴輪片、鋤、建築部材などで、中層の灰色シルト層、下層（灰色砂層）と最下層（シルト層）の層理面で多く出土した。SK01・SD05を壊して掘削したためか、庄内式期の土器を多く含んでいる。SD01の掘削時期は最下層と下層の層理面から出土した甑や埴輪から古墳時代中期末と考えられる。古代・中世の遺物は全く含まないことからそれ以前に埋没している。中層からはB種ヨコハケを施す埴輪片や「L」字の枘穴をもつ板材、庄内式期の加飾壺が出土している。埋土に埴輪片を含むことと溝の西縁が弧を描くこ



1：10YR2/3黒褐色　細粒砂　同色のシルトブロックを含む
2：10YR2/3黒褐色　中粒砂
3：2.5Y2/1黒色　シルト　遺物多い
4：5Y 3/1オリーブ黒色　中～細粒砂
5：5Y2/1黒色　シルト　砂が混じる
6：2.5Y3/1黒褐色　細粒砂　砂ブロックを含む

図20　調査区平面図２・断面図（S＝1/50）

とから、SD01は埋没した古墳の周濠である可能性がある。

SD02　SD02は調査区の西側で検出した溝である。SD05とSD04を壊して掘削されている。所により前後するが幅3.0mをはかり、調査区外の南と北西側に伸びている。東岸から幅0.9mは検出面から0.1mと浅くテラス状になっており、それより西側では0.8mと深くなる。また全体に北側で深く南側では浅くなっており、南壁では検出面から0.2mの深さとなる。調査区外の南側で途切れている可能性がある。

埋土は大別して上層（黒褐色礫混じり砂層）、中層（灰色シルト層）、下層（シルトブロック混じり黒褐色砂層）からなり、中層からの遺物が多い。埴輪や土師器、板材が出土した。溝の形成時期は古墳時代中期末以降とみられる。中世までには埋没している。西肩はやや弧を描いており、東肩は直線的である。ただし東肩北側の未掘部分では弧を描いており全体として湾曲した溝であるといえる。埴輪片が出土していることからSD01と同じく埋没古墳の周溝である可能性があるが、調査範囲が狭いため確定的ではない。

SD03　SD03はSD01とSD02をつなぐように東西に走る溝である。北壁の近くで検出した。幅約0.5m、深さは一定しないが３～５cm程度の所が多い。埋土は単一の粗砂層であり、埴輪片が出土している。SD02の上層埋土の上にSD03の粗砂層が堆積している。

SD04　SD04は調査区の南西隅で確認した溝である。SD05を壊して掘削されている。SD02を完掘した段階で検出した。幅約1.8mをはかり、調査区の南壁と西壁の外に伸びている。SD04は検出面より深さ約0.4の断面方形の溝中央に幅0.6m、深さ約0.4mの溝がある２段構造となっている。構築順序としては①まず幅1.8m、深さ0.5mの溝を掘削した後に、②砂質の地山に類似する土で埋戻して溝を断面方形に整形し、③改めて２段目の溝を掘削している。その後④地山ブロックをふくむ黒褐色系の土で２段目の溝を埋め戻し、⑤さらに１段目の溝の外側を地山ブロックを中心とする土で埋めていき、⑥最後に溝の中心を地山ブロック混じりの黒褐色土で埋めている。上部はSD02に削平を受けている。後述するSK01の最終埋没時期が庄内式期であり、庄内～布留式期に構築されたものと考えられる。遺物は土師器が少量出土したのみであった。２段目の底面のレベルは北西方向に低くなっている。

SD05・SK01　SD05・SK01は調査区の中央で検出した土坑と溝である。当初調査区の南北外に延びていく溝と認識したが、掘削したところ土坑を検出した。土坑に溝がとりつく形態であったと考えられる。埋土の状況から、SK01の下部が埋まった後にSD05とSK01の上部が埋まったと考えられる。大まかにSD05とSK01の埋土が共通する上層と灰色砂層を主体とする中層、灰色シルト主体の下層に分けられる。SK01は検出面から深さ約１mを測る。東肩はSD02に壊されており全体の規模は不明である。ただし北側の上がりは検出できているため南北の長さは3.5m程度におさまる。SD05は深さ0.3m、幅1.3mをはかり、調査区外の南側に伸びる。SK01は地山上部の黄褐色土層を掘りぬいて湧水層まで掘削されていた。出土遺物から庄内式期の遺構と考えられる。遺物はほとんどが甕・壺であり、供膳具は全く出土しなかった。

SD06　SD06はSD02の底面で検出した遺構である。長さ2.2m、幅0.4mを測る。黒色砂層が堆積し

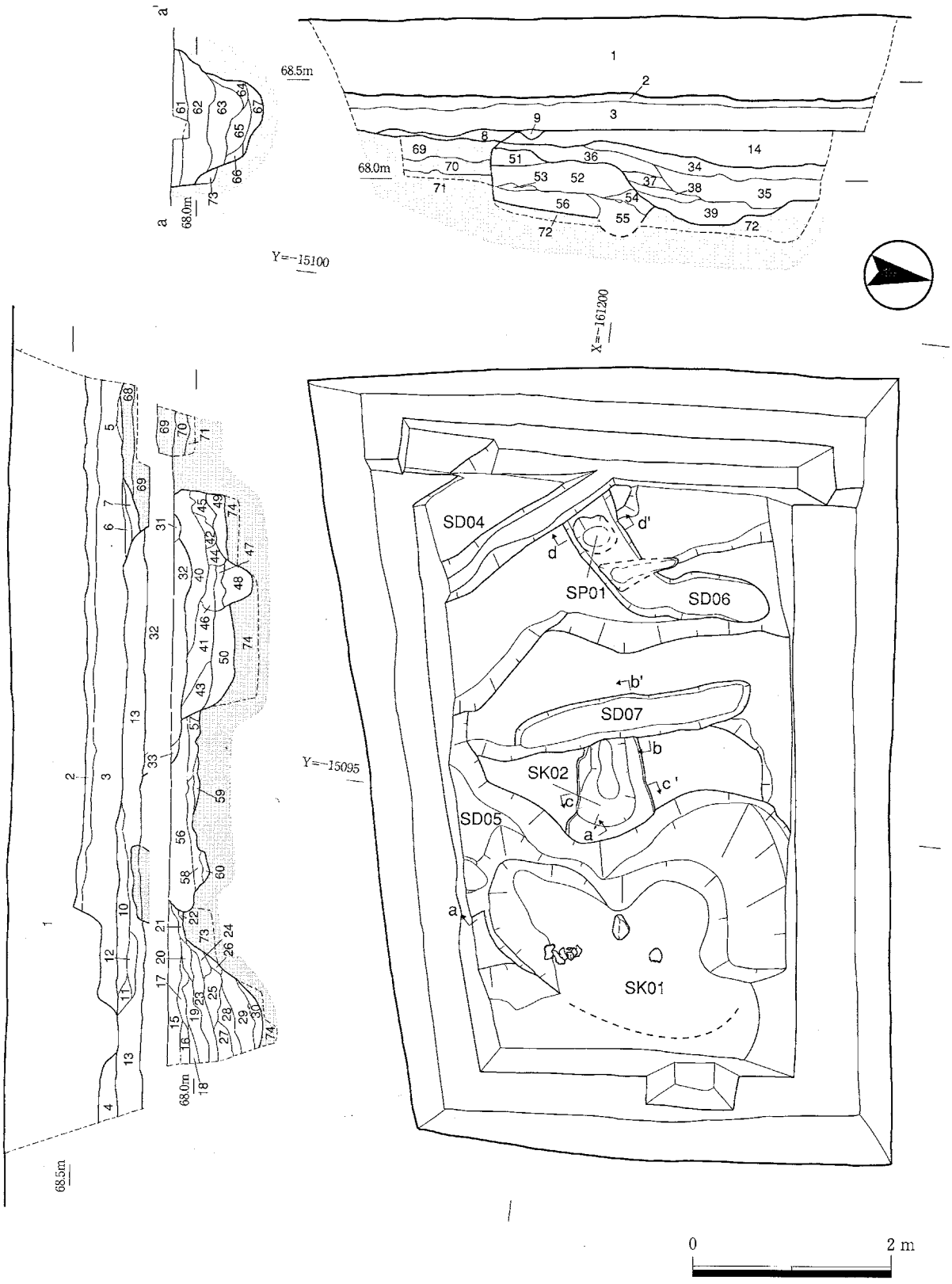


図21　調査区平面図３・断面図（S＝1/60）

表２　土層名一覧（纒向遺跡第172次）

層番号	土色・土質	備考
1	現代盛土	
2	7.5Y3/1オリーブ黒色細～極細粒砂　N4/0灰色のシルトブロック、径１cmの礫を含む	旧耕土
3	7.5Y4/1灰色細粒砂　（取り上げ青灰色砂混じり粘質土）	床土
4	7.5YR3/4暗褐色細粒砂　同色のシルトブロックを含む	
5	5Y3/2オリーブ黒色極細粒砂～シルト	
6	7.5Y4/2灰オリーブ中～細粒砂	素掘り溝埋土
7	7.5YR3/2黒褐色　極細粒砂～シルト	
8	5Y4/2灰オリーブ色　中～細粒砂	
9	10YR3/3黒褐色細粒砂　レキが混じる	
10	10Y3/1オリーブ黒色細粒砂　5Y3/2オリーブ黒色シルトブロックを含む	中世以前の包含層
11	10YR3/3暗褐色　極細粒砂	
12	10YR2/3黒褐色シルト	
13	10Y3/2黒褐色極細粒砂同色のシルトブロックを含む　径１cmの礫を多く含む	
14	10YR3/2黒褐色細粒砂　径１cmの礫を含む　埴輪を含む	
15	５YR2/1黒褐色細粒砂径１cmの礫を多く含む	SD01埋土
16	10YR4/1細粒砂　Fe沈着する	
17	10YR4/1細粒砂　Fe沈着が強い	
18	10YR3/1 黒褐色　極細粒砂	
19	N3/0暗灰色シルト	
20	10YR2/1黒色シルト　砂が混じる。	
21	10YR3/1 黒褐色中粒砂　径１mmの白砂を多量に含む	
22	7.5Y4/１褐灰色細～極細粒砂	
23	10YR3/1黒褐色中～細粒砂　径１cmの礫を含む	
24	10YR2/2黒褐色シルト　砂混じる	
25	2.5Y3/1黒褐色シルト　砂混じる	
26	2.5Y3/1黒褐色シルト	
27	10YR2/1黒色シルト	
28	10YR2/1黒色シルト　砂混じる	
29	N4/0灰色中～細粒砂	
30	N3/0暗灰色シルト	
31	10YR3/3暗褐色極細粒砂	SD02埋土
32	10YR2/3黒褐色シルト　黒色シルトブロック含む	
33	7.5YR2/3暗褐色極細粒砂　径１cmの礫含む	
34	2.5Y3/2黒褐色中～細粒砂　埴輪を含む	
35	5Y3/1オリーブ黒色シルト径１cmの砂を含む　遺物を含む	
36	10YR4/4褐色細粒砂	
37	5Y3/2オリーブ黒色径３～４cmのシルトブロックと中粒砂が混在する	
38	7.5Y3/2オリーブ黒色　中～細粒砂	SD02埋土
39	5Y3/2オリーブ黒色中～細粒砂　暗灰色シルトブロックを多く含む	
40	7.5YR4/3褐色シルト	SD04埋土
41	10YR4/6褐色シルト	
42	5Y2/2細粒砂オリーブ黒色　シルトブロックを含む	
43	10YR3/1黒褐色　中～細粒砂	
44	7.5Y2/1黒色　極細粒砂　シルトブロック含む	
45	10YR4/6褐色　極細粒砂	
46	10YR3/1黒褐色　細粒砂　礫を含む	
47	2.5Y3/1黒褐色　シルト　砂混じる	
48	N2/0黒色　細粒砂に黒褐色、黄褐色シルトブロックを含む	
49	5Y5/3灰オリーブ色　中～細粒砂	
50	5Y5/3灰オリーブ色　中～細粒砂	
51	7.5Y4/1灰色中～細粒砂　14層に似るが10YR4/6褐色のシルトブロックを含まない。	
52	7.5Y4/1灰色細粒砂に径３～５cmの10YR4/6褐色シルトブロックを含む	
53	10YR6/6明黄褐色細粒砂	
54	5Y3/2灰オリーブ色　細粒砂	
55	N3/0暗灰色極細粒砂～シルト　オリーブ褐色シルトブロックを含む	
56	10YR3/1黒褐色　中～細粒砂　暗灰色シルトブロックを含む	SD05埋土
57	10YR4/6褐色シルトがブロック状になって大量に入る　間を灰色砂層が埋める	
58	10YR5/1褐灰色　細粒砂	
59	10YR2/2黒褐色　極細粒砂　同色のシルトブロックを含む	
60	2.5Y4/2暗灰黄色　中～細粒砂	
61	56層と同一	
62	58層と同一	
63	5Y5/1灰色中粒砂　灰色シルトブロックを含む	SK01埋土
64	5Y2/1黒色　中粒砂　黒色シルトブロックを含む	
65	10YR4/1褐灰色シルト砂を含む	
66	7.5Y4/1灰色　極細粒砂　オリーブ黒色シルト含む	
67	7.5Y4/1灰色　中粒砂	
68	10YR3/2黒褐色　極細粒砂～シルト	地山
69	7.5YR2/1黒色シルト	
70	10YR4/4褐色　シルト	
71	10YR3/2黒褐色シルト	
72	2.5Y6/6細粒砂～極細粒砂　礫を含む	
73	7.5YR4/3褐色　シルト	
74	7.5GY7/1明緑灰色中粒砂	

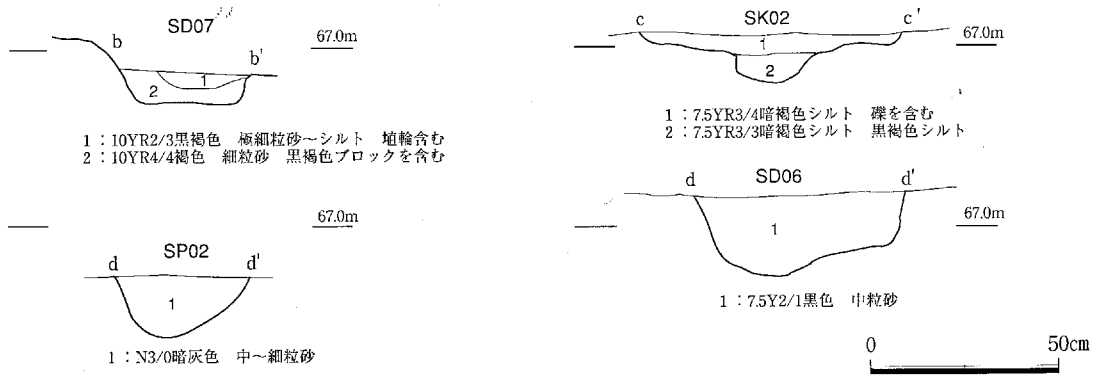


図22　遺構断面図（S＝1/20）

ていた。遺物は出土していない。西端がSD04に切られており、庄内式～布留式期以前である。

SP01・SP02　SP01はSD06の底面で検出した。灰色砂質の埋土をもち、遺物は出土しなかった。SP02は深さ約0.2mを測る。庄内式～布留式期以前である。

SD07　SD07はSD01の東肩に沿うように検出した溝である。長さ2.5m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。上面で埴輪片が出土したものの埋土中には遺物はなく、時期は不明である。埋土はシルトブロックを含む褐色土で硬くしまっている。SD01の東肩に沿うことから、あるいはSD01に関連する遺構の可能性もある。

SK02　SK02はSK01とSD01の間で検出した遺構である。SK01とSD01に切られており、庄内式期以前の遺構である。深さは検出面から0.1 mで、埋土は暗褐色のシルト層でよく締まった土である。遺物は出土しなかった。

4. 出土遺物

（1）～（3）は素掘り溝出土遺物である。（1）は素掘り溝の基盤層上面で検出した瓦器椀で、本来は素掘り溝に伴うものと考えられる。（2）・（3）は土師器皿である。（4）・（5）は包含層出土埴輪である。（5）は形象埴輪片とみられるがどのような埴輪か不明である。（6）は朝顔形埴輪の頸部とみられる。頸部に突帯がめぐる。

（7）～（12）はSD01出土遺物である。（7）はほぼ完形に復元できる土師器甑である。29層から出土したためSD01掘削に最も近い時期の遺物である。外面体部はハケメ調整、底部はケズリのちミガキ調整する。内面はケズリ調整でわずかにハケメがのこる。口唇部は内側に鋭く尖らせている。内外面には使用時のスス・コゲ痕跡が残る。（10）も甑の底部片であるが（7）とは別個体である。外面はケズリ調整する。（8）・（9）・（11）・（12）は埴輪である。（8）は外面をB種ヨコハケ、内面をタテハケで仕上げる個体で、突帯は大きくうねる。円形透かしがある。外面には赤彩が残存する。（9）は底径12.9cmを測る埴輪底部で、外面2段目はB種ヨコハケ、1段目はタテハケで仕上げる。内面はナデである。（11）は口縁部でややひらく形態となる。外面は摩滅のため調整は不明である。内面には細かな条痕がのこる。（12）は底径13.8cm

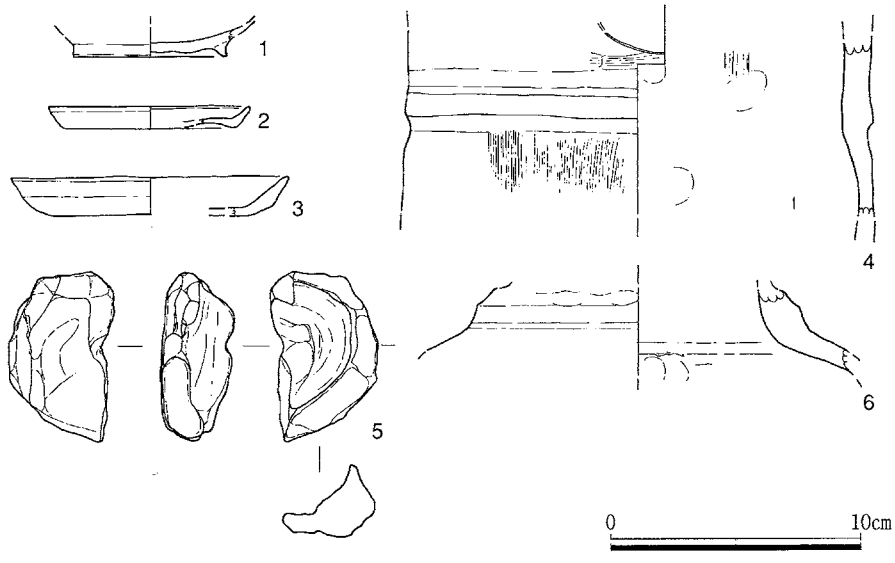


図23　出土遺物1（S＝1/3）

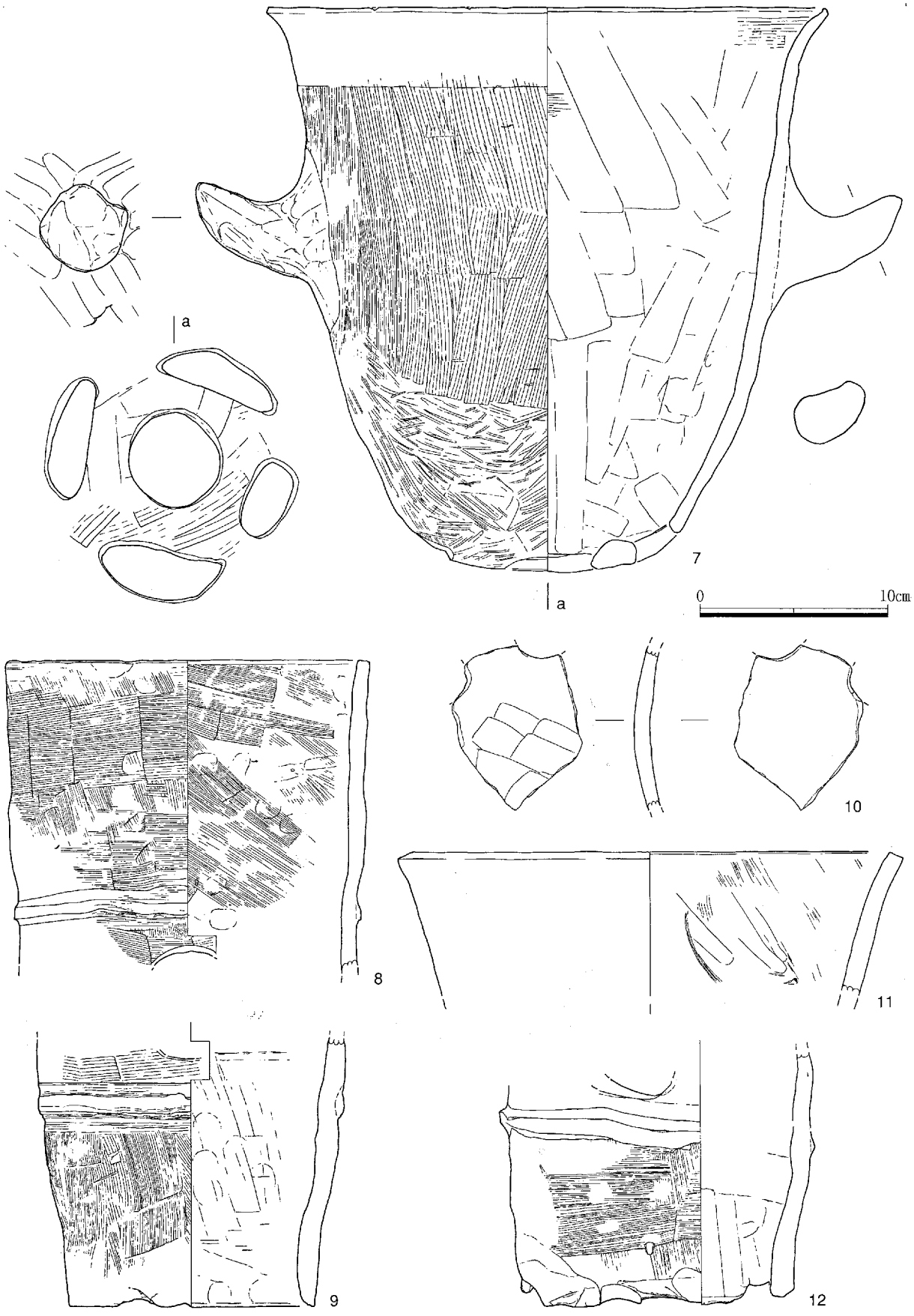


図24　出土遺物２（S＝1/3）

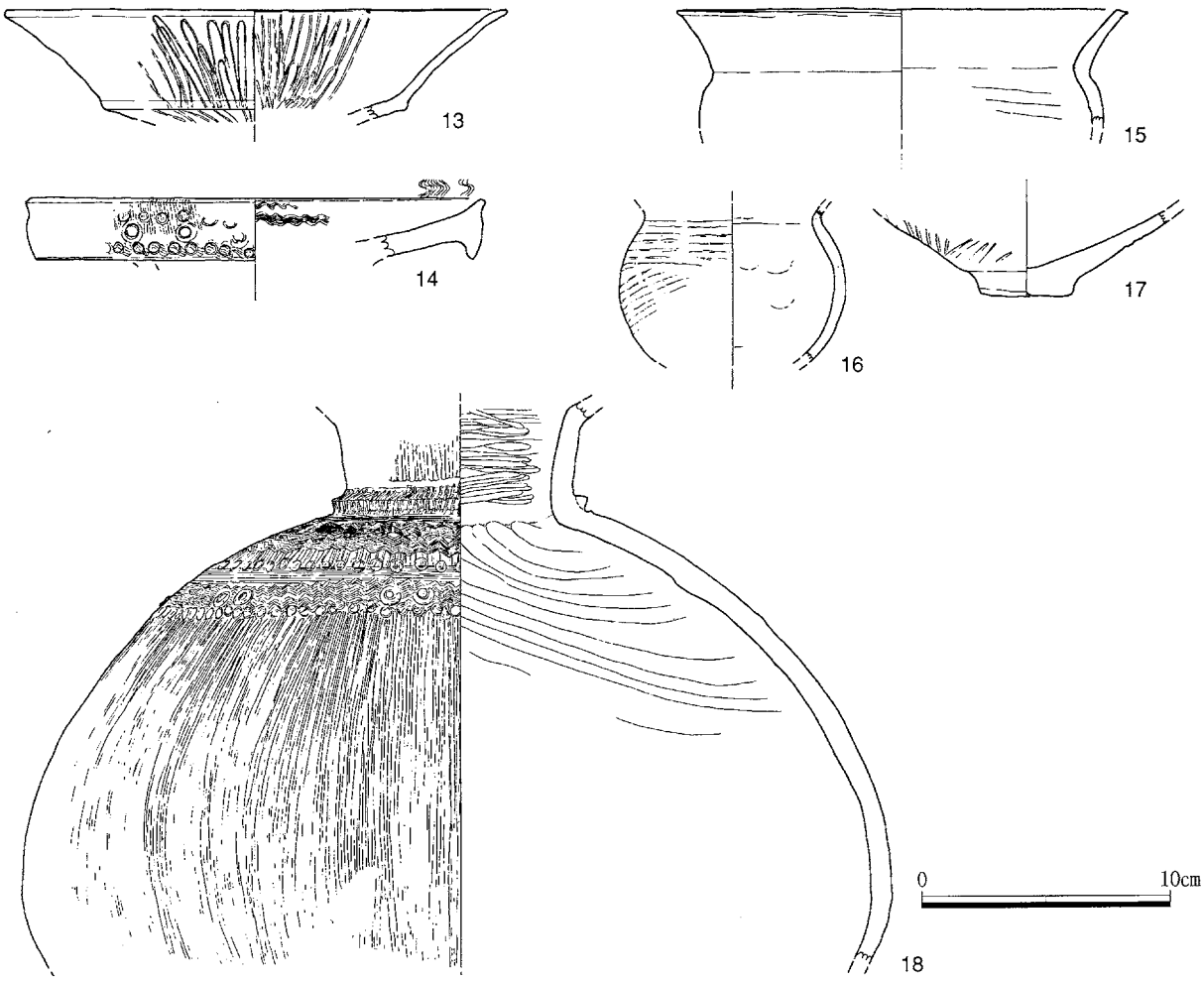


図25　出土遺物３（Ｓ＝1/3）

を測る。底部はユビオサエのため凹凸が激しい。１段目外面にもＢ種ヨコハケがなされる。内面はナデ調整される。内面には粘土紐痕跡が残る。

（13）～（18）もSD01出土遺物である。庄内式期の遺構であるSD05・SK01を壊しているためか、庄内式期の遺物も多く含んでいる。（13）は高坏の坏部である。内外面にタテミガキがなされる。（14）は壷の口縁部で、内面に２条の波状文、外面には波状文の後に円形刺突文、貼り付け浮文がなされる。小片であるため口径の復元にやや不安が残る。（15）は甕の口縁部で、口唇部は面取りされやや凹む。（16）は小型の甕である。外面タタキ、内面ナデ調整される。（17）は甕の底部である。外面にタタキが認められる。（18）は加飾壷で、後述する（37）と同一個体の可能性がある。ほぼ直立する頸部に突帯を巡らし、体部下半に最大径をもつ。体部上半の内面は強いナデ調整が認められる。外面には頸部にキザミの入る突帯と、肩部に櫛描文・竹管文・円形浮文が施される。櫛描文は５条を１段として上下４段施される。大きくは上下２段に見える。条痕からみてどの単位も同じ工具によって施されたものとみられる。

（19）～（21）はSD02出土土器である。（19）はおそらく短頸壷の肩部であろう。外面にカキメが認

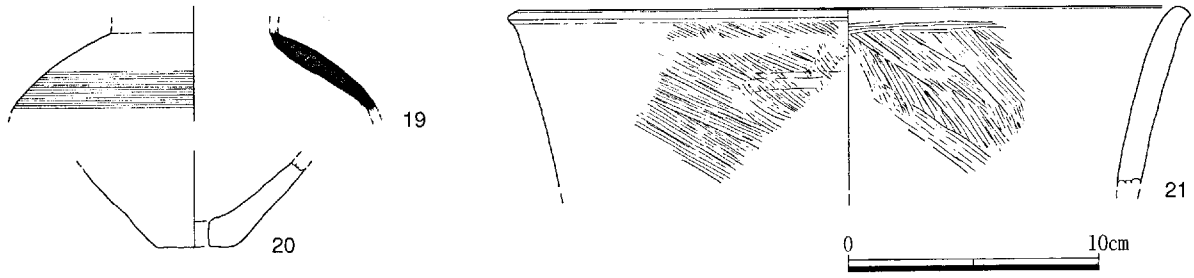


図26　出土遺物４（S＝1/3）

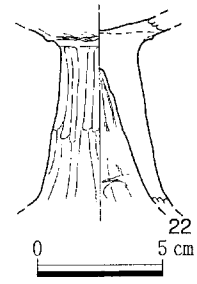


図27
出土遺物５
（S＝1/3）

められる。(20) は有孔鉢の底部である。調整は摩滅している。(21) は円筒埴輪口縁部である。内外面にナナメのハケメが施される。

(22) はSD04出土の土師器高坏である。脚部はタテミガキされている。坏部には突帯がありキザミが施されている。内面にはシボリ痕跡が認められる。

(23) ～ (37) はSD05・SK01出土の土器である。(23) ～ (34) は中層出土、(35) ～ (37) は下層出土である。(23) は胎土に角閃石が多く認められる。外面にはハケメが認められる。(24) は口唇部を面取りする。体部をヨコハケし口縁部にはナナメにナデによる条痕が認められる。頸部内面は稜がはっきりしている。内面はナデである。(25) はゆるやかに頸部が外反する形態で、口唇部内端がつまみ上げられる。(26) は口縁部を丸くおさめ、底部がやや尖り気味となる平底で頸部内面は鋭く屈曲する。体部外面はタテハケ調整、口縁部はヨコナデされる。体部内面はヨコケズリされるが、底部には及んでいない。器高10.4cmと小さいが外面にスス・コゲが付着することから実際に使用されていたことがわかる。

(27) ～ (30) は壷の口縁部である。(27) は分厚い頸部をもち、口縁部で細くなって内湾する個体である。(28) は口唇部が面取りされやや肥厚する。(29) は口唇部にキザミをもつ個体である。外面はタテハケされる。小片であり口径の復元にやや不安がのこる。(30) は口唇部が肥厚する。

(31) ～ (34) は甕・壷の底部である。(31) は内面にクモの巣状の板ナデが認められる。外面もナデである。(32) は壷の底部である。体部にハケメが認められる。(33) は甕の底部で上げ底になる。明瞭に底部を作りださず体部へと続く。外面はタタキ、内面にハケメが認められる。(34) は明瞭に底部を作り出す甕で、上げ底気味となる。体部はタタキが施される。内面はナデ調整である。

(35) は甕である。口縁部は外反する形態で口唇部は面取りされておりわずかに凹む。頸部は鋭く屈曲している。体部外面はタタキ後ハケメ調整され、さらにナデを施す。内面は上部にユビオサエの痕跡があり、中程にはハケメ、底部にはケズリが認められる。外面の最大径よりも下側にはコゲが厚く付着している。底部は平底である。(36) は壷の口縁部と考えられる。口唇部を丸く収める。(37) は壷の底部である。色調や胎土から (18) と同一個体の可能性がある。底部は小さな平底で上げ底となっている。体部にはタテミガキが認められる。内面は剥落が著しいがナデである。

(38) ～ (40) はSD01、SD02出土の木製品である。(38) はSD01出土の板材で、長さ202.8cm、幅10

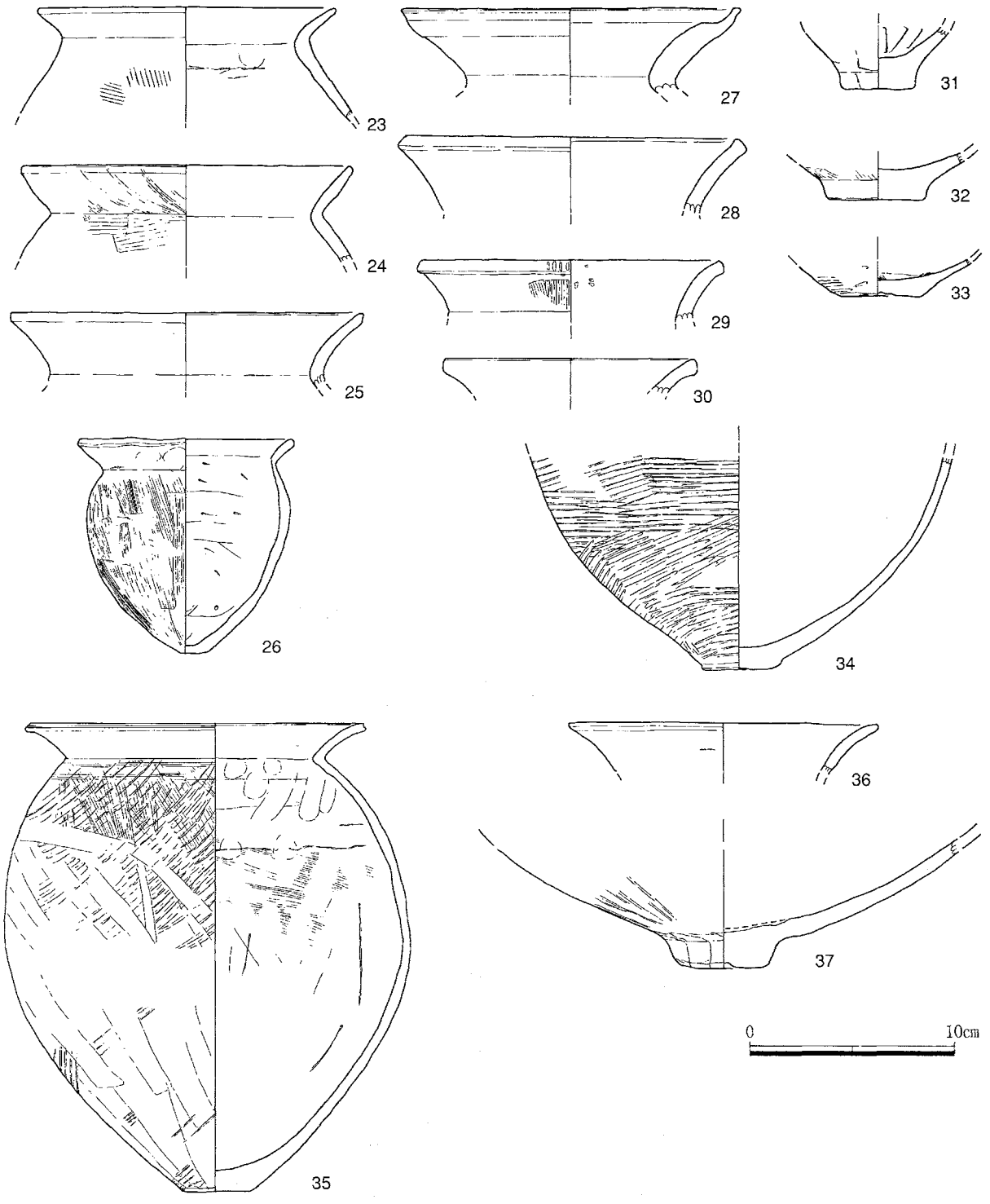


図28　出土遺物６（S＝1/3）

cm、厚さ2.1cmを測る。両端に方形、中央に「L」字のホゾ穴が穿たれている。(39) もSD01出土の鋤である。検出時に誤って破損し、柄の一部を紛失した。調査時の所見から本来は約100cmをはかると考えられる。持ち手は別造りされている。持ち手に長方形のホゾ穴を開け、同じ形に整形した柄を差し込み木製の目釘で留めていることがわかる。(40) はSD02出土の板材で、長さ102.9cm以上、幅12cm、

厚さ1.8cmをはかる。孔が開いているが人為的に加工したものではない。

5. まとめ

SD01、SD02は埋土に埴輪片を含むことと、平面で円弧を描くことから見て古墳の周濠である可能性がある。もしそうならば、円筒埴輪にB種ヨコハケを施すものがあることから古墳時代中期の埋没古墳と考えられる。本調査区周辺には同時期の石塚東古墳や後期の勝山東古墳などの埋没古墳が存在している。仮に2つの溝が古墳周濠でなくとも、本調査区は石塚東古墳から十分離れており、石塚東古墳からの埴輪の移動は想定しにくい。このことは少なくとも調査区周辺に未知の古墳が存在する可能性が高いことを示している。また、SD01出土甑は中期末～後期の所産と考えられる。いずれにせよ2つの遺構は中期末頃に形成されたものと考えられる。

庄内式期～古墳時代中期の遺構は2時期のものを確認できた。SK01・SD05の時期とSD04の時期である。SK01・SD05出土土器で器形のわかる個体はすべて甕・壺である。いずれの個体も庄内式期の所産であり、SK01・SD05は庄内式期に掘削され埋没したものと考える。SK01・SD05出土の土器は甕を中心しており、供膳具はない。甕は厚く焦げが付着するものがあり、実用に供されたことがわかる。完掘できてはいないものの、小片しか出土しない個体も多

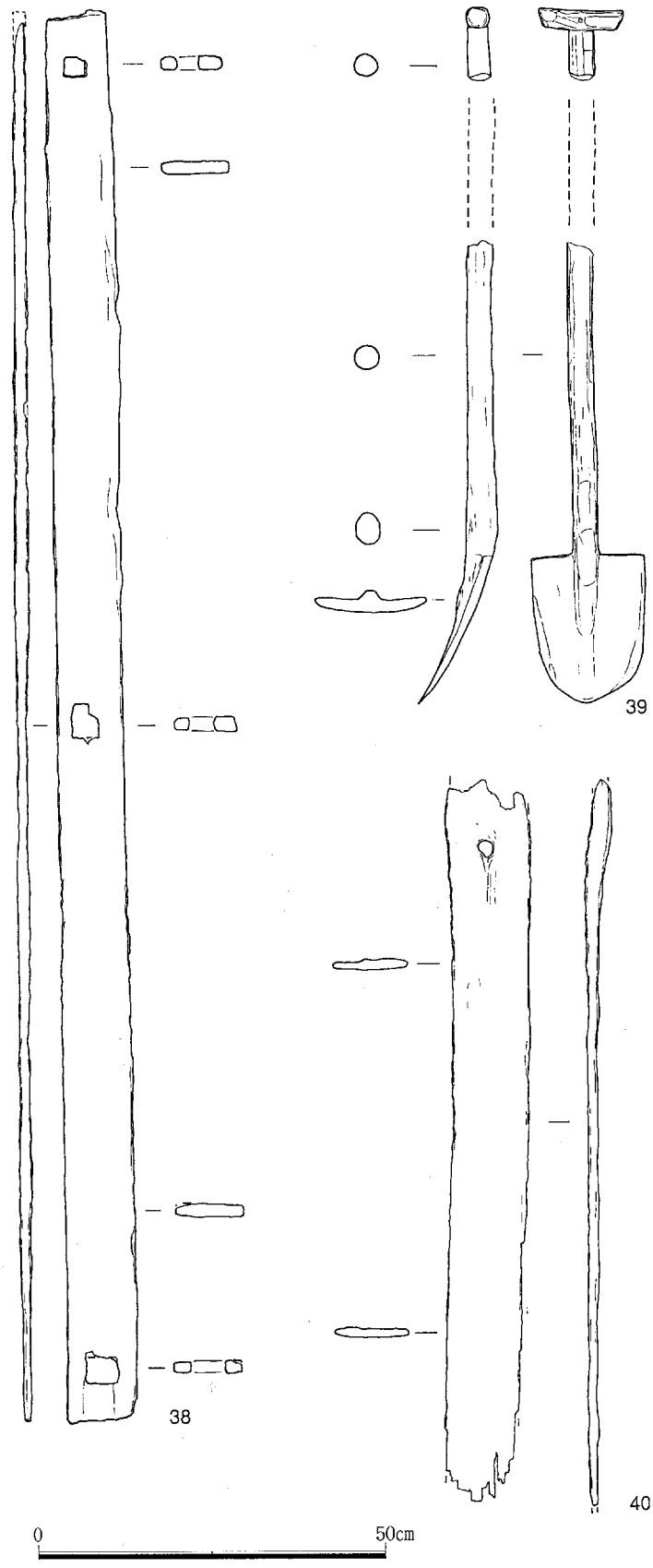


図29　出土遺物7（S = 1/10）

いことから、いわゆる纒向型祭祀土坑とは異なる性格であると考えられる。SD04は遺物が少なく時期を特定できないが、切り合いから見て庄内式期から古墳時代中期までにおさまるものである。丁寧に整形された後人為的に埋め戻されていた。性格は不明であるが、暗渠などの可能性を考えておくことができる。

今回の調査区は狭いものであったが重要な成果をあげることができた。特に古墳時代中期末には周辺に古墳があったことがわかった。これまでの調査成果でも判明していることであるが、古墳時代中期末から後期には辻地区から太田地区一体は墓域として利用されていたことがより明瞭となったといえよう。（森）

【参考文献】

関川尚功　1976「纒向遺跡の古式土師器」『纒向』 桜井市教育委員会

寺沢薫　1986「畿内古式土師器の編年と２、３の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所

青木勘時　2006「大和地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

橋本輝彦　2006「纒向遺跡の出現期古墳出土土器とその年代」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

丹羽恵二・橋爪朝子　2006「纒向遺跡第144次発掘調査概要報告」『桜井市平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

豊岡卓之編　2011「勝山古墳第５・６次調査」『東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究』 奈良県立橿原考古学研究所

表3　出土遺物観察表

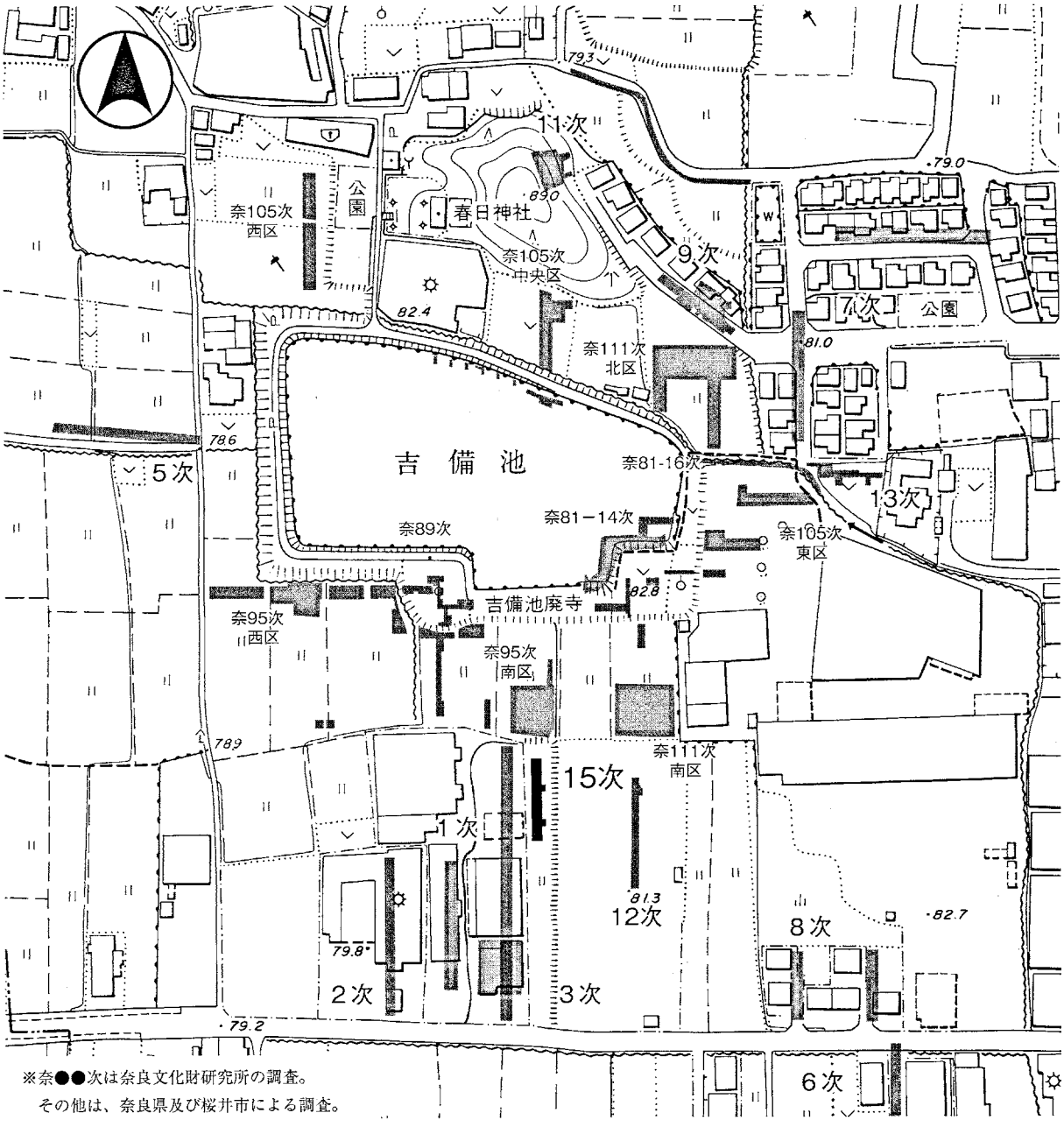
報告番号	出土位置・層位	器種・種別	胎　　土	焼成	法量（cm）			形態的特徴・調整など
					口径	底径	器高(残存)	
1	古墳時代以降の包含層上面	瓦器・碗	密	良好	－	6.0	(0.8)	内面：ミガキ 外面ナデ
2	素掘り溝埋土	土師器・皿	密	良好	8.0	6.8	0.9	内外面：ナデ
3	素掘り溝埋土	土師器・皿	密	良好	10.9	8.0	1.5	内外面：ナデ
4	古墳時代以降の包含層	円筒埴輪	密	良好	－	－	(7.2)	内面：タテハケ、ナデ 外面：タテハケ、ヨコハケ
5	古墳時代以降の包含層	形象埴輪？	密	良好	－	－	－	ナデ
6	表採	朝顔形埴輪	密	良好	－	－	(3.3)	内外面：ナデ
7	SD01	土師器・甑	密	やや良	29.8	－	29.6	内面：ハケメ→ケズリ 外面：タテハケ、ケズリ→ミガキ
8	SD01	円筒埴輪	密	良好	19.2	－	16.0	内面：ハケメ 外面：タテハケ→ヨコハケ
9	SD01	円筒埴輪	径1～5㎜の白砂を多く含む	良好	－	13.0	(14.1)	内面：ナデ 外面：タテハケ→ヨコハケ
10	SD01	土師器・甑	密	良好	－	－	－	内面：ナデ 外面：ケズリ
11	SD01	円筒埴輪	密	良好	25.2	－	(7.6)	内面：ナデ 外面：摩滅
12	SD01	円筒埴輪	密	良好	－	14.4	13.4	内面：ナデ 外面：タテハケ→ヨコハケ
13	SD01	土師器・高杯	雲母・1㎜以下の砂粒含む	良好	20.0	－	(4.3)	内面：タテミガキ 外面：タテミガキ
14	SD01	土師器・加飾壺	雲母・2㎜以下の砂粒含む	良好	18.0	－	(2.5)	内面：波状文 外面：波状文→竹管文
15	SD01	土師器・甕	密	良好	17.0	－	(4.7)	内外面：ナデ
16	SD01	土師器・甕	密	良好	－	－	(6.0)	内面：ナデ 外面：タタキ
17	SD01	土師器・甕	密	良好	－	3.7	3.1	内面：ナデ 外面：タタキ
18	SD01	土師器・加飾壺	密	良好	－	－	(22.5)	内面：ナデ、ヨコミガキ 外面:タテミガキ、波状文、竹管文、円形浮文
19	SD02	須恵器・壺	密	良好	－	－	(3.4)	外面：カキメ内面：ナデ
20	SD02	土師器・有孔鉢	密	良好	－	3.4	(3.1)	内外面：マメツ
21	SD02	円筒埴輪	2㎜以下の砂粒を含む		26.0		(7.0)	内外面：ナナメハケ
22	SD04	土師器・高杯	雲母・3㎜以下の砂粒含む	良好	－	－	(7.0)	内面：ハケメ 外面：タテミガキ
23	SK01・SD05	土師器・甕	密	良好	14.4	－	(5.5)	内面：ナデ 外面：ハケメ
24	SK01・SD05	土師器・甕	密	良好	16.0	－	(4.6)	内面：ナデ 外面：ヨコハケ
25	SK01・SD05	土師器・甕	密	良好	17.0	－	(3.6)	内外面：ナデ
26	SK01・SD05	土師器・甕	密	良好	10.6	1.2	10.4	内面：ケズリ 外面：タテハケ
27	SK01・SD05	土師器・壺	密	良好	15.8	－	(4.1)	内外面：ナデ
28	SK01・SD05	土師器・壺	密	良好	17.0	－	(3.6)	内外面：ナデ
29	SK01・SD05	土師器・壺	密	良好	14.4	－	(3.0)	内面：ナデ 外面：キザミ、ハケメ
30	SK01・SD05	土師器・壺	1㎜以下の砂粒を含む	良好	12.0	－	1.7	内外面：ナデ
31	SK01・SD05	土師器・甕	雲母・2㎜以下の砂粒含む	良好	－	3.4	(2.7)	内外面：板ナデ
32	SK01・SD05	土師器・甕	密	良好	－	4.5	(2.3)	内外面：ハケメ
33	SK01・SD05	土師器・甕	密	良好	－	3.8	(1.7)	内面：ハケメ 外面：タタキ
34	SK01・SD05	土師器・甕	2㎜以下の砂粒を含む	良好	－	10.3	3.6	外面：タタキ 内面：ナデ
35	SK01・SD05	土師器・壺	雲母・4㎜以下の砂粒を含む	良好	16.2	22.7	3.2	内面：ナデ 外面：タタキ→ナデ
36	SK01・SD05	土師器・甕	密	良好	15.0	－	(2.4)	ナデ
37	SK01・SD05	土師器・壺	密	良好	－	4.4	(5.7)	18と同一個体？ 内面：ナデ 外面：タテミガキ
					長さ	幅	厚さ	
38	SD01	板材			202.8	10.0	2.1	3つのホゾ孔
39	SD01	鋤			(100.0)	16.5	2.8	
40	SD02	板			(102.9)	12.0	1.8	

第４節　吉備池遺跡第15次発掘調査報告

1. はじめに

本調査は、桜井市大字橋本49番地で造成工事に先立ち行われた埋蔵文化財発掘調査である。大字吉備、橋本にまたがる吉備池遺跡は、国史跡「吉備池廃寺跡」を中心とした遺跡であり、その史跡の範囲は遺跡内の大部分を占める。今回の調査地は、史跡の南側に隣接する敷地内で行われた。

吉備池廃寺は、東に金堂、西に塔を並べ、それらを東西に細長い回廊で取り囲んだ法隆寺式伽藍配置をとり、その寺域は東西230m、南北280m以上で、同時代の寺院と比べると突出した規模であった



※奈●●次は奈良文化財研究所の調査。
その他は、奈良県及び桜井市による調査。

図30　吉備池遺跡第15次調査位置図（S＝1/2,500）

と推定されている。1997年に吉備池の南東岸で行われた発掘調査により、大規模な金堂基壇の掘込地業が確認されて以降、塔、回廊、僧坊や雑坊と考えられる建物群が確認されている。特に塔は、その基壇の規模などから九重塔が建立されたことが想定されている。このように大規模な伽藍をもつ吉備池廃寺は、舒明11年（639年）に建立が始められた日本最初の勅願寺である百済大寺に比定され[1]、中心伽藍を中心として、2002年３月に国指定史跡になっている。

今回の調査地は、回廊の南外側で伽藍の中軸線上付近にあたる。そのような場所ということもあって、南門の検出も想定された。吉備池廃寺の南門は、東の中門の南側で行われた第12次調査[2]で東西方向の石組溝が南北２条検出されたこともあって、この付近が一つの候補となっている。ただ、明確な建物遺構が検出されていないことや、伽藍の中軸上から大きく離れることもあって、この遺構が南門の関連遺構とするには疑問を持つ意見もあり[3]、伽藍の中軸上に南門を想定する説も依然として残る。

しかしながら、第12次調査で検出された南北の二つの石組溝は、南門でないとしても、遺構の時期からみれば、吉備池廃寺に関連する可能性は高いといえる。それらのことから、今回の調査は、12次調査の東西方向の石組み溝の西側の延長部分にあたり、かつ吉備池廃寺回廊の推定の中心軸付近に、南北30m、幅４ｍでトレンチを設定し、遺構の検出を目指した。また、調査の過程で、部分的に２ヶ所の小規模な拡張を行なっている。調査面積は約127㎡、調査期間は平成24年１月16日から２月28日である。

2. 調査の方法と基本層序

調査区は、現況では田圃であったため、まず重機により耕作土を除去した。現代耕作土から旧耕作土を含めて、層厚50～60cmで、やや南側の方が厚い。旧耕作土の明確な上限時期は決め難いが、素掘溝などからは瓦器片などが出土していることなどから中世以降のものと思われる。その下は、瓦を含む包含層（27～33層）で、調査区の中程では０～10cm程度、南側では20cm程度の厚さとなる。その包含層を除去すると調査区の北半では105層、南半では100～104層になる。この上面からは、瓦が多く出土する溝などが検出されたため、吉備池廃寺が存在していた時期の基盤層になると思われる。100～102層は粗砂などを基本とするもので河川などに伴う堆積であろう。

3. 調査の成果

素掘溝等の耕作に関連する埋土、瓦を含む包含層を除去しながら遺構検出を目指した。結果的に遺構検出をおこなったのは北半部では105層上面、中ほどでは103層、南半では100～102層の上面となった。しかしながら、その後の壁面の精査の結果、SP133は包含層である27層上面から掘削していることが分かった。平面精査時には認識することができなかったが、SD102より南側の柱穴では、SP133と同様の埋土を持つものが多いことから、これらも同様に27層上面から掘削されていることが想定される。包含層上面で遺構検出ができなかったこともあり、壁面にかかっていない遺構に関しては遺構の掘削面を特定することができなかったものが多い。以下、主な遺構については詳述するが各遺構の

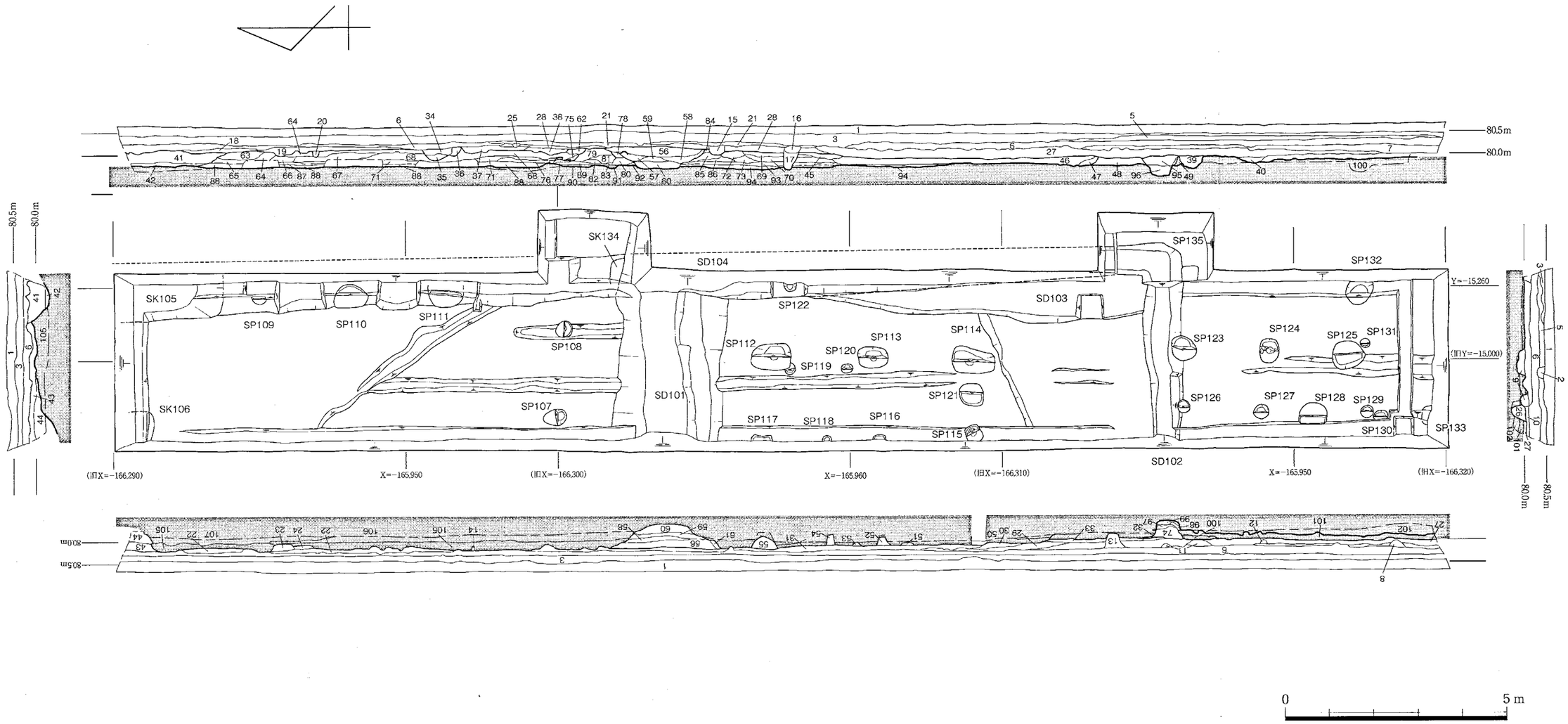


図31　平・断面図（S = 1/100）

表4　土層名一覧（吉備池遺跡第15次）

層番号	土色・土質	備考
1	灰黄褐（10YR4/2）砂質土	現代耕作土
2	黄灰（2.5Y6/1）シルトに黄橙（10YR8/8）粘土ブロック混じる	
3	青灰（5BG6/1）シルト	
4	青灰（5BG6/1）粗粒砂　径5cmの礫混じる	
5	明オリーブ灰（5GY7/1）シルトに明黄褐（10YR7/6）シルトブロック混じる	
6	にぶい黄橙（10YR7/4）シルトに明オリーブ灰（5GY7/1）シルトブロック混じる	
7	にぶい黄褐（10YR5/3）シルト	素掘溝埋土
8	にぶい黄（2.5Y6/3）シルト　細粒砂混じる	
9	灰（7.5Y7/1）シルト細粒砂混じる　鉄分沈着	素掘溝埋土
10	にぶい黄橙（10YR6/3）シルト	
11	明黄褐（10YR6/8）シルト細粒砂混じる	
12	明黄褐（10YR6/6）シルトに灰白（5Y7/1）シルトブロック混じる	
13	黄橙（10YR7/8）シルトに細粒砂混じる	
14	にぶい黄橙（10YR7/3）シルトに細粒砂混じる	
15	灰褐（7.5YR5/2）シルト　鉄分沈着	SP122
16	にぶい黄褐（10YR5/3）シルト	
17	灰黄褐（10YR4/2）細粒砂	
18	明オリーブ灰（5GY7/1）細粒砂に灰オリーブ（5Y4/2）シルトブロック混じる	
19	明オリーブ灰（5GY7/1）細粒砂に褐灰シルトブロック　鉄分沈着	素掘溝埋土
20	灰黄褐（10YR5/2）シルトに細粒砂混じる	
21	黄橙（10YR8/8）細粒砂に灰黄褐（10YR5/2）シルトブロック混じる	
22	黄橙（10YR7/8）シルトにオリーブ灰（5GY7/1）細粒砂混じる	
23	黄橙（10YR7/8）シルトにオリーブ灰（5GY7/1）細粒砂多く混じる	
24	黄橙（10YR7/8）細粒砂～中粒砂	
25	黄橙（10YR8/8）細粒砂ににぶい黄褐（10YR4/3）シルトブロック混じる	
26	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトに細粒砂混じる	SP133
27	明黄褐（10YR6/6）シルトに明オリーブ灰（5GY7/1）細粒砂混じる	
28	黄橙（7.5YR7/8）シルトに粗粒砂混じる	
29	明黄褐（10YR6/8）シルト	
30	黄橙（10YR7/8）シルト	
31	黄橙（10YR7/8）シルトにオリーブ灰（5GY7/1）細粒砂混じる	
32	黄褐（10YR5/6）細粒砂に中粒砂が混じる	
33	明黄褐（10YR6/6）シルトに細粒砂混じる	
34	にぶい黄褐（10YR4/3）シルトに細粒砂混じる	SP111
35	浅黄橙（10YR8/4）シルトににぶい黄（2.5Y8/6）シルトブロック混じる	
36	浅黄橙（10YR8/4）シルトににぶい黄褐（10YR4/3）シルトブロック混じる	
37	にぶい黄褐（10YR4/3）シルトに浅黄橙（10YR8/4）シルトブロック混じる	
38	明黄褐（10YR7/6）シルトににぶい黄橙（10YR7/2）のブロック混じる	
39	褐灰（10YR5/1）シルト～粘土	SP135
40	灰白（2.5Y7/1）粗粒砂に褐灰（10YR5/1）のシルトブロック混じる	
41	褐灰（10YR5/1）粘土ブロックに明青灰（5BG7/1）シルトが混じる	SK105
42	明青灰（5BG7/1）粗粒砂　径2cm程度の礫混じる	
43	黄褐（10YR7/8）シルト　細粒砂混じる	SK106
44	にぶい黄橙（10YR6/4）シルト～粘質土	
45	灰黄褐（10YR5/2）シルトに細粒砂～粗粒砂混じる	SX103
46	灰褐（7.5YR6/2）シルト～粘土　細粒砂混じる	
47	褐灰（7.5YR6/1）シルト	
48	褐灰（10YR5/1）シルト～粘土	
49	褐灰（10YR5/1）シルト～粘土	
50	にぶい橙（7.5YR6/4）シルト	SP115
51	にぶい黄褐（10YR5/4）シルトに細粒砂ブロック混じる	
52	灰黄褐（10YR5/2）粘質土	SP116
53	明黄褐（10YR6/8）細粒砂ブロック	
54	灰黄褐（10YR5/2）粘質土	SP118
55	明黄褐（10YR6/6）シルトににぶい黄橙（10YR7/2）極細粒砂混じる	SP117
56	橙（7.5YR7/6）～にぶい橙（7.5YR7/4）シルト～細粒砂　径5cm程度の礫混じる	SD101
57	橙（7.5YR7/6）～にぶい橙（7.5YR7/4）シルト～細粒砂　径5cm程度の礫混じる	SD101
58	灰白（5Y7/1）中粒砂　灰黄褐（10YR6/2）シルトブロック混じる	
59	灰白（5Y7/1）中粒砂　明黄褐（2.5Y7/6）シルトブロック混じる	
60	灰白（5Y7/1）粗粒砂　径3cm程度の礫混じる	
61	橙（7.5YR7/6）～にぶい橙（7.5YR7/4）シルト～細粒砂	
62	明黄褐（10YR7/6）シルト（やや粘質）	SD104上層
63	明青灰（5BG7/1）細粒砂に灰オリーブ（5Y4/2）シルトブロック混じる	
64	明青灰（5BG7/1）細粒砂に灰オリーブ（5Y4/2）シルトブロックやや混じる	
65	褐灰（10YR5/1）シルト～粘質ブロックに明青灰（5BG7/1）細粒砂混じる	
66	淡黄（7.5Y8/3）細粒砂に褐灰（10YR5/1）シルトブロック混じる	
67	褐灰（10YR6/1）粘土～シルトブロックに淡黄（7.5Y8/3）細粒砂混じる	
68	灰黄（2.5Y7/2）粗粒砂に明黄褐（10YR7/6）シルトブロック混じる	
69	灰白（7.5Y8/2）粗粒砂　径5cm程度の礫混じる	
70	灰白（7.5Y8/2）粗粒砂ににぶい黄橙（10YR7/4～7/3）粘土ブロック混じる　径5cm程度の礫混じる	
71	灰オリーブ（5Y6/2）粘質土（鉄分付着）	
72	にぶい黄橙（10YR7/4～7/2）粘土に灰白（7.5Y8/2）粗粒砂混じる	
73	にぶい黄橙（10YR7/4～7/2）粘土に灰白（7.5Y8/2）粗粒砂やや多く混じる	
74	褐灰（10YR5/1）シルト～粘土	
75	灰黄（2.5Y6/2）中粒砂に黄（2.5Y8/6）ブロック混じる	
76	浅黄（2.5Y8/4）～黄（2.5Y5/6）のシルト～細粒砂	
77	褐灰（5YR6/1）粘質土　鉄分沈着	盛土状堆積のくずれか
78	褐（5YR6/1）粘質土　鉄分沈着　礫少量混じる	SK134
79	黄（2.5Y8/6）シルトブロック、灰黄（2.5Y6/2）細粒砂、淡黄（2.5Y8/3）極細粒砂	北側盛土状堆積
80	褐灰（5YR6/1）粘質土　鉄分沈着	
81	灰黄（2.5Y7/2）シルトブロックに黄灰（2.5Y6/1）の中粒砂混じる	
82	褐灰（5YR6/1）粘質土	
83	褐灰（5YR6/1）粘質土	
84	にぶい黄橙（10YR7/4～7/2）粘土に灰白（7.5Y8/2）粗粒砂やや多く混じる	南側盛土状堆積
85	にぶい黄橙（10YR7/4～7/2）粘土	
86	にぶい黄橙（10YR7/4～7/2）粘土に灰白（7.5Y8/2）粗粒砂混じる	
87	明オリーブ灰（5GY7/1）細粒砂に灰褐（7.5YR6/2）シルトブロック混じる　木片多し	SD104下層
88	灰オリーブ（5Y6/2）粘質土に灰白（N7/）粗粒砂混じる	
89	褐灰（5YR6/1）粘質土　細粒砂混じる	
90	褐灰（10YR5/1）シルト～細粒砂	
91	褐灰（10YR5/1）シルトブロック	
92	褐灰（5YR6/1）粘質土　細粒砂混じる	
93	灰白（N8/）粗粒砂ににぶい黄橙（10YR7/4）粘土ブロック混じる　径3cm、木片混じる	
94	灰（N5/）シルト～粘土ブロック	
95	褐灰（10YR4/1）シルト	SD102下層
96	褐灰（10YR4/1）シルトに灰白（7.5YR8/2）に細粒砂混じる	
97	淡黄（7.5Y8/3）極細砂	
98	にぶい黄橙（10YR6/4）シルト　細粒砂混じるに褐灰（7.5YR5/1）粘土ブロック混じる	
99	褐灰（10YR4/1）シルト	
100	にぶい黄橙（10YR6/4）シルトに細粒砂混じる	基盤層
101	灰白（2.5Y7/1）粗粒砂	
102	灰黄褐（10YR4/2）細粒砂～中粒砂	
103	にぶい黄褐（10YR5/4）シルトブロックに黄（2.5Y8/8）極細粒砂ブロック混じる	
104	灰白（2.5Y7/1）中粒砂～粗粒砂に黄橙（10YR7/8）シルトブロック混じる　やや鉄分多い	
105	灰白（2.5Y7/1）中粒砂～粗粒砂に黄橙（10YR7/8）シルトブロック混じる	
106	灰白（2.5Y7/1）粗粒砂　径5cm程度の礫混じる	
107	灰白（2.5Y7/1）粗粒砂　径10cm程度の礫混じる	

規模等は表７を参照していただきたい。

SD101　幅約2.3mの東西溝で、深さは約50cm。埋土は、大きく分けて、上（図31－56・57層）・中（58・59層）・下（60層）の３層だが、中層は場所によって下層と区別できないところもあった。上層及び下層からは、瓦を中心とした出土遺物が多く、土器等は少量であった。それらから、吉備池廃寺と併行もしくは廃絶後に近接する時期と考えられ、遺構の時期は、７世紀後半～８世紀初頭頃であろうか。調査区の東側で、重複するSD104の下層埋土（92～94層など）を削平して溝を掘削しているため、SD104より新しいことがわかっている。

SD102・SD104　SD102は調査区の南側で検出された東西溝で、SD104は調査区の東端で検出した南北溝である。この二つの溝の規模や関係を知る目的で、南北二か所を部分的に拡張している。その結果、これらの二つの溝はつながることがわかった。２つの溝が接続する部分に埋土に切り合いがみられないことや、SD102の下層（96層）及びSD104の下層（88層）からは、部材を削ったような木片が出土しているなどの共通性からも一連の遺構であることが裏付けられる。SD102は幅約60cm程度で、深さは約40cm、SD104は幅約70～90cm程度で深さは約30cmとほぼ同規模とみてよいであろう。溝の底面はSD102が標高79.6mで、SD104がSD101のすぐ北側の位置で、79.8mとなる。東西溝であるSD102の方が低いが、もともと南側に向かって地形が下がることが要因と思われる。回廊の中心を意識した溝であり、対応する溝があると仮定すれば道路側溝のような性格を考えなければならない溝であるが、調査区の範囲内では判然としない。出土遺物は、前述した木片類、SD104からは瓦が出土しているが、

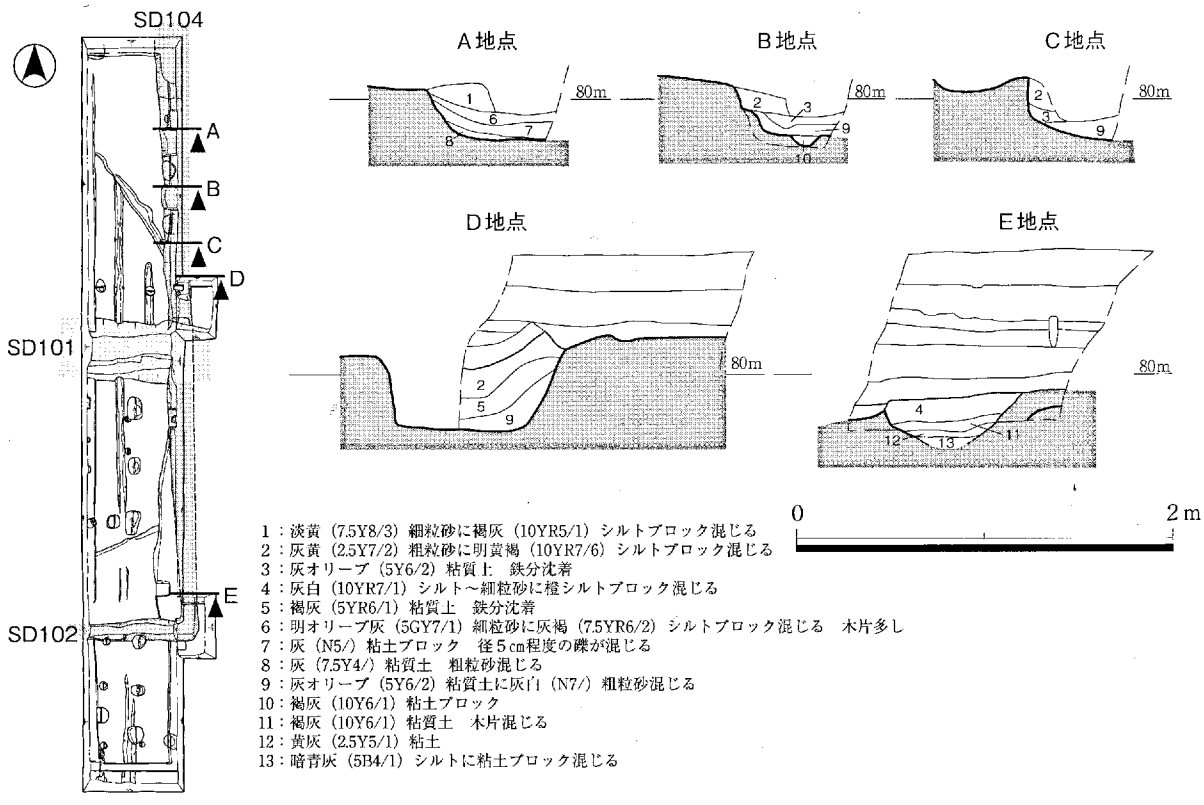


図32　SD104埋土横断面（S＝1/40）

土器類は非常に少ない。

また、この溝で注目すべきは、ちょうどSD101によって分断されているSD104の南北の溝内には盛土状の堆積がみられることである（図33）。SD101の北肩にあたる北側は南北幅約1.9mで、東西は溝幅と同じである。この盛土状の堆積には、花崗岩の風化土に由来すると思われる黄色や黄橙色を呈したシルト～細粒砂等が用いられている。盛土にはいくつかの単位がみられるが、版築がなされたとまではいえない。盛土の北側の斜面には残存状態が半分強の平瓦２枚（図39－11・12）が重なった状態で、さらに素弁蓮華文軒丸瓦の瓦当部分の破片（図35－１）が出土している。これらが意図的にそこに置かれていたかどうかはわからない。また、SD101の南肩側にも、同様に南北幅1.6mの、黄色粘土による盛土状堆積がみられる。この二か所の盛土状堆積の下には、SD104の最下層埋土と推定できる

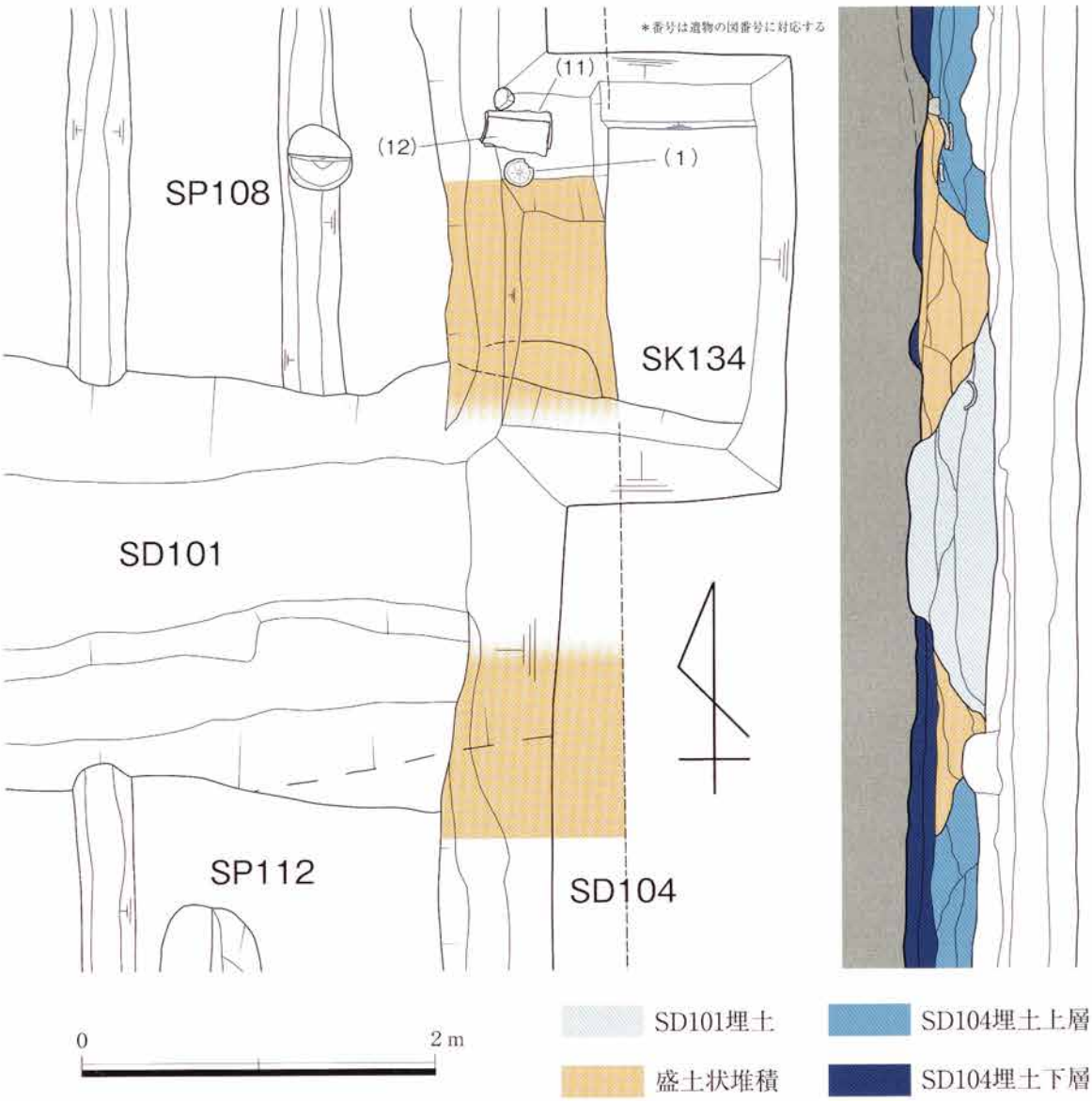


図33　SD104盛土状堆積断面・遺物出土状況（S＝1/40）

堆積があることから、溝（SD104）掘削後、しばらくたってから、何らかの理由で溝を遮断するために意図的になされた盛土と解釈しうる。

盛土状堆積とSD101の関係を考える場合、SD104の排水がSD101に流れ込むのを阻止するためSD104内に盛土をして塞き止めた解釈も可能で、二つの溝が併存していたことも考え得る。しかしながら、後述するような各遺構の遺物出土状況からは、SD101と104が同時に機能していた可能性は低いと思われる。よって、SD104内を南北幅約3.7mにわたって盛土し、溝を分断していたと思われる。盛土後は、SD104の排水は、北は盛土から北側に、南は南側に水が排水されていたと考えられる。溝を何のために遮断する必要があったのかは、調査の範囲内では推定することはできない。

SD103　トレンチ東端で検出された南北の溝状遺構で、調査区では長さ７ｍ分検出し、幅は1.3m以上で調査区の東外側へさらに広がる。深さは約20cmである。調査区の範囲外に広がるため、全容はつかめていない。当初SD104の南半部と大部分が重複するため同一のものととらえていたが、土層の関係から別箇のものと判断し、SD102・SD104よりも新しい遺構と判断した。埋土からは、単弁蓮華文軒丸瓦の小片（図35－２）が出土している。

SK105　調査区の北東隅で検出した土坑で、南北２ｍ、東西0.8m分検出したが、調査区外へさらに広がるため全容は不明である。深さは約40cmである。SD104と大部分は重複しており、切り合い関係から、SD104より新しい。

SK106　調査区の北西隅で検出した土坑で、大部分が調査区外になるため全容はわからない。深さは50cm以上である。

SK134　SD104の北側の盛土状遺構上に存在する土坑状のものである。SD101により大部分が削平されているため全容は不明である。盛土状遺構の盛土単位の可能性もある。

SP107・108　SD101のすぐ北側に東西に２つにならぶピットを検出している。それぞれの掘形の直径は35cm前後である。芯々間は約２ｍである。この二つのピットの東の延長に位置する北の拡張区からはその続きのピットは検出できなかった。

SP109～111　いずれもSD104上層の埋土上面から掘削されている。それぞれのピットの規模は、109は直径35cm、SP110約75cm、SP111は約75cmである。SP109の直径が他と比べ小さく、３つのピットがすべて関連するかは不明であるが、それぞれの芯々間は約2.1mでそろっている。

SD101～SD102間の柱穴　SP112～114は、ほぼ南北に並び、隅丸長方形の掘形を持つ柱穴で、それぞれの掘形の規模は、SP112は85×60cm、SP113は65×45cm、SP114は95×60cmである。また、SP113・114には、直径15cm程度の柱根、SP112では同規模程度の柱の痕跡が土層断面から認識できる。それによると、柱の芯々間は約2.1～2.2mである。埋土の状況などや、規則的な配列から、３つのピットは同一の掘立柱建物の柱穴と思われる。この建物が東西のどちら側に展開するのかは調査区外になるため、判然としない。

調査区のちょうど西壁沿いにはSP115～117が南北に並ぶ。SP116や117などは、SP113やSP112のちょうど東西方向にあたるため、同一の建物を構成する柱穴の可能性が残されるが規模や形状等が異なる

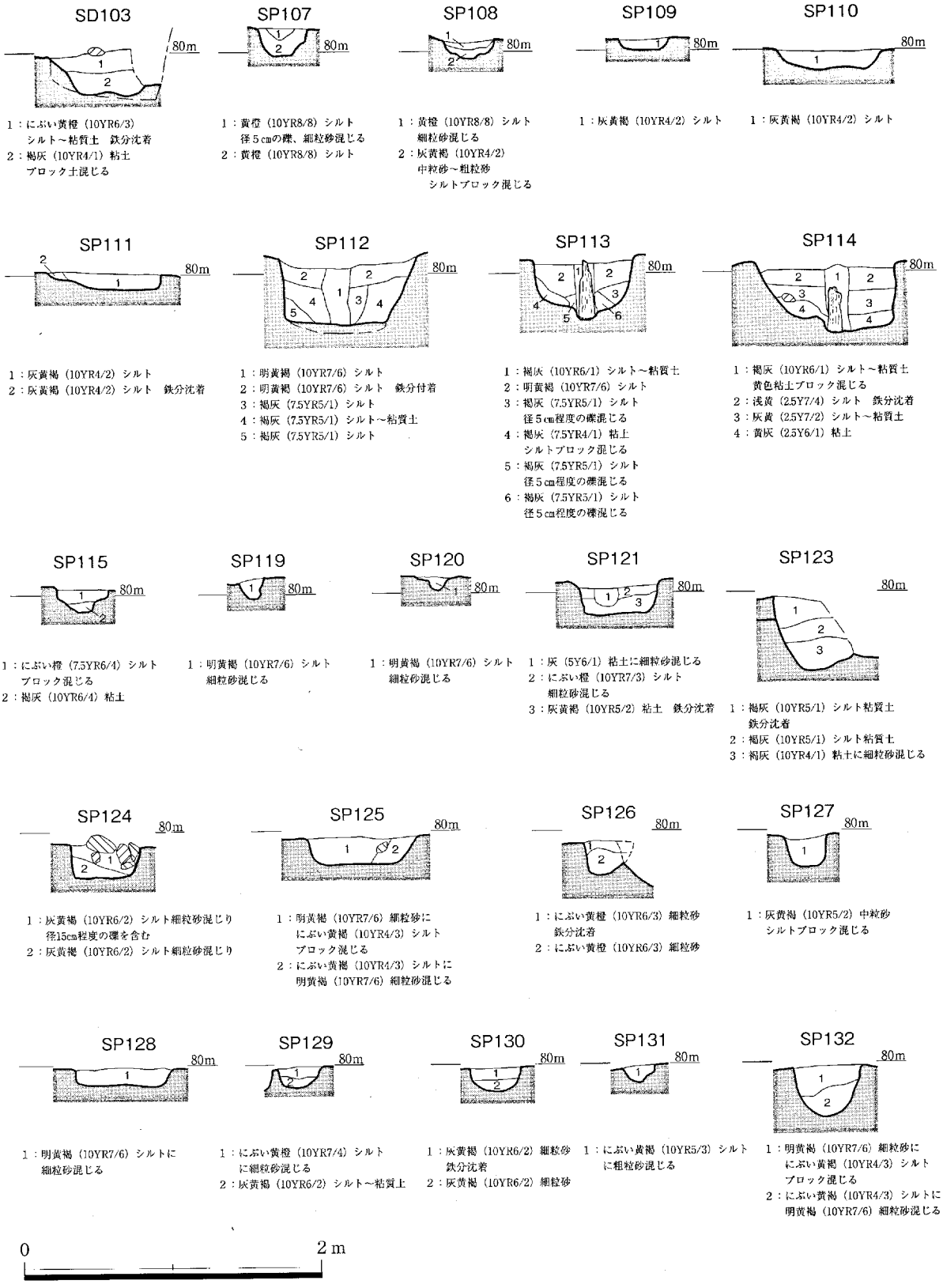


図34　遺構断面（S＝1/40）

ためそのつながりは判然としない。

SD102より南側の柱穴　SD102の南側に柱穴群がみられる。瓦を含む包含層の上から切り込み面があることや、SD102の埋土の上面から、柱穴が掘削されているので、吉備池廃寺廃絶以降の可能性が高い。柱穴の規模は、直径70cm程度のものと、直径30cm程度のものと大きくわけて大・小の２種類の規模がある。そのうちSP123～125は、柱穴の芯々が約1.8m間隔で南北に一直線に並ぶため、関連する柱穴の可能性がある。

4. 出土遺物

当調査からは瓦を中心にコンテナケース７箱分の遺物が出土している。以下、瓦は分類ごとに、土器は出土位置ごとにその内容を記す。なお、丸瓦・平瓦は表６で、法量などをまとめているので参照していただきたい。

（1）瓦

軒丸瓦　今回の調査では、素弁八弁蓮華文軒丸瓦及び単弁蓮華文軒丸瓦が出土している。

（1）は素弁八弁蓮華文で、SD104内の盛土状遺構の上面から出土している。瓦当厚は外縁で2.5cm、中房部で2.6cm、直径は16.8cmである。斑鳩寺４Ａ[4]及び四天王寺１Ａ[5]と同笵と思われる。本来は暗灰色

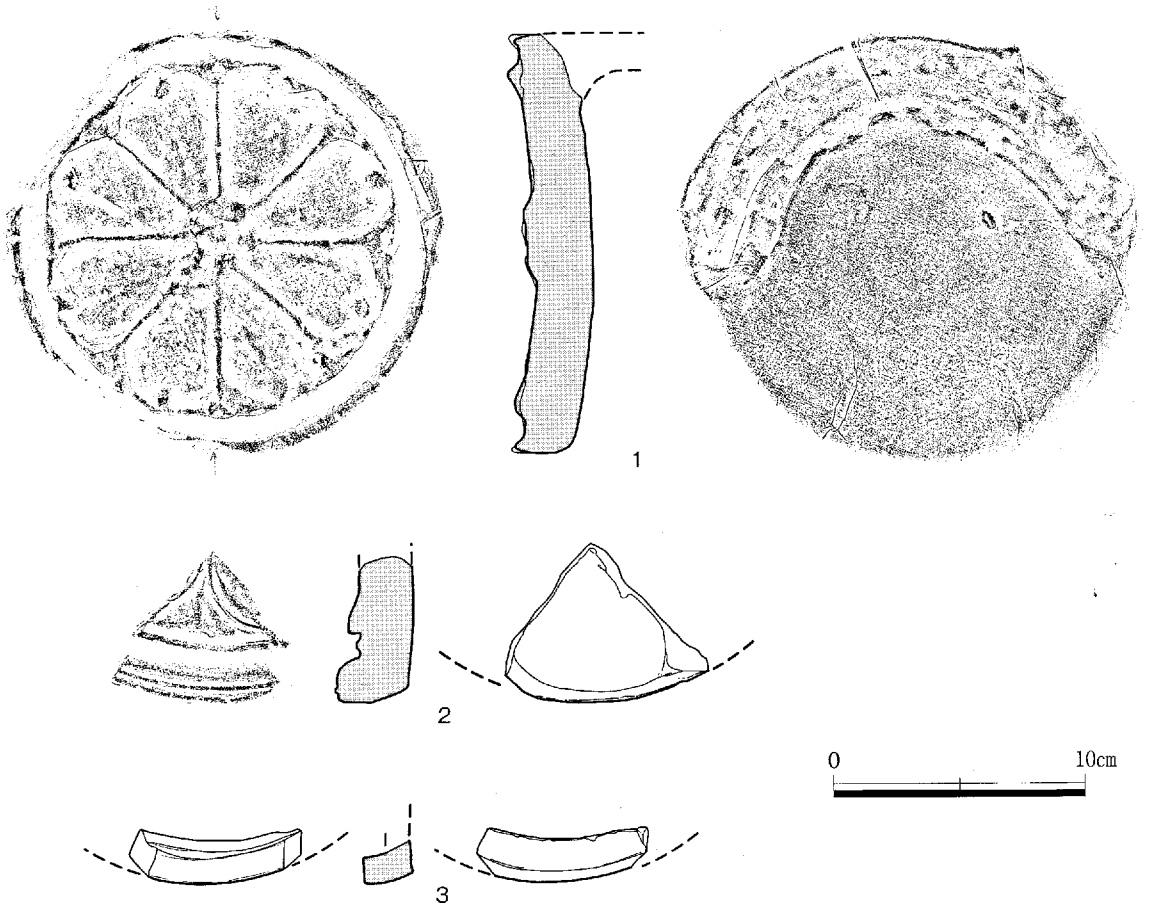


図35　軒丸瓦（Ｓ＝1/3）

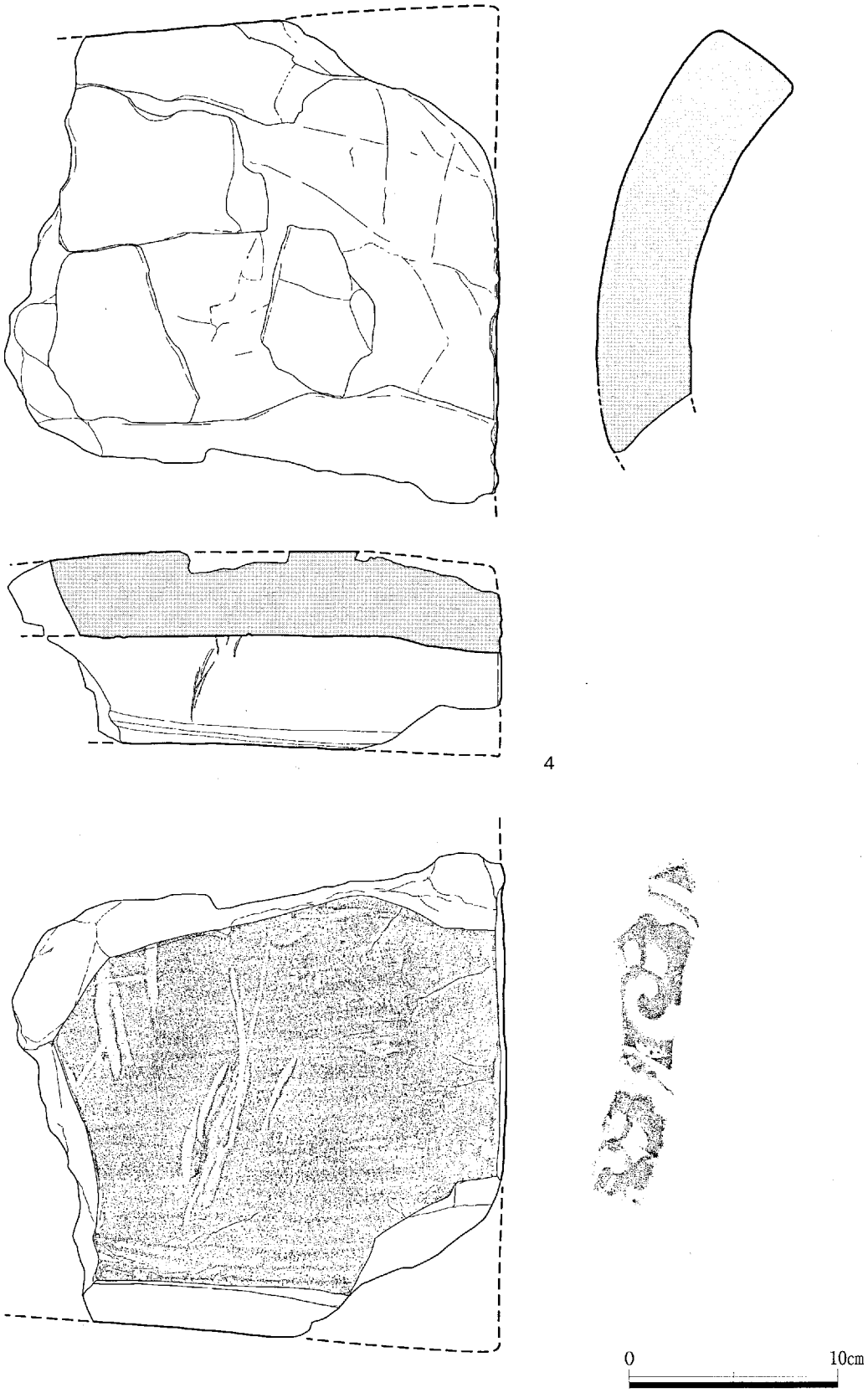


図36　軒平瓦（S＝1/3）

を呈していたと思われるが、焼成が軟質で、磨滅が著しく大部分は灰白色になっている。胎土は直径～2㎜程度の黒色粒を含んでいるのが特徴的で、他の軒平・軒丸瓦とは胎土が異なるように思える。瓦当表面はとくに磨滅が著しく笵傷等の詳細な観察はできない。ただ、中房は各蓮子が認識できないほど連なっており、四天王寺1Aの中でもかなり笵が劣化した段階に近い特徴を持っている。瓦当裏面は回転ナデが施され、中央部分がやや膨らむ。丸瓦との取付け部は、丸瓦の筒部の先端に合わせてナナメにケズリ落している。

（2）は重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦の間弁の破片と思われ、奈文研報告の軒丸瓦Ⅰ型式[6]と同一のもの思われる。小片のため細分類は不明である。SD103から出土している。青灰色を呈し、焼成は良好である。外縁で厚さ2.9cmである。

また小片であるが、軒丸瓦の外縁と思われる（3）がある。外縁の厚さは1.5cmである。外縁には圏線はなく直立の素文縁のものである。瓦当文様部が欠落しているため文様は不明である。

軒平瓦　忍冬唐草文を押し型で施文した軒平瓦がSD101から1点出土している。この押し型は斑鳩寺所用の軒平瓦213B型式と同笵[7]である。瓦当厚は4.3cm、型は反転させずに忍冬唐草文は常に下向きに表現される。凹面は丁寧にタテナデを施しているが、そのあとにヘラのような工具が偶然当たったような不規則な横線が入る。瓦当近くはヨコナデが施されている。側面もケズリ調整が行われ、凹面側には面取りが施されている。凸面は欠けている箇所が多いためよくわからないが、タテナデが施されているようである。奈文研報告の軒平瓦ⅠA型式に分類されるものである。

丸瓦　本調査では、丸瓦は計約3.6kg出土している。しかしながら、小片が多く、全体の形状を推測できるものはない。形状がわかるものはすべて玉縁式のもので、行基式と判断できるものはなかった。玉縁部の調整の方法から2種に分類している。

丸瓦A類は、筒部凹面には布目痕を残すが、玉縁部凹面には布目痕は認められない。筒部と玉縁の連結部凹面には、布の絞り目が見られる。玉縁部凹面を横方向にヘラ削りを行い、側面近くを縦方向にケズリを施し調整している。連結部の破断面の観察では、筒部の粘土の内側に玉縁部の粘土が足されているのがわかる。模骨は筒部のみで玉縁部までは及んでないものと思われる。

凸面はタタキ後にナデ調整をおこなっていると思われ、（5）にはタタキ痕がかすかに残っているものがある。側面の調整を確認できる（5）、（6）は分割破面のみ調整をしている。他は小片のため判断できない。

丸瓦B類として（10）があげられる。A類と異なり、玉縁部凹面まで布目痕が残っている。段部には凸面側から粘土を張り足しているのが、破断面から観察できる。厚さは最大3.5cmで、玉縁部で2.1cm程度である。奈文研分類の丸瓦1類Aに相当するものである。側面は残存していないが、瓦の厚さ、玉縁部の径などを考慮すると、本報告のA類に比べ法量の大きい瓦と思われる。

平瓦　本調査では計約22kgの平瓦が出土している。調整及び胎土等から4種に分類している。

平瓦A類は、桶巻き作りの平瓦で、灰白色を呈し、焼きがやや甘いものが多いのが特徴的である。側面は分割截面と分割破面がそのままで、基本的に分割後の調整が行われていないと思われる。焼成

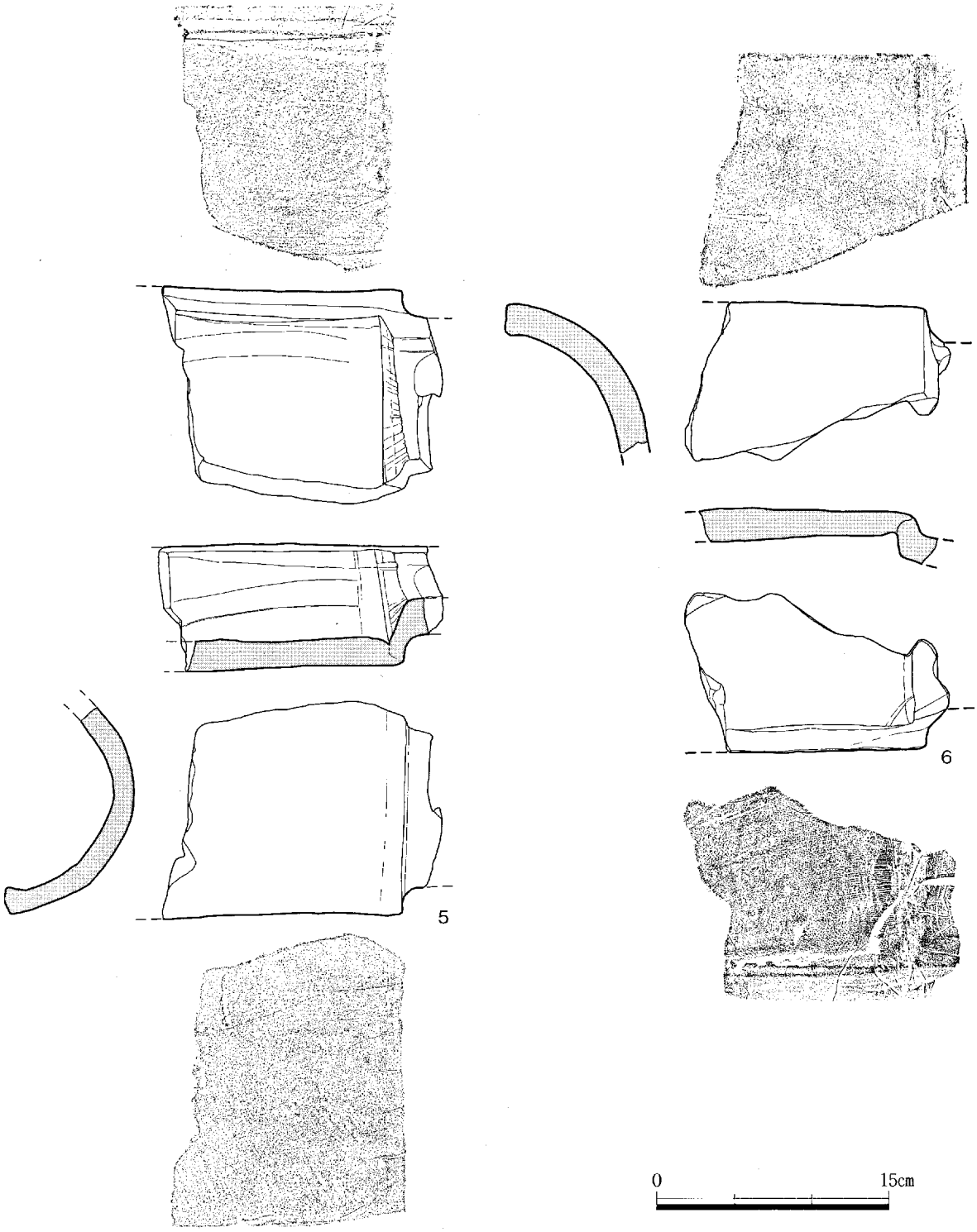


図37　丸瓦A類（S＝1/4）

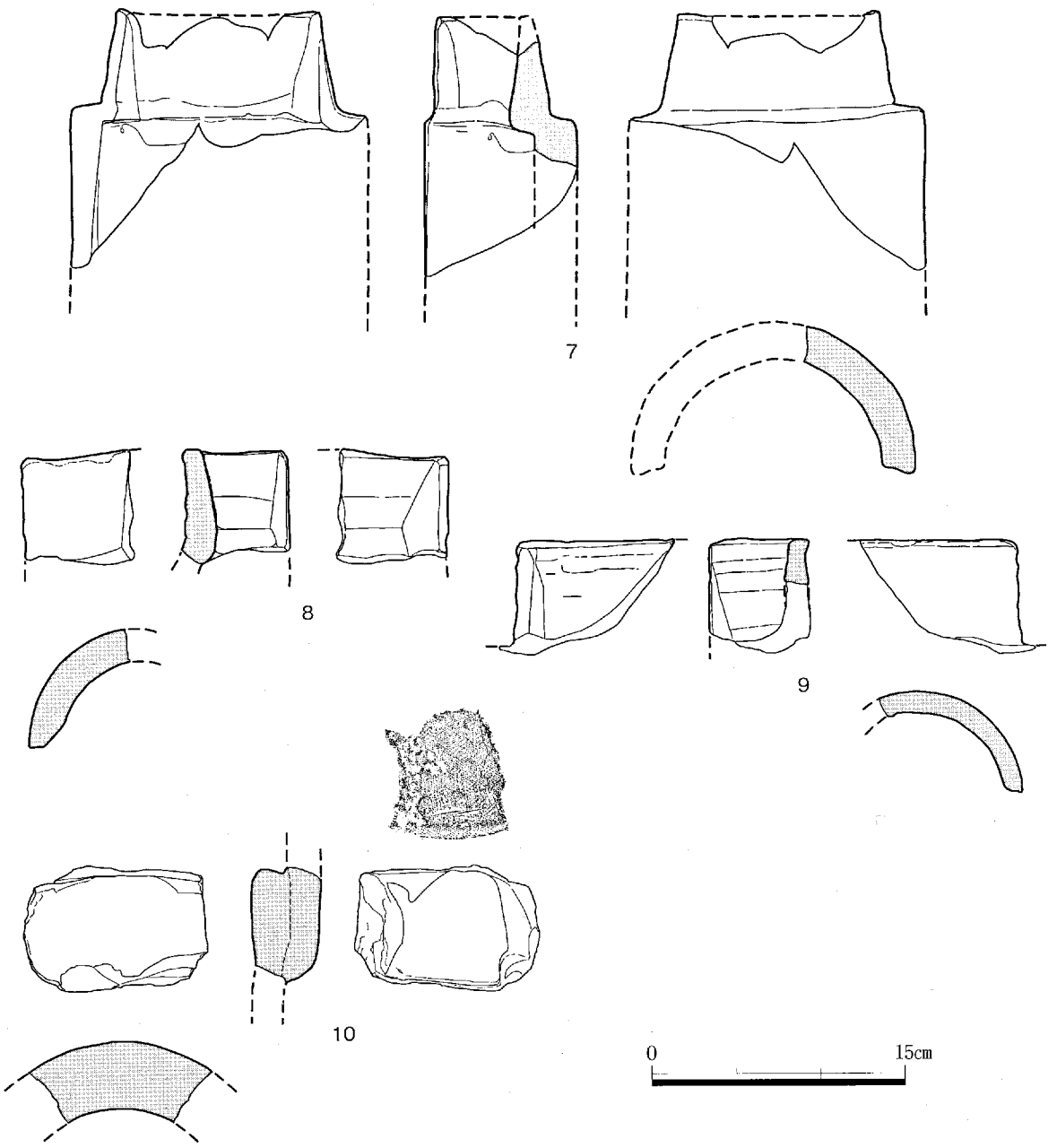


図38　丸瓦A・B類（S＝1/4）

が甘いため磨滅が進んでいる個体が多いが、凹面には布目痕が残されているものが多く、ナデ調整を施しているものでも、丁寧に布目痕を消そうとする意図は感じられない。ナナメ方向の擦痕がみられものもあり、粘土板を切り離した後の糸切り痕が観察できる。凸面は磨滅しているが、タタキの痕跡が認められないため、ナデが施されていると思われる。比較的残りがいい個体は（11）～（13）で、ほぼ50％の残存率である。

（11）は全長38.2cmで厚さは2cm前後である。凹面では狭端から約8cmのところに横方向の線条圧痕、広端から約12cmのところに列点状に圧痕が6～7cm間隔で見られる。特に後者は桶の側板幅と一致するので、側板の綴じ合せに関係する痕跡と思われる。

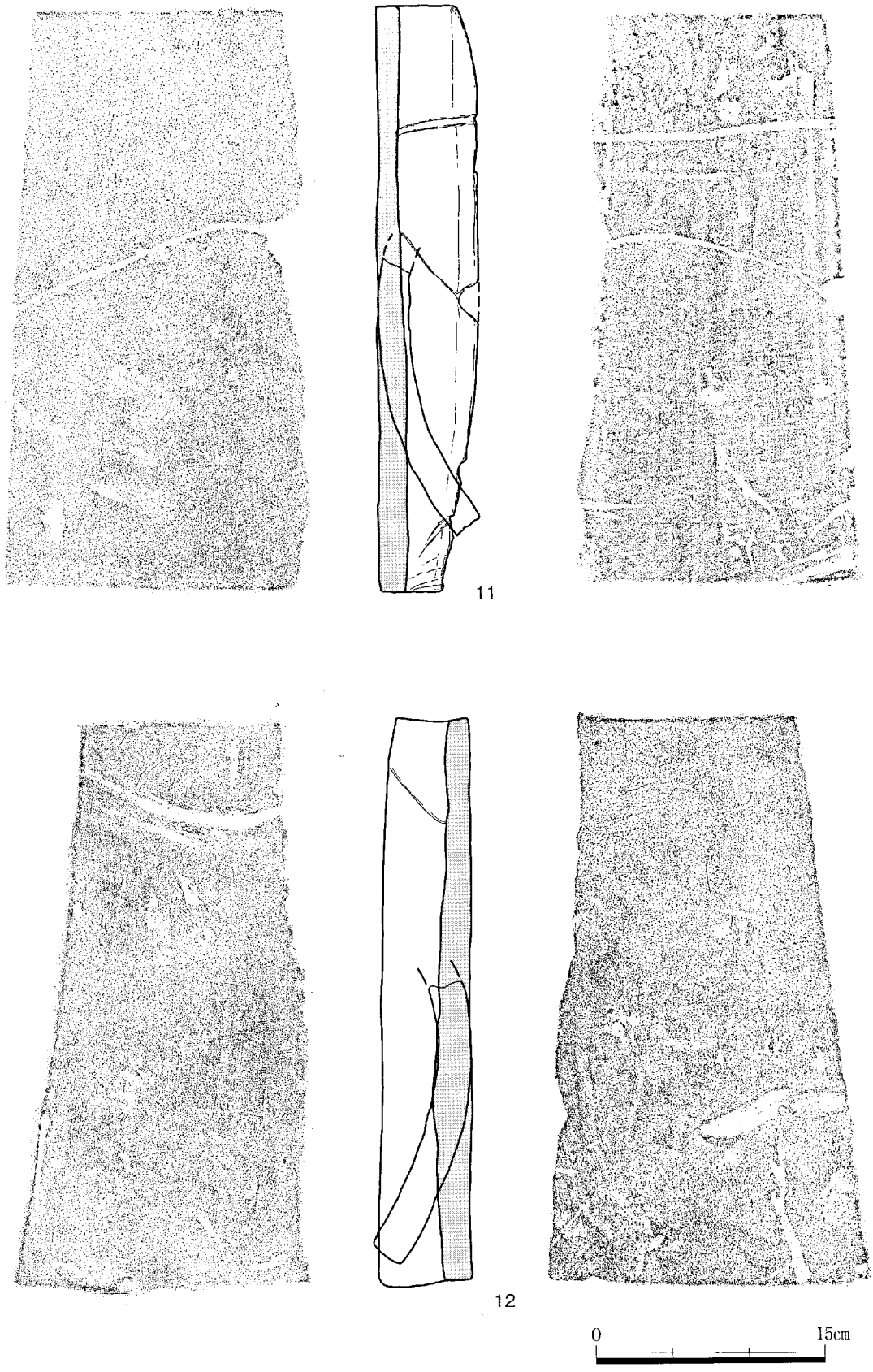


図39　平瓦Ａ類①（Ｓ＝1/4）

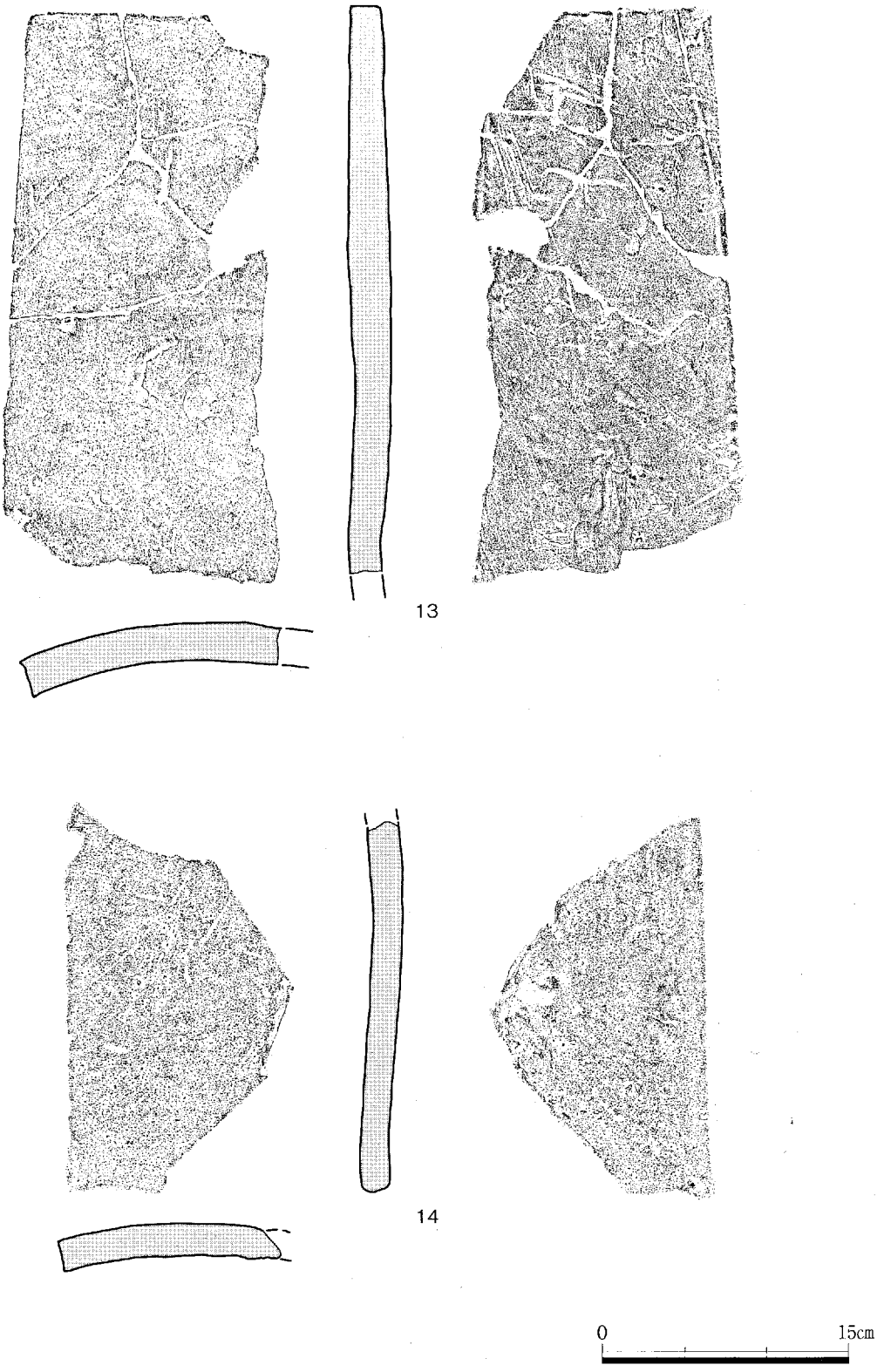


図40　平瓦Ａ類②（Ｓ＝1/4）

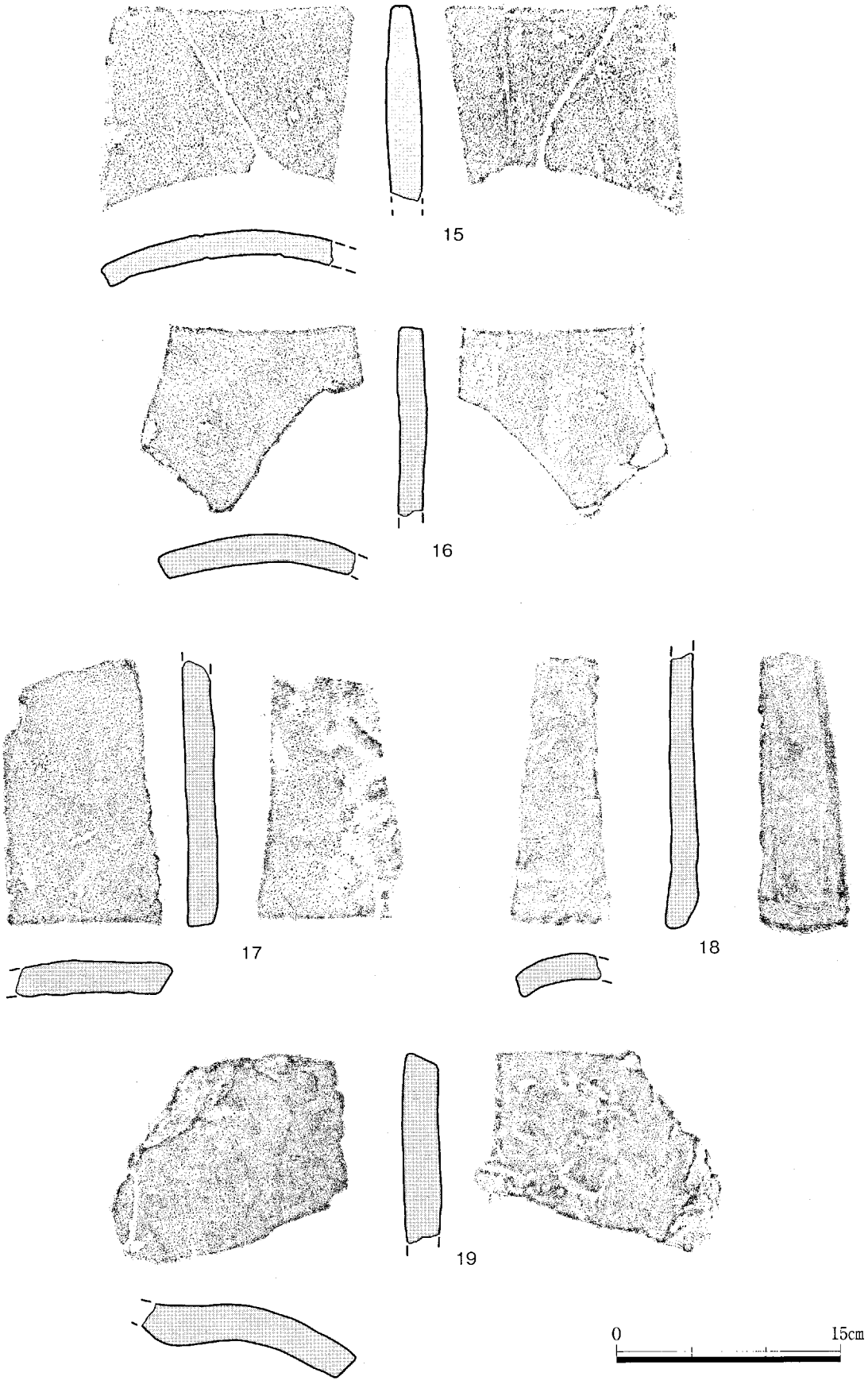


図41　平瓦A類③（S＝1/4）

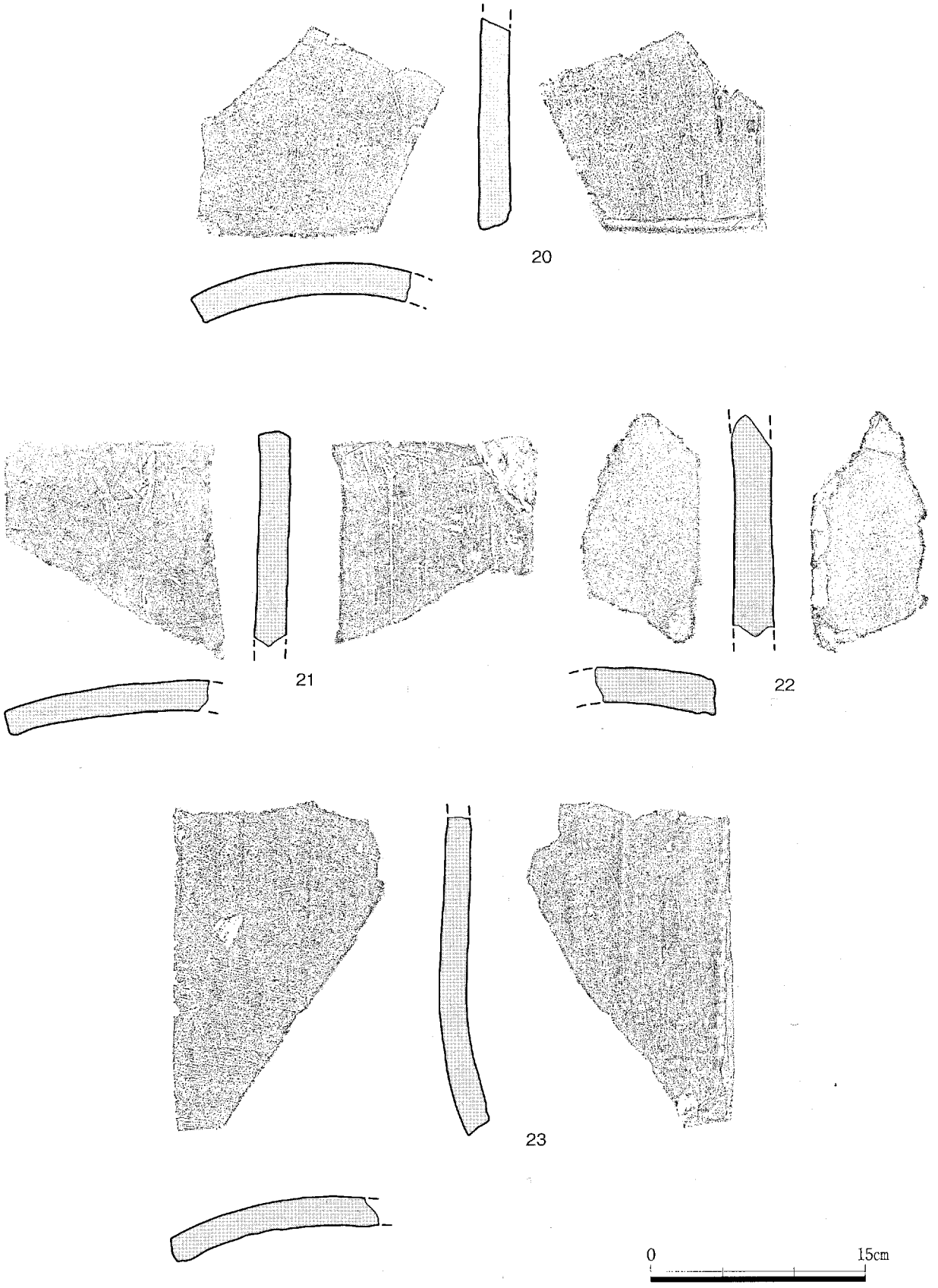


図42　平瓦B類（S＝1/4）

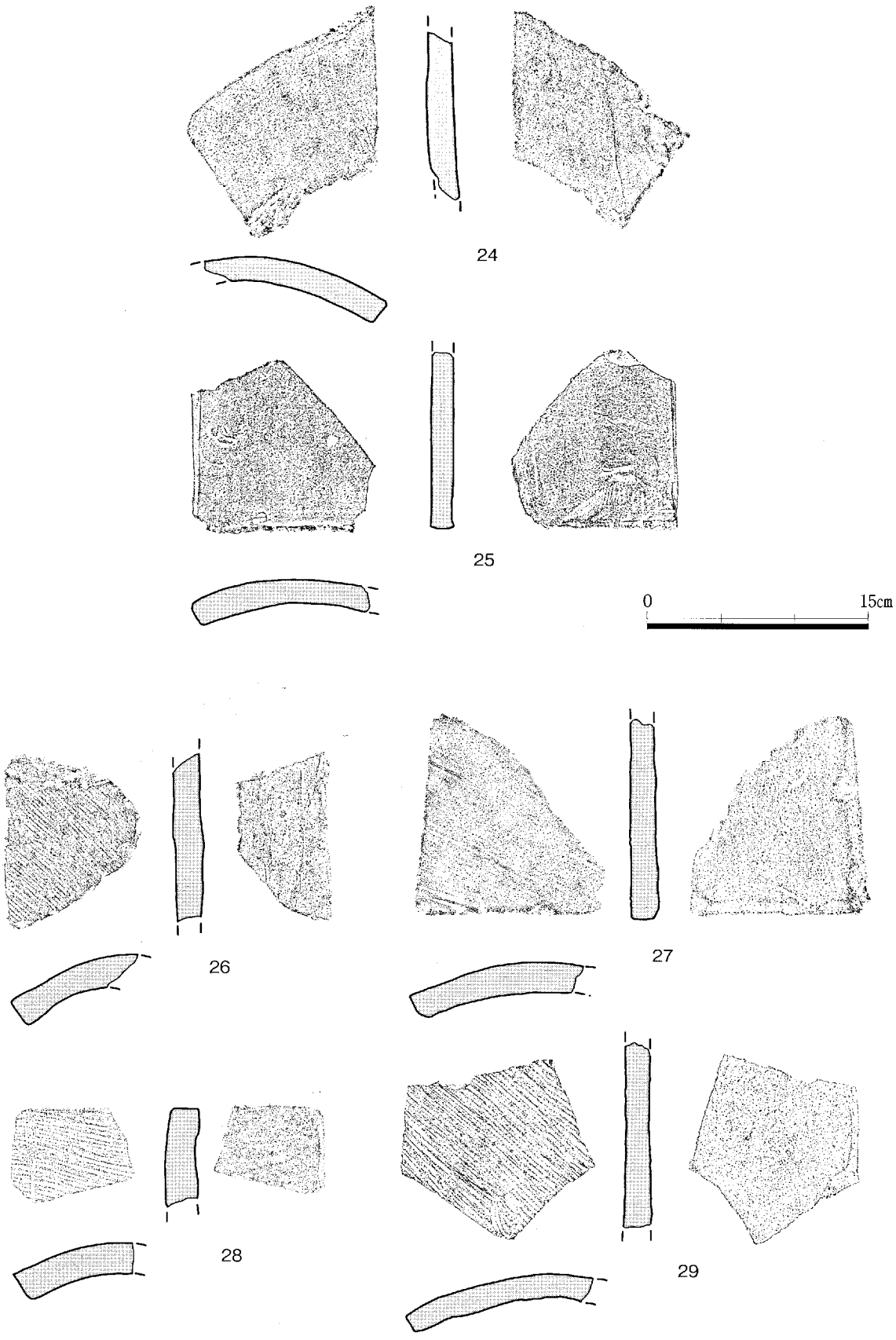


図43　平瓦B・C類（S＝1/4）

(12) は、全長37.1cm、厚さ2～2.5cmで50%程残存している。全体的に磨滅しているが、側面が分割後未調整で、凹面には布目痕が残っており、側面近くには分割截線と思われる縦方向の線がみられる。磨滅が著しいが、凹面には (11) と同様な位置に側板の紐綴じの痕跡がみられる。(13) は、縦半分と広端側がかけており残存長34cmである。広端側には (11) と同様に紐綴じの痕跡と思われる長径1.5cmの不定形な窪みが2ヶ所みられる。それを基準にすると全長は37～39cmに復元できる。側面は未調整で、凹面はタテナデが施されているが、粗く布目痕や糸切り痕が残存している。側面付近には分割界線と思われる縦方向の線がある。凸面はタテナデが丁寧に施されており、狭端付近はヨコナデがみられる。

平瓦B類は、桶巻作りの平瓦で、青灰色のものが多く、焼成は硬質でいわゆる須恵質である。全体の法量が推測できるような資料は出土していない。分割後、側面調整を行っている。側面調整は分割破面と分割截面をともに調整を行うものが主で、まれに分割破面のみ調整を行うものもあった。凹面及び凸面ともナデもしくはケズリにより表面を平滑にしているが、凸面をナデ後に補助タタキを施しているもの (23) や、凹面に布目痕が残っているもの (23など) も見られる。特に (23) は側面付近に撚り紐状の分割界線の痕跡がみられる。奈文研調査報告の平瓦1類及び2類Aにあたる。奈文研調査報告では瓦の厚さで細分しているが、本調査では端部の細片が多く細分が不可能であるのでB類と一括している。

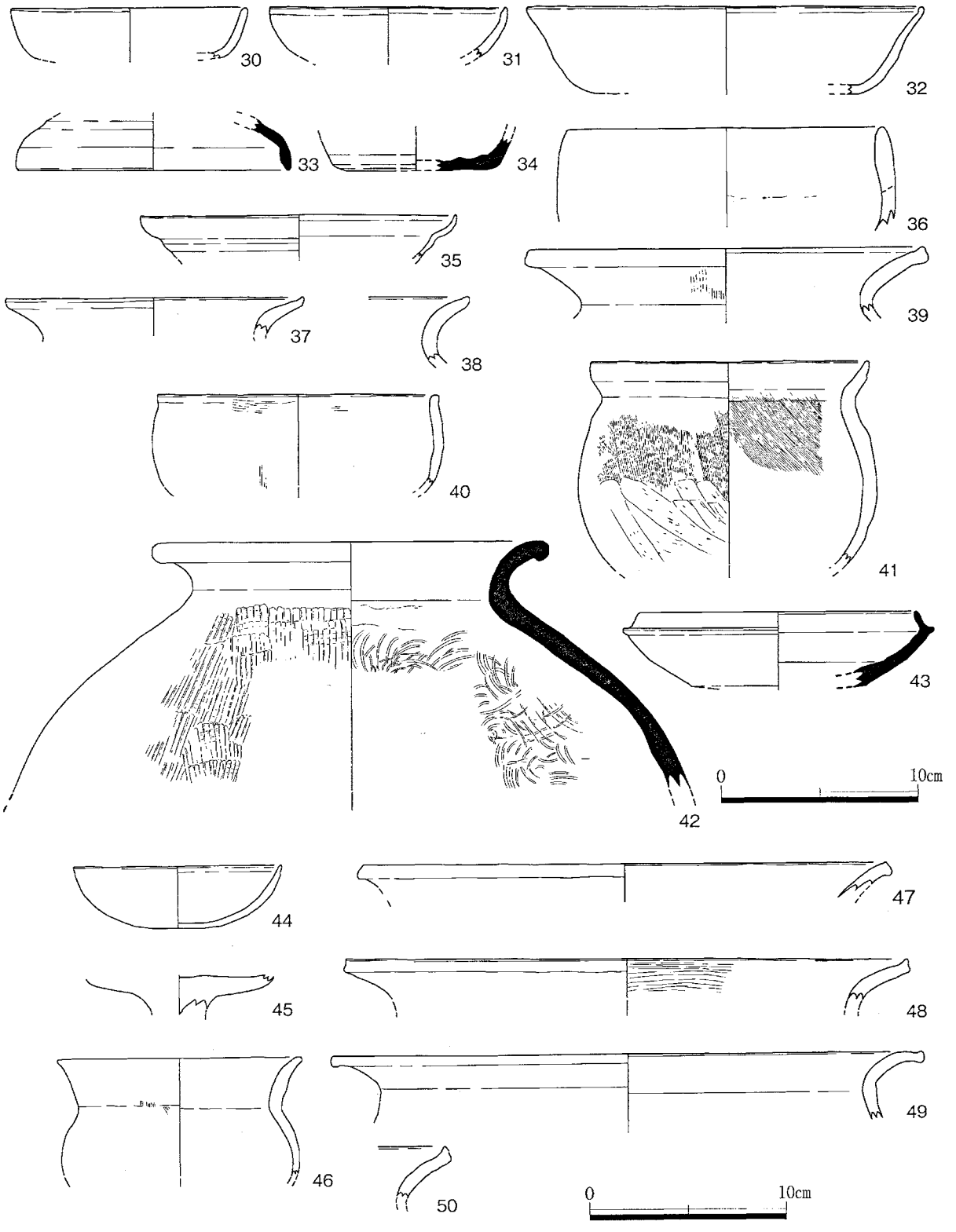
平瓦C類は、凸面に平行タタキ痕を残すもので、凹面はナデを施しているが、ナデが不完全で布目痕が残っているものもみられる。側面は分割後、ケズリ調整を行っている。奈文研調査報告の平瓦2類Bに相当し、2cm以下の厚みを持つものがほとんどであるが、(28) のように厚さ2.2cmを測るものもある。細片が多く、全体の形状が判明するものはない。

瓦小結　以上のように出土した瓦を分類し、これまで吉備池廃寺で出土している瓦とも比較しながらその特徴などを述べてきた。それぞれの分類ごとに出土位置を検討してみると（表5）SD104では、素弁蓮華文軒丸瓦、平瓦A類、丸瓦A類しか出土しておらず、その他の瓦類は出土していない。平瓦A類、丸瓦A類が次に多く出土しているのは、SD101だが、そのほとんどはSD101の東半部を掘削中に出土しており、本来はSD104の埋土中に破棄されていたものと考えられる。このような出土状況から、この一群は同一の建物に葺かれた組み合わせの可能性が高い。一方、SD101からは、平瓦A類、

表5　瓦各遺構出土別　重量

※重量の単位はkg

出土位置	丸瓦A類		丸瓦B類		丸瓦不明		平瓦A類		平瓦B1類		平瓦B2類		平瓦C類	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
SD101	4	1.17	1	0.36	0	0	8	1.70	10	4.59	10	3.30	4	1.09
SD104	3	1.89	0	0	0	0	22	10.93	0	0	0	0	0	0
SK134	0	0	0	0	0	0	3	0.27	0	0	0	0	0	0
SD103	0	0	0	0	1	0.20	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.75	1	0.14	1	0.08
計	7	3.06	1	0.36	1	0.20	33	12.90	13	5.35	11	3.44	5	1.16



30～43：SD101 出土
44：SD102 出土
46：SD103 出土
45・47・48：SD104 出土
49：SP112 出土
50：SP122 出土

図44　出土土器①（S＝1/3）

丸瓦A類を除くと、平瓦B類、C類が主体で、1点の軒平瓦、丸瓦B類が含まれる。この組み合わせは中心伽藍の調査時に吉備池廃寺の創建瓦の一群とされたものである。ちなみに、中心伽藍の調査ではSD104から出土している瓦の組み合わせは出土していない。

SD104から出土している瓦の組み合わせは、創建期とされている瓦の組み合わせより、それぞれ規格は一回り小さく、製作技法も異なる点が多い。中心伽藍付近での出土が認められないことから、これらが用いられたのは調査地周辺、すなわち回廊の南外側に限定的に使用された可能性が高い。また、SD104からはSD101から出土するような平瓦B・C類が出土しないことからSD104とSD101が同時に溝として機能していた可能性は低いといえる。

（2）土器

土器は残存状態が良いものは非常に少なく小片が多い。図44は各遺構から出土したもの、図45は覆土から包含層にかけて出土したものである。器種としては土師器の坏、甕、鉢、須恵器の甕、坏などである。古墳時代にさかのぼるような破片もわずかながらみられるが、全体的には7世紀後半以降の特徴を備える土器が主体を占める。

(30)～(43)はSD101から出土、(44)はSD102、(45・47・48)はSD104から出土したものである。小片が多い中、SD102出土の(44)は全体の半分ほど残っており、復元すると直径10.4cm、器高3.2cmになる。いずれの遺構も出土土器の点数が少ないことや小片が多いため遺構の時期を決定するのはなかなか難しいが、7世紀後半～末頃の土器の特徴をもつものである。

（3）木製品

柱根が2点出土している。(60)はSP113から出土したもので、残存長42cm、短径12.4cm、長径13.2

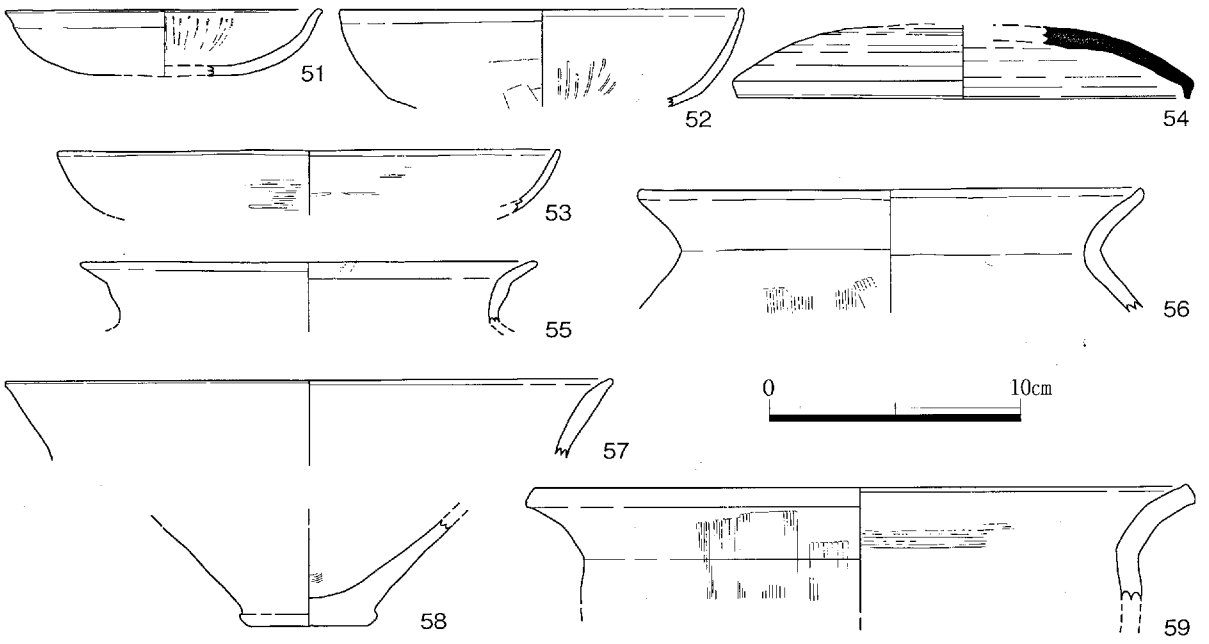


図45　出土土器②（S＝1/3）

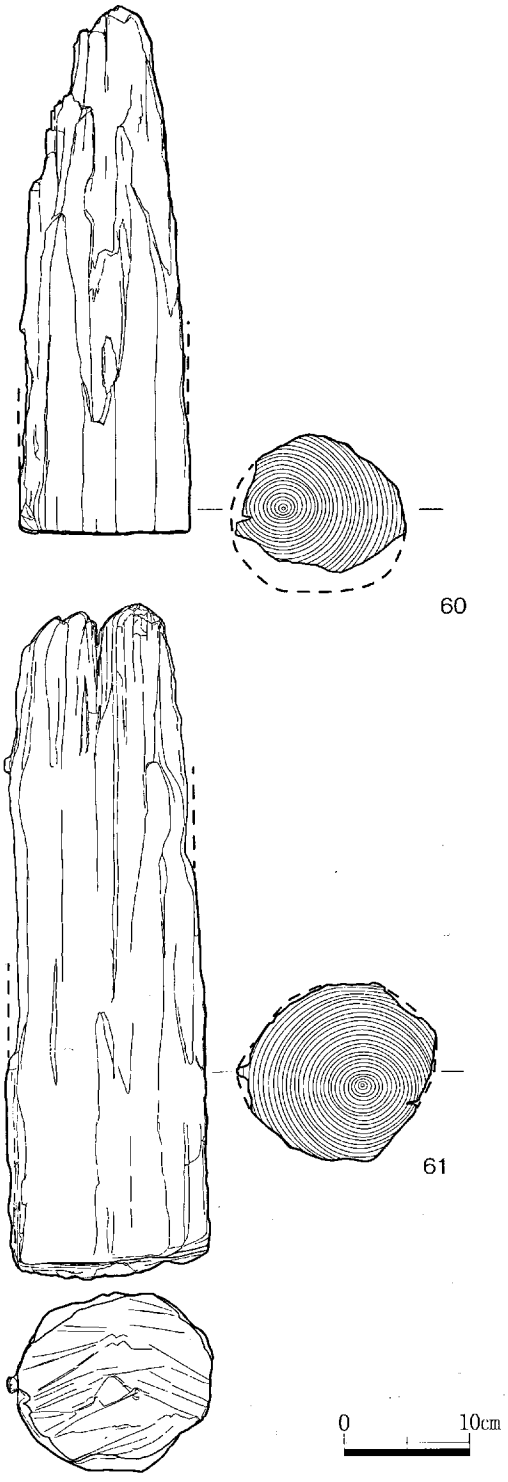


図46　柱材（S＝1/6）

cmである。木が腐植してしまっているところがあるため、本来は14cm程の直径の柱材であったと思われる。(61) はSP114内から出土している。残存長52.9cm、長径16.2cm、短径14.1cmである。木の残存状態が異なるため、現存の法量は異なるが、本来はほぼ同様の法量だと思われる。その他として、木製品ではないが、SD102及び104から多量の木片が出土している（図版30)。いずれも同種の木質であると思われ、木材を斫ったような破片であることから、これらは部材を最終調整する際に生じたものの可能性がある。

5. まとめ

調査区内では、当初の目的である南門跡と積極的に評価できる遺構は見つけることができなかった。ただ、吉備池廃寺と併行するもしくは近接する時期と思われるSD101とSD102・104の二つの溝を検出することができた。特にSD102・104は回廊の中軸を意識した場所に存在しているため、中心伽藍に向かう道路の側溝のような性格も考えなければならず、対応するもう一方の有無の確認が今後必要である。SD101は東西に延びる溝であるが、今回の調査地の西側、東側で行われた過去の調査では、この溝に対応するような遺構が見つかっておらず、性格を特定するまでにいたっていない。今後の課題となる。

また、SD104から出土した素弁蓮華文軒丸瓦、平瓦A類、丸瓦A類の組み合わせは、これまでの中心伽藍の調査では出土していないものであった。素弁蓮華文軒丸瓦はいわゆる星組の系譜をひく伝統的な文様で、同笵のものは斑鳩寺、四天王寺、楠葉平野山窯などで出土している。一方、吉備池廃寺の創建期の瓦とされている単弁蓮華文軒丸瓦は百済大寺を建立するために新たに創出された文様と考えられているもので、この二つの新古のセットが吉備池廃寺で使用されていることが判明

したのは大きな成果であった。斑鳩寺、四天王寺、吉備池廃寺は、これまでも瓦の共通性から非常に関連が深い寺院と考えられており、それらの寺院を繋ぐ背景には上宮王家、阿倍内倉梯麻呂の名前があげられている。今回の発見もそれを補強する一つの材料となろう。

ただ、素弁蓮華文軒丸瓦を用いた建物の性格（おそらく回廊の南側）やなぜその建物に中心伽藍と異なる古風な瓦のセットが用いられたのかなど、興味の尽きないテーマも多く見つかる結果となった。今回出土した遺構や遺物は、「百済大寺」とされる吉備池廃寺の創建の過程を解明する一つの手がかりとなろう。（丹羽）

【註記】

1）奈良文化財研究所　2003『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺跡の調査―』 奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊
以下、「奈文研調査報告」と略す

2）橋本輝彦　2002「第５章吉備池遺跡第12次発掘調査概要報告」『平成13年国庫補助による発掘調査報告書』 桜井市教育委員会

3）小澤毅　2002「第Ⅵ章　結語」『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺跡の調査―』 奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊

4）毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩　1991 『法隆寺の至宝　瓦』 法隆寺昭和資財帳15
奈良文化財研究所　2007『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』 奈良文化財研究所学報第76冊

5）四天王寺文化財管理室　1986『四天王寺古瓦聚成』
清水重敦 『蓮華百相―瓦からみた初期寺院の成立と展開―』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第51冊

6）西川雄大・花谷浩　2002「第Ⅳ章　遺物　１瓦磚」『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺跡の調査―』 奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊

7）註４）文献と同じ

【参考文献】

菱田哲郎　1986「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』 69巻第３号
菱田哲郎　1994「瓦当文様の創出と七世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相』 古代王権と交流５
大脇潔　1995「吉備寺はなかった―「京内廿四寺」の比定に関連して―」『文化財論叢Ⅱ』 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集
網伸也　1997「四天王寺出土瓦の編年的考察」『堅田直先生古希記念論文集』

表6　平瓦・丸瓦一覧表

図番号	分類	出土遺構・層位	全長（cm）	厚さ（cm）	側面調整	凹面の特徴、特徴など	凸面の調整、特徴など	重量（g）
5	丸瓦A類	SD101上層	(18.0)	1.8～2.3	ケズリ	布目、玉縁部はケズリ	補助タタキ、ヨコナデ	831
6	丸瓦A類	SD104	(15.5)	1.9～2.5	ケズリ	布目、玉縁部はケズリ	タテナデ	594
7	丸瓦A類	SD104	(15.3)	1.9～2.1	ケズリ	摩滅	摩滅	717
8	丸瓦A類	SD104上層	(6.2)	2(玉縁部)	ケズリ	玉縁部　ケズリ	強い回転ナデ	126
9	丸瓦A類	SD101中層	(6.8)	2(玉縁部)	ケズリ	玉縁部　ケズリ	強い回転ナデ	153
10	丸瓦B類	SD101中層	(6.8)	3.8～4	－	布目	ナデ	360
11	平瓦A類	SD104盛土上面	38.2	2	分割破面未調整	布目、狭端に併行する紐跡あり、側板綴じ合せ痕あり	ナデ	2191
12	平瓦A類	SD104盛土上面	37.1	2～2.5	分割破面未調整	布目、狭端に併行する紐跡あり、側板綴じ合せ痕あり		2130
13	平瓦A類	SD104上層	(34.0)	2.2	分割破面未調整	布目を工具により消すが、よく残る。分割截線？	タテナデ、狭端付近はヨコナデか	1909
14	平瓦A類	SD104	(13.5)	2	摩滅	磨滅、糸切り痕あり。	ナデか？磨滅	685
15	平瓦A類	SD104上層	(14.8)	2.4	分割破面未調整	布目、糸切り痕あり。	ナデか？磨滅	506
16	平瓦A類	SD104	(13.7)	1.4～1.9	分割破面未調整	布目後ナデ	ナデか？磨滅	316
17	平瓦A類	SD104上層	(17.6)	2	分割破面未調整	ナデか？磨滅	ナデか？磨滅	477
18	平瓦A類	SD104	(18.4)	1.5～1.7	分割破面未調整	布目	磨滅	257
19	平瓦A類	SD101中層	(12.0)	1.9～2.5	分割破面未調整	布目をナデケス	磨滅	578
20	平瓦B類	SD101上層	(15.4)	2.2	分割後調整	布目→タテナデ　広端面沈線	平行タタキ？→タテナデ　広端面のみヨコナデ	651
21	平瓦B類	SD101下層	(14.5)	2.3	分割後調整	布目をタテナデで消す		599
22	平瓦B類	SD101下層	(15.3)	2.4～2.6	分割後調整	工具によるタテナデ	工具によるタテナデもしくはケズリ	444
23	平瓦B類	SD101上層	(22.0)	2	分割後調整	布目をナデ消す	補助タタキ、ナデ	777
24	平瓦B類	SD101中層	(15.5)	1.8	分割後調整	布目を工具によるタテナデで消す	工具によるタテナデ	327
25	平瓦B類	SD101中層	(11.9)	1.5～1.7	分割後調整	布目をナデ消す、広端付近ヨコナデ	タテナデ、広端付近ヨコナデ	374
26	平瓦C類	SD101上層	(11.8)	2	分割後調整	布目を工具によるタテナデ	平行タタキ	234
27	平瓦C類	SD101下層	(13.5)	1.7～2.0	分割後調整	布目のちナデか(磨滅)	平行タタキ	362
28	平瓦C類	SD101下層	(6.6)	2.2	分割後調整	ナデ　狭端周辺ヨコナデ	平行タタキ	169
29	平瓦C類	SD101中層	(12.6)	1.2～1.8	分割後調整	ナデ	平行タタキ	322

表7　各遺構の規模

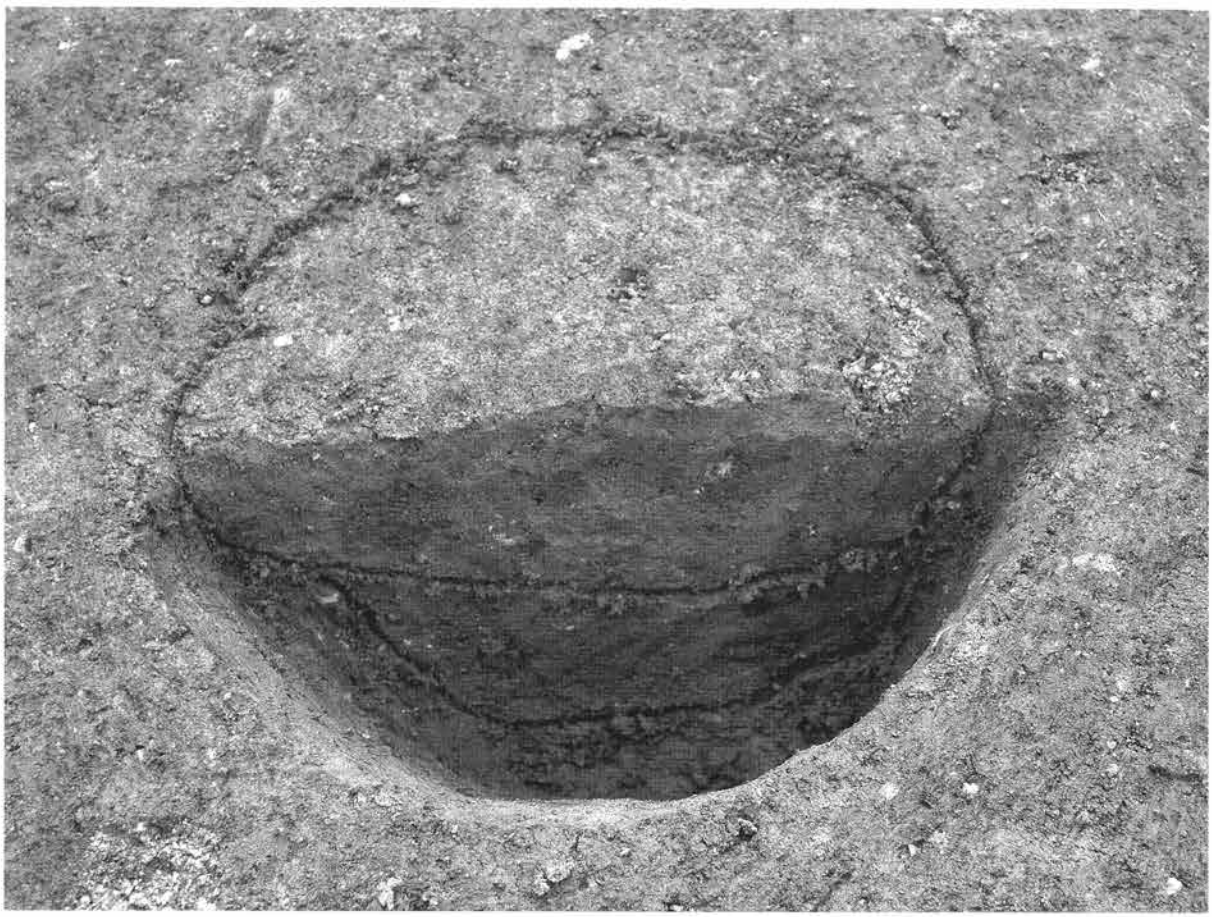
遺構名	検出面での遺構の規模		
	長さ（長径）cm	幅（短径）cm	深さ　cm
SD101	370以上	220	50
SD102	370以上	85	45
SD103		50以上	28
SD104		90	50
SK105	60以上	60以上	50
SK106	200以上	70以上	35
SP107	35	35	20
SP108	35	35	13
SP109	30	－	7
SP110	85	50	21
SP111	75	40以上	21
SP112	85	60	52

遺構名	検出面での遺構の規模		
	長さ（長径）cm	幅（短径）cm	深さ　cm
SP113	65	48	45
SP114	95	60	48
SP115	35	35	20
SP116	30	－	20
SP117	60	－	30
SP118	20	－	25
SP119	25	20	8
SP120	26	20	13
SP121	55	50	23
SP122	20	－	13
SP123	60	55	45
SP124	55	45	25

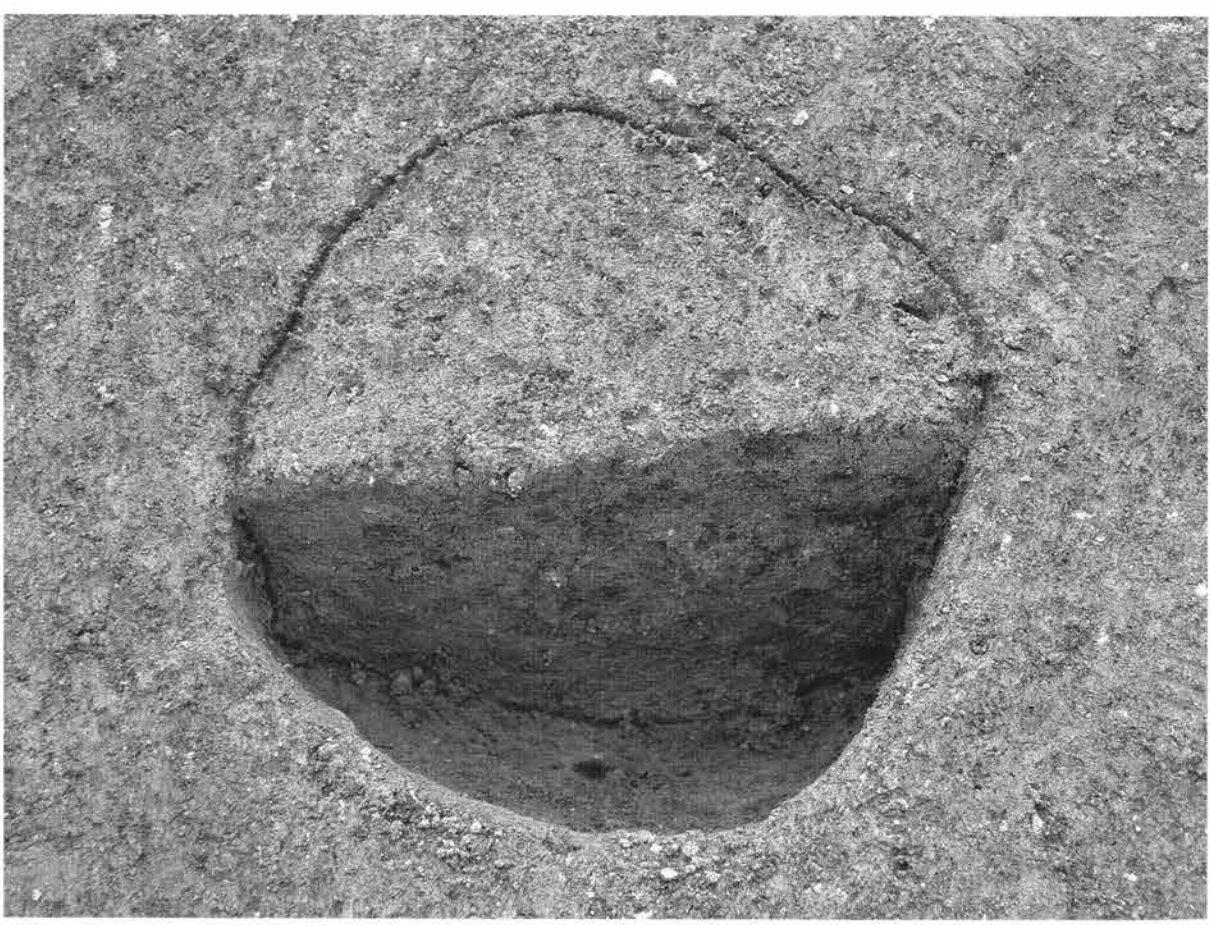
遺構名	検出面での遺構の規模		
	長さ（長径）cm	幅（短径）cm	深さ　cm
SP125	75	60	20
SP126	30	30	22
SP127	35	35	20
SP128	60	50以上	10
SP129	30	25	16
SP130	30	30	16
SP131	20	20	15
SP132	60	60	35
SP133	45	－	30
SK134	70 ？	－	10
SP135	35以上	35	25

調査地全景（西より）

サブトレンチ土層断面（東より）



ピット１土層断面



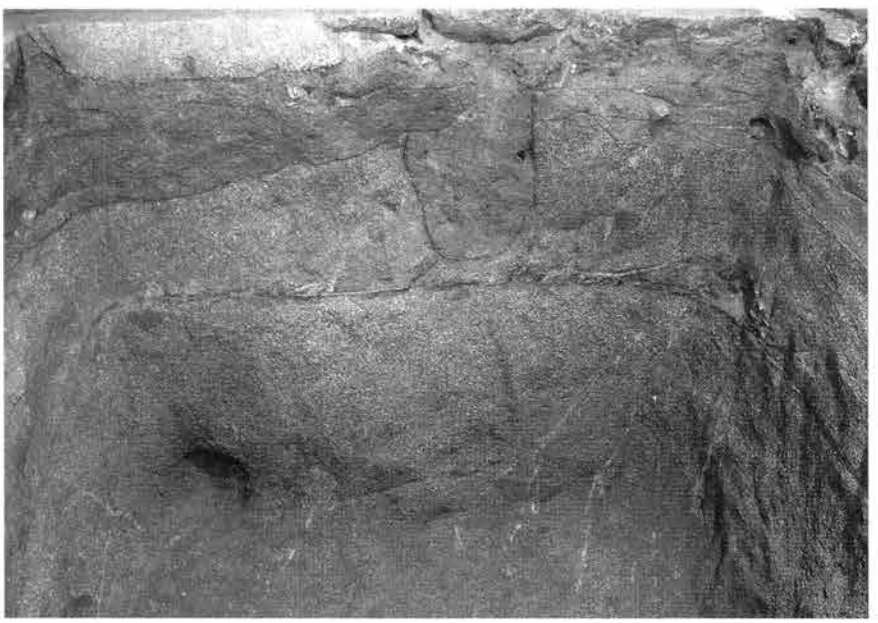
ピット２土層断面

調査前の防空壕（南より）

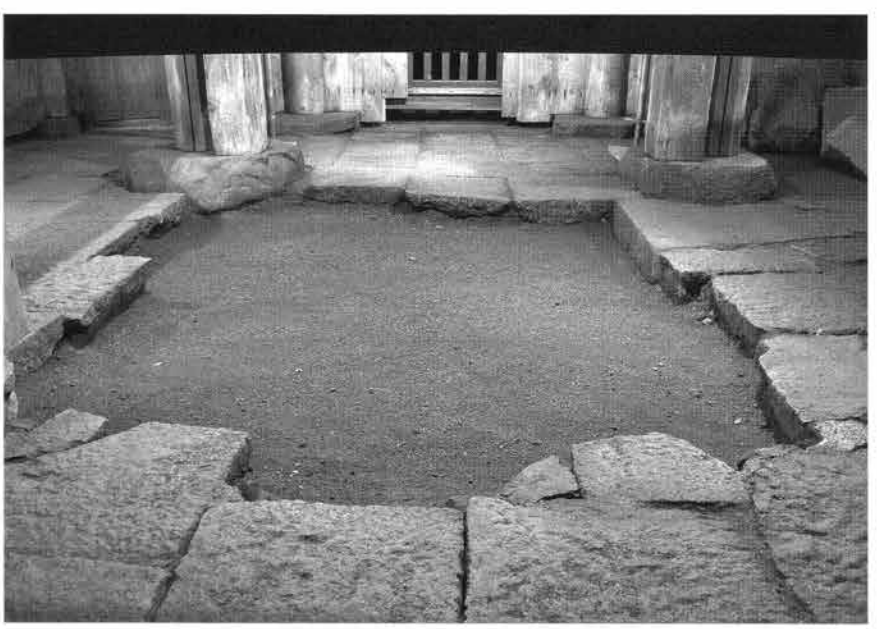
輪宝出土状況

防空壕東・南壁（北西より）

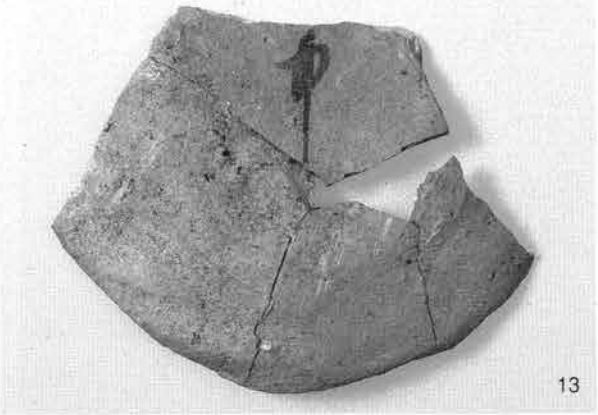
防空壕北壁（南より）



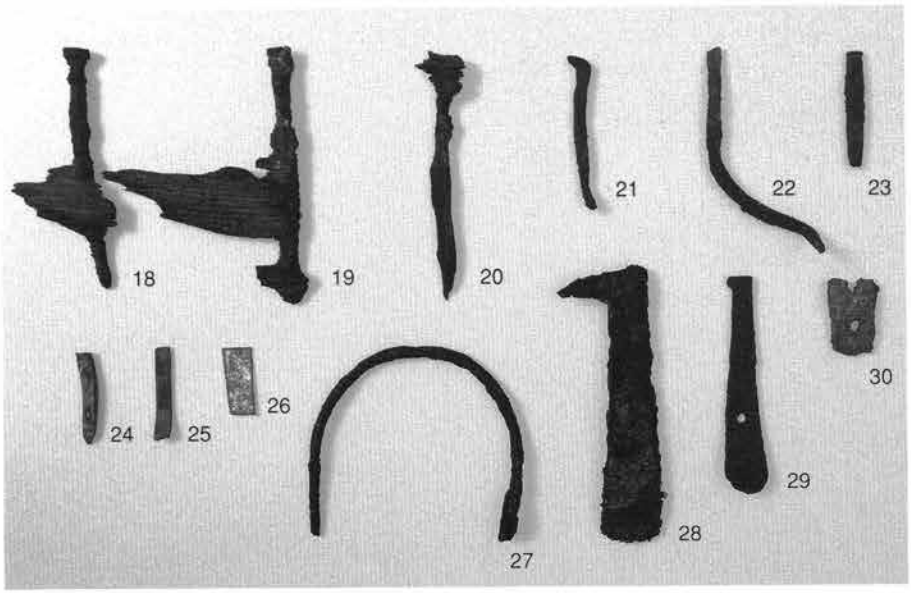
防空壕西壁（東より）

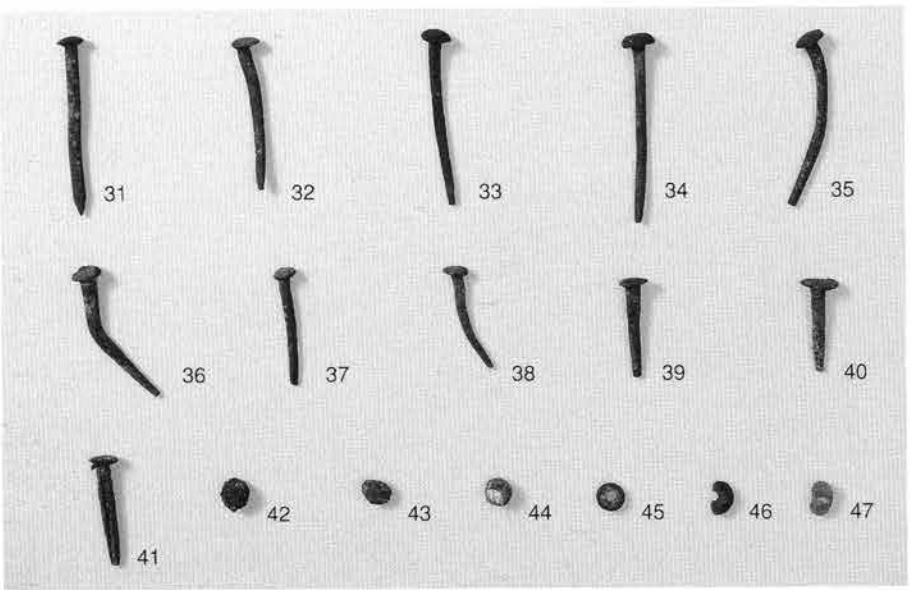


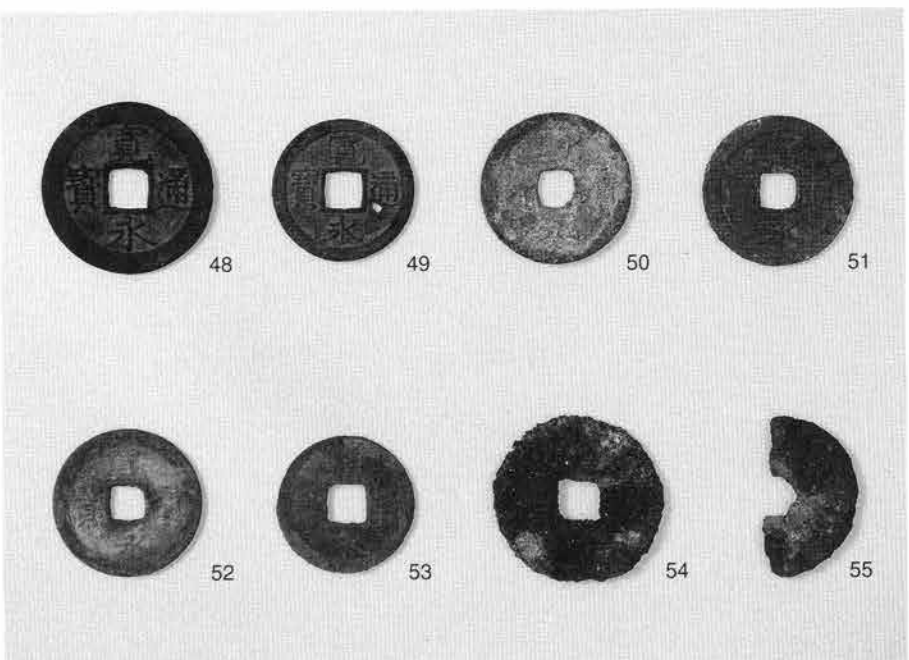
埋戻し後の防空壕（北より）



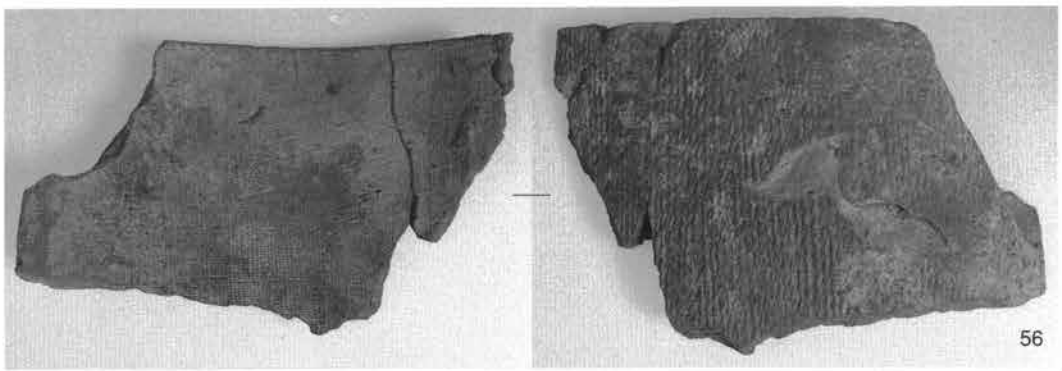
出土遺物①

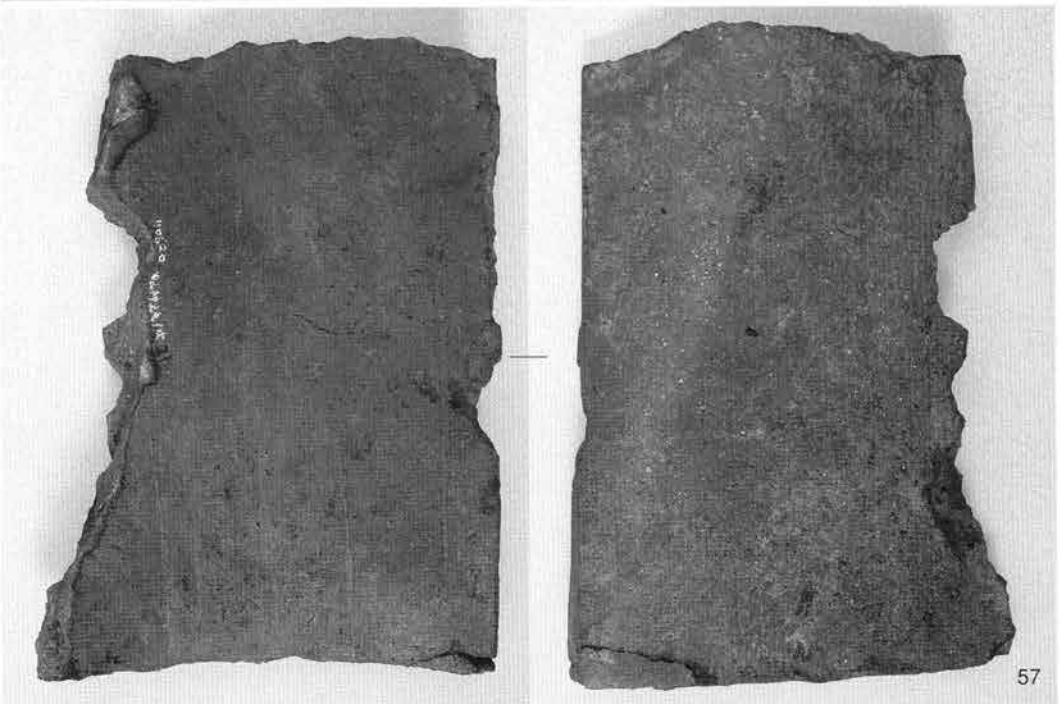

18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

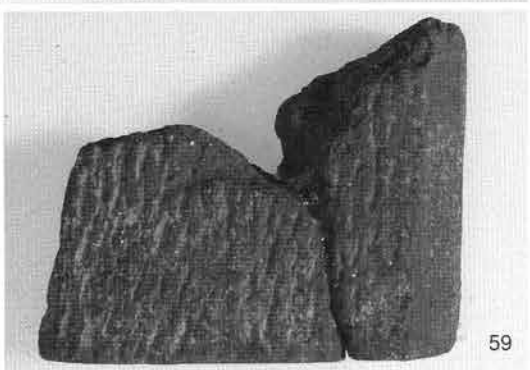

31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

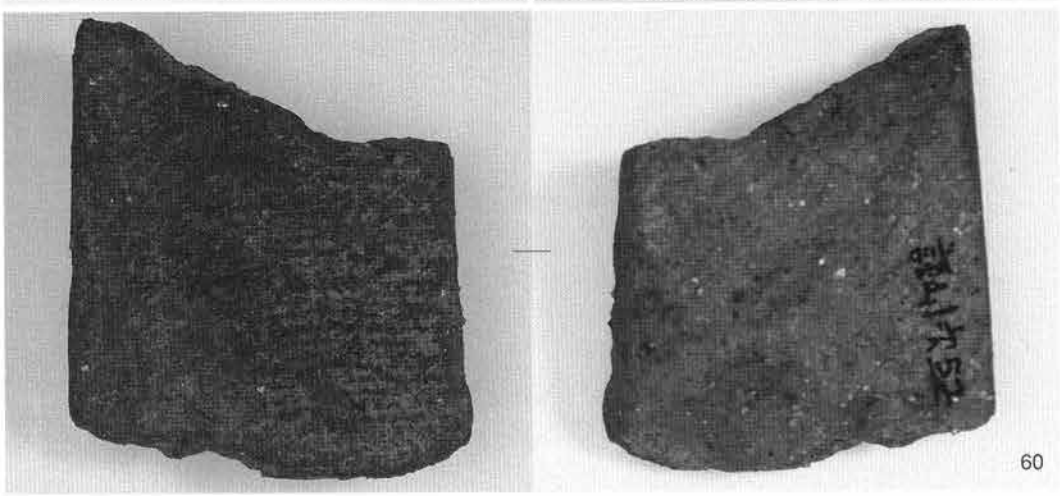

48
49
50
51
52
53
54
55

出土遺物②



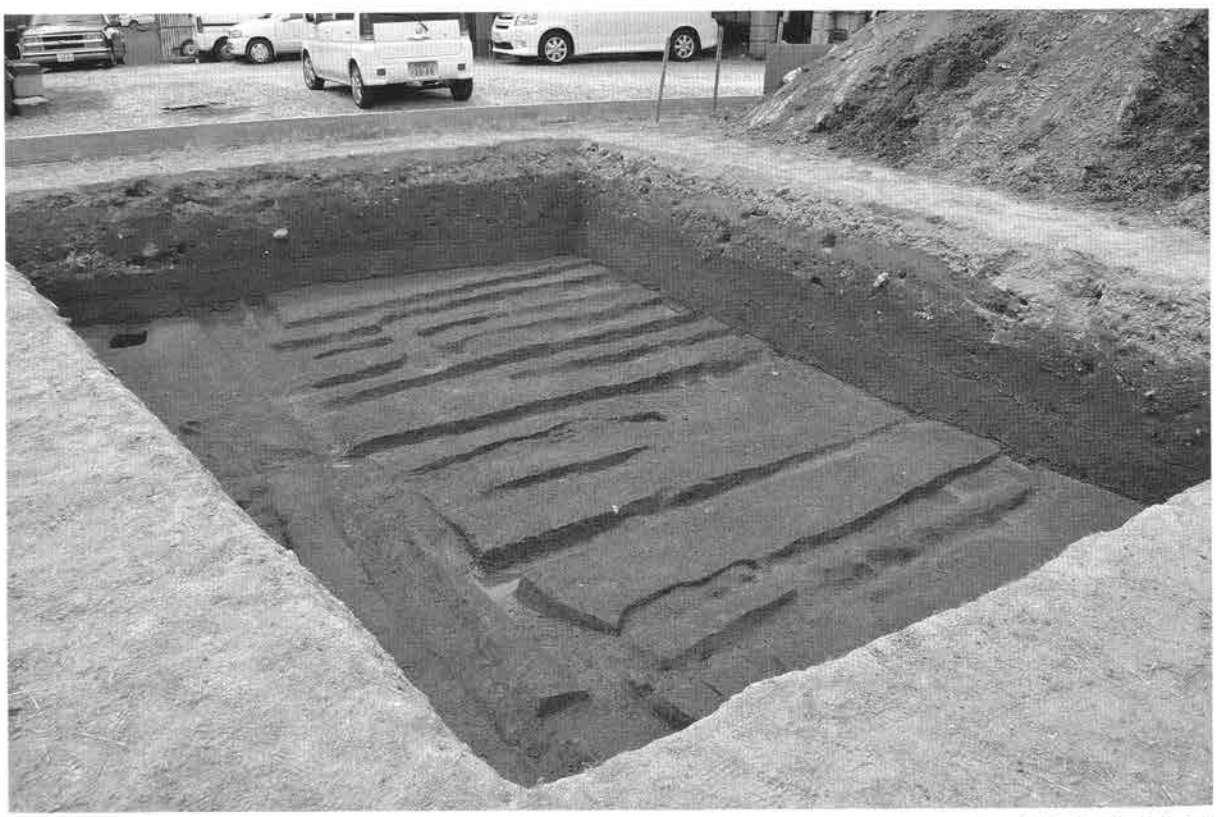






出土遺物③

調査前の調査地（南西より）



中世の遺構面（南東より）

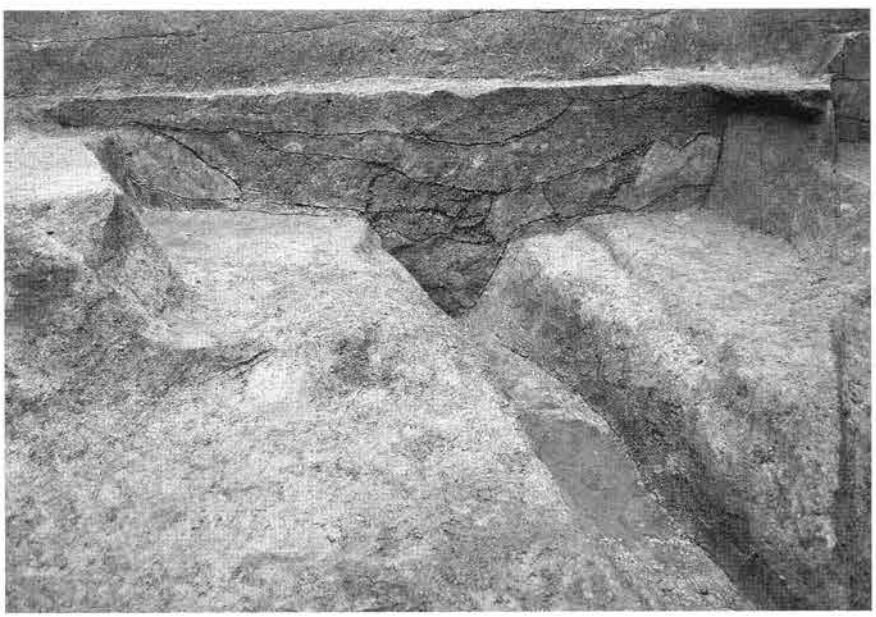
SD02（北より）

西壁断面（東より）

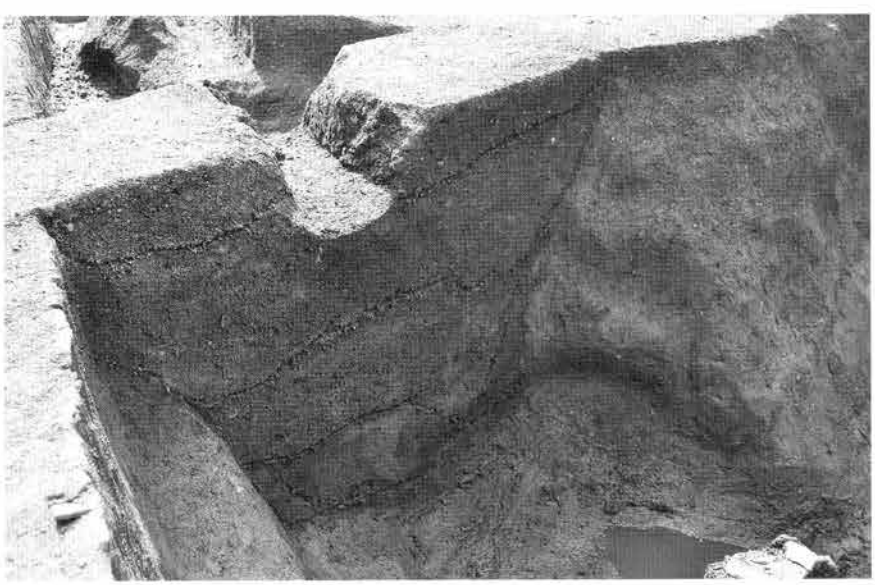
SD01遺物出土状況（北より）

SD01断面（北より）

SD01・SD02掘削状況
（北東より）



SD04掘削状況（北より）

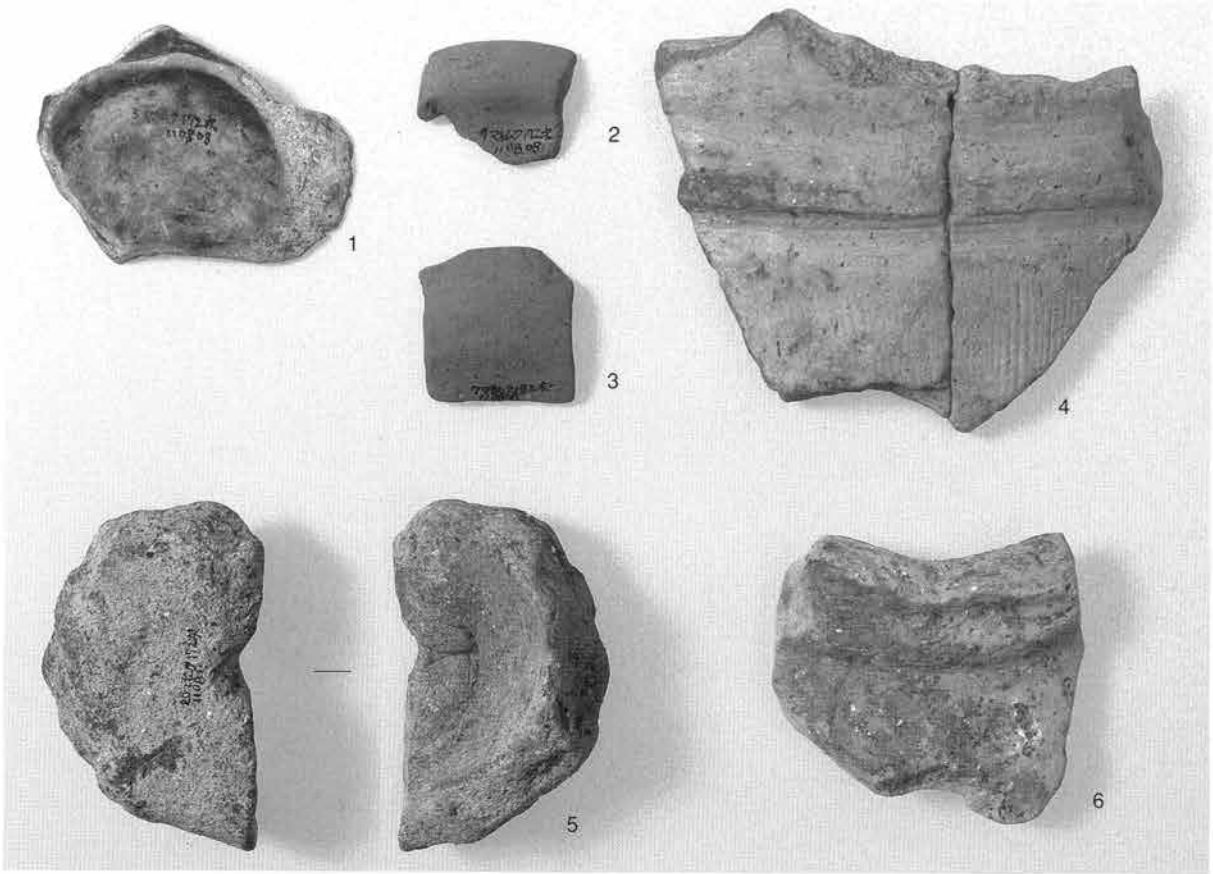


SD05断面（東より）

完掘状況（北西より）

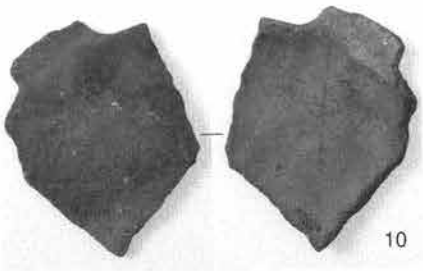
SK01・SD05完掘状況
（北東より）

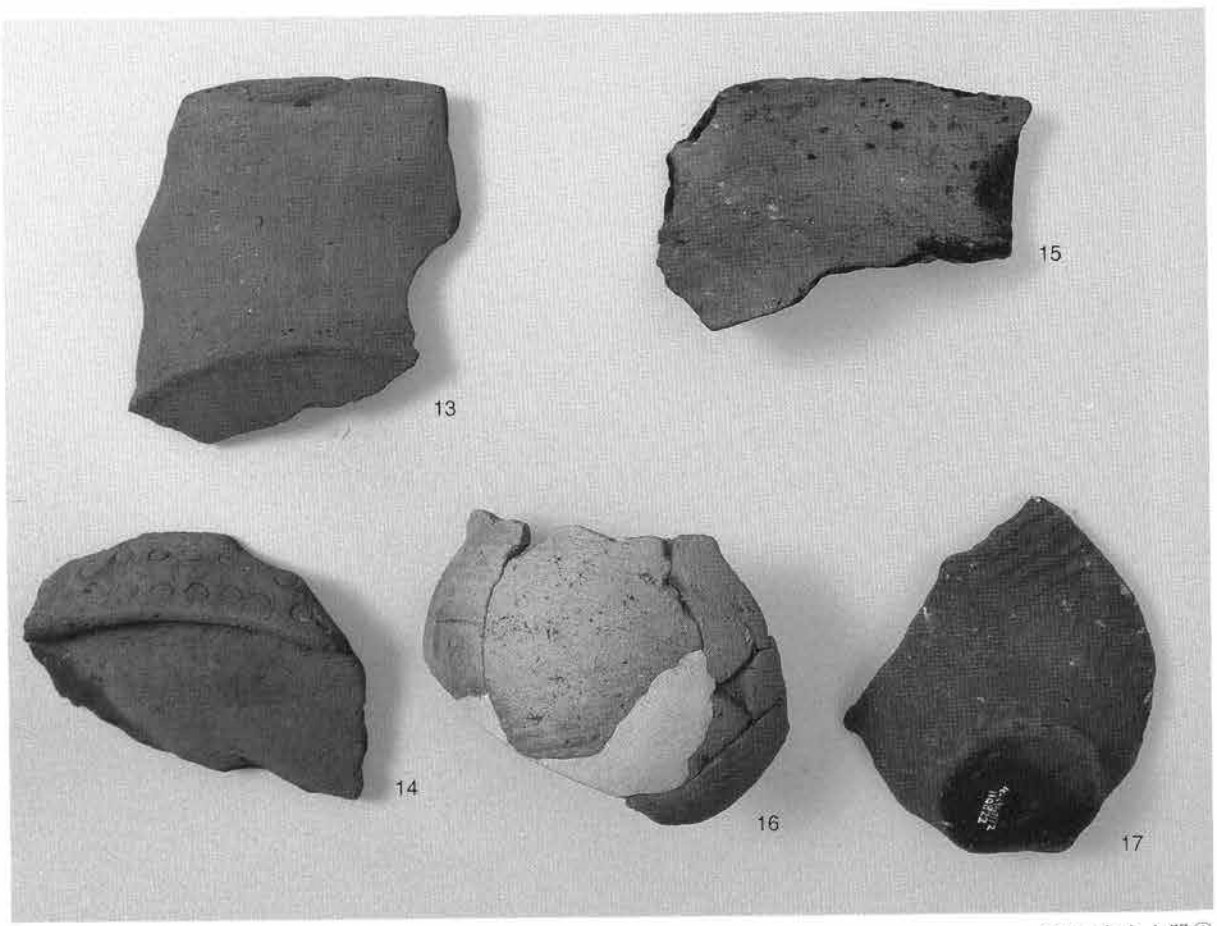
埋戻後の状況（南より）



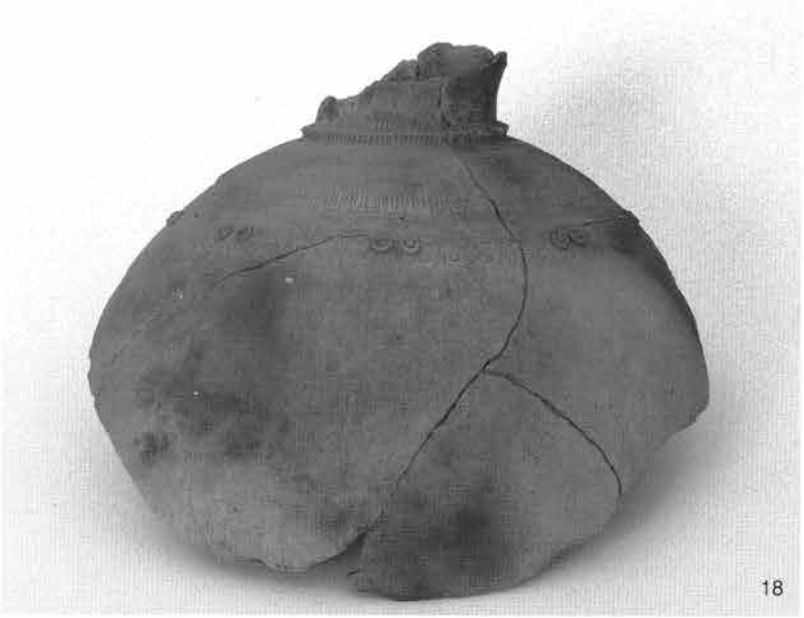
包含層出土土器

SD01　出土土器①



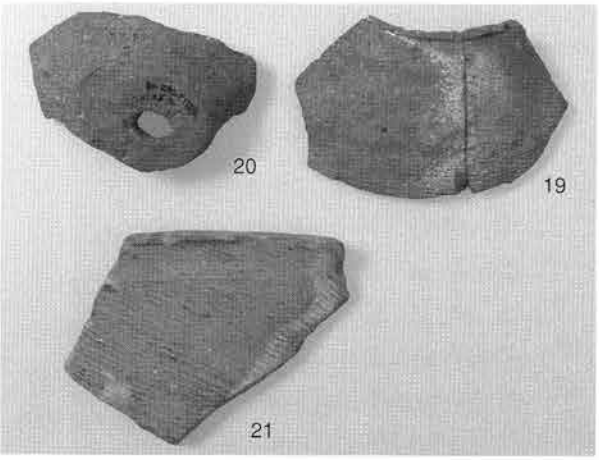


SD01出土土器②

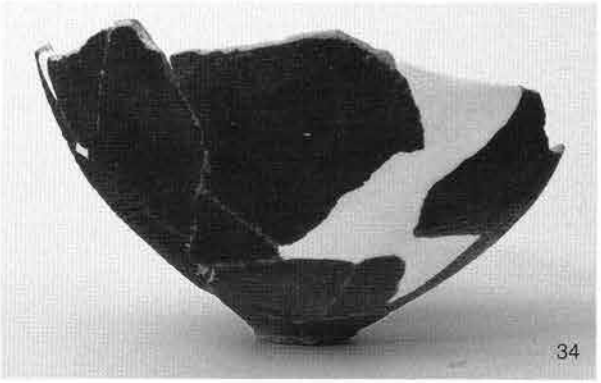


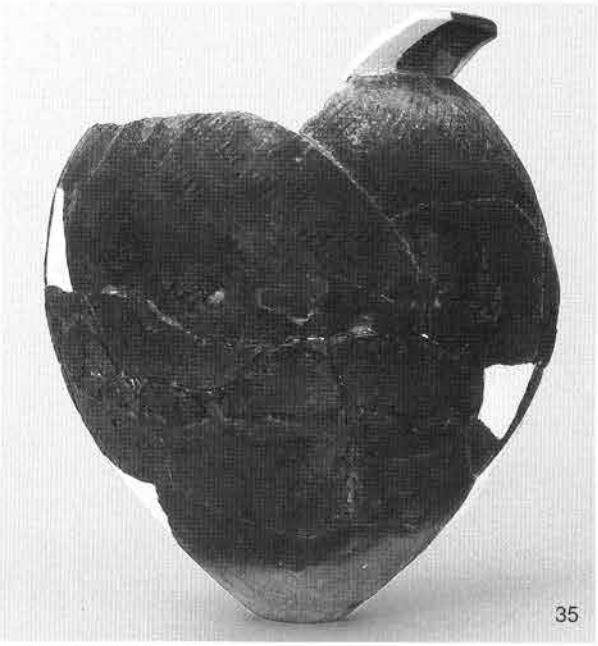
SD01出土土器③

SD04出土土器

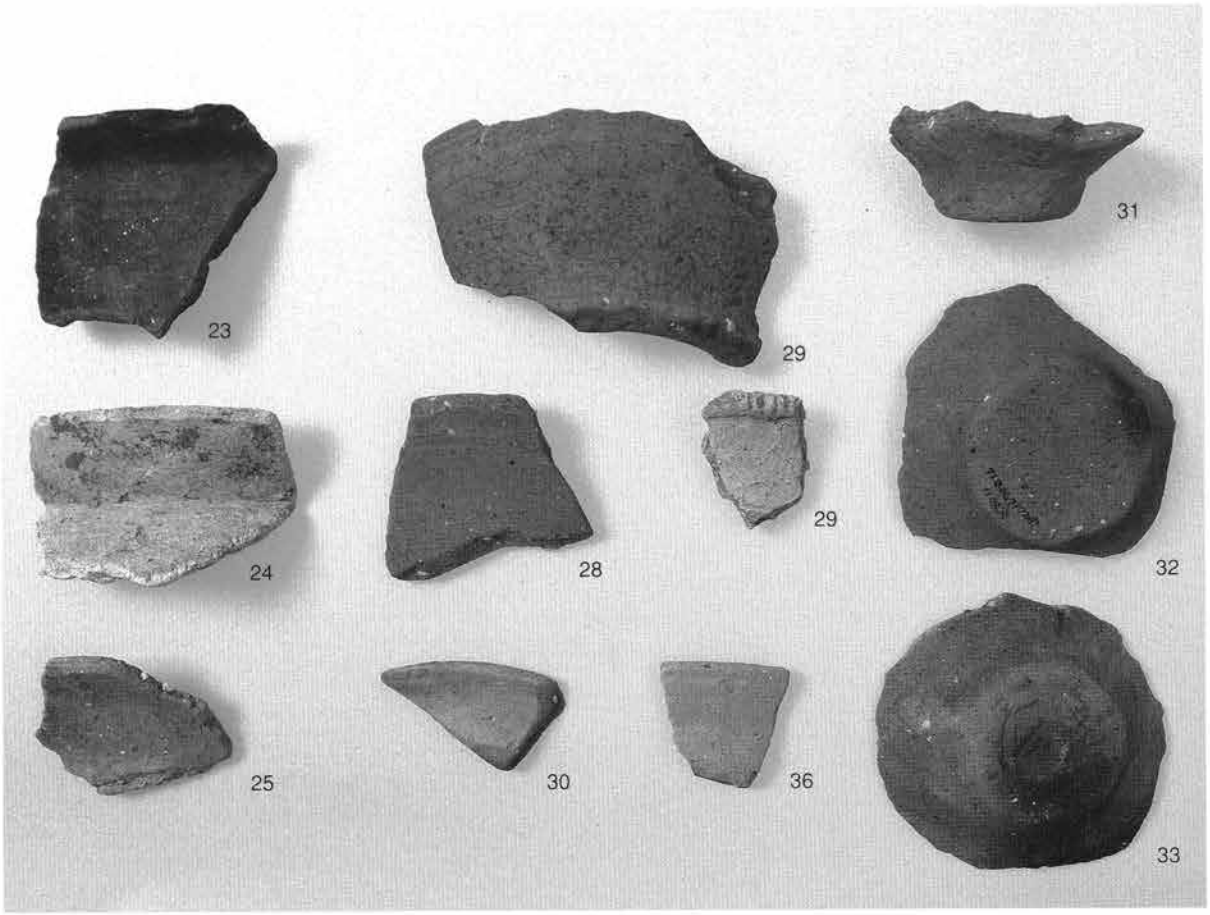


SD02出土土器

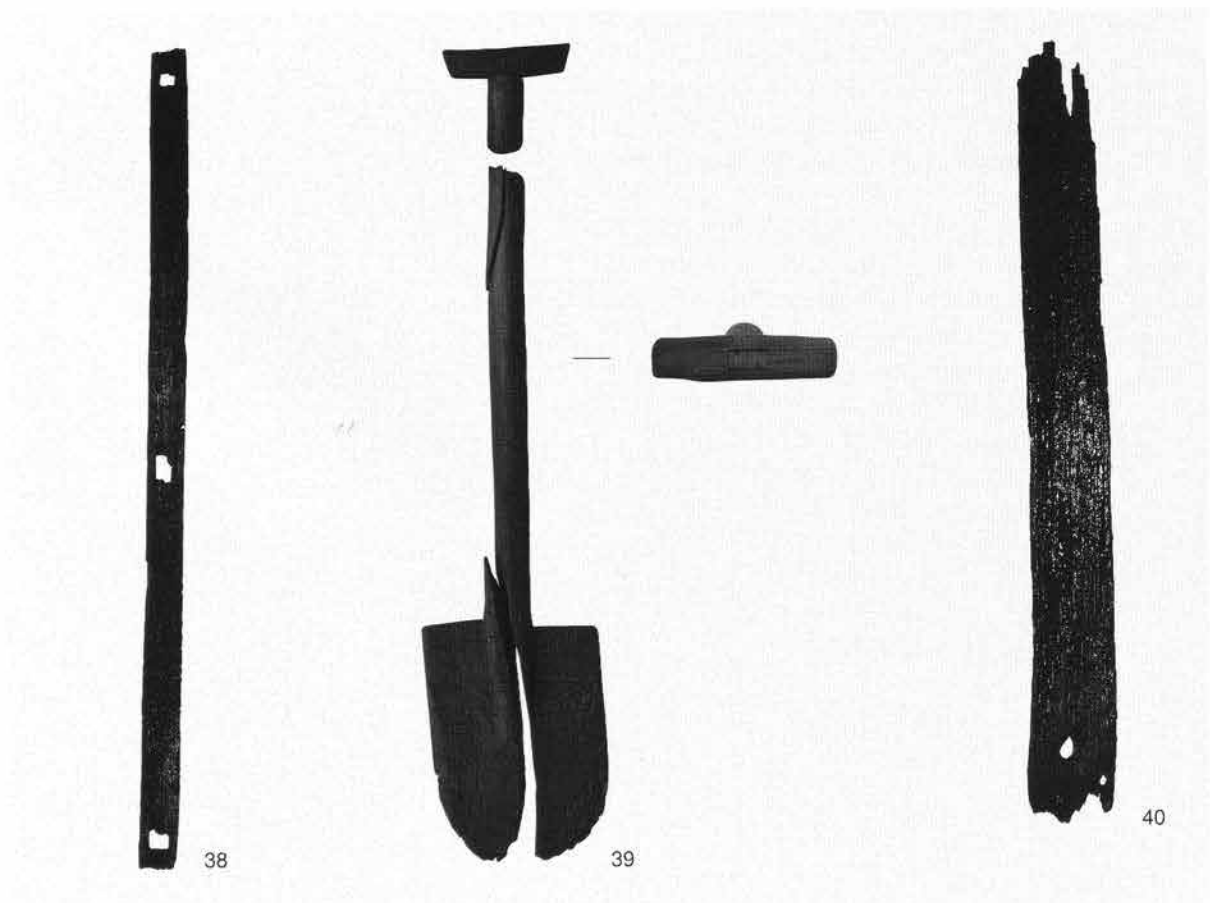




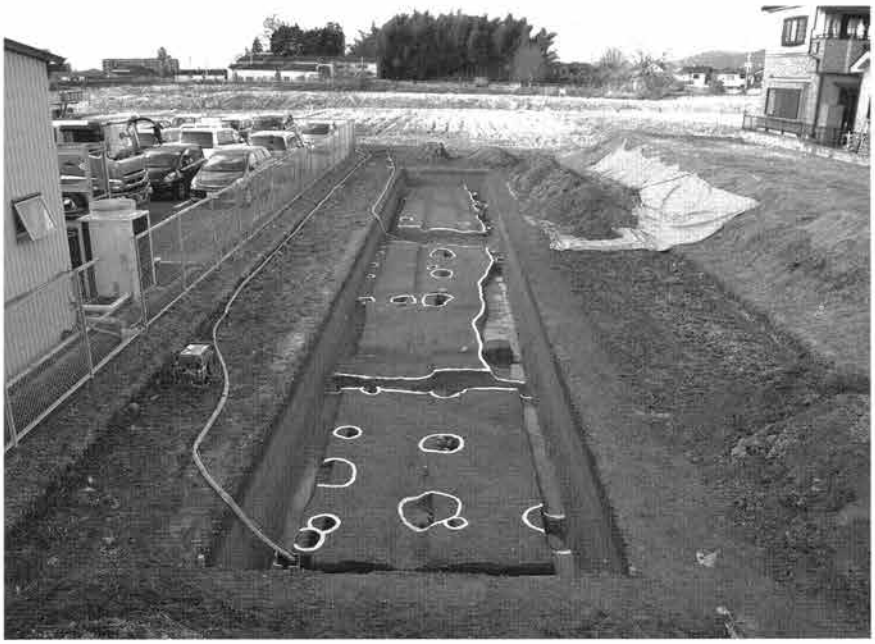
SK01・SD05出土土器①



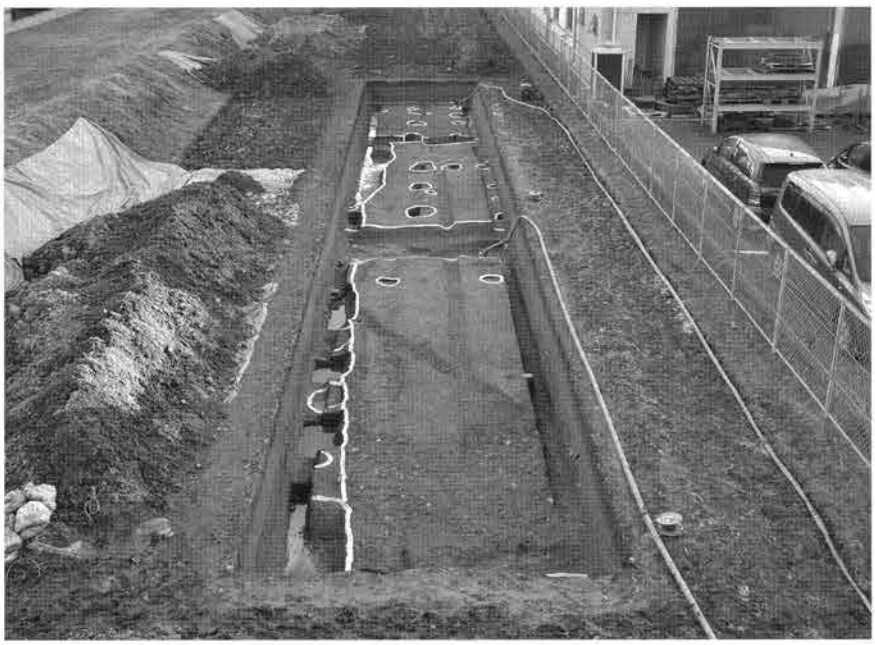
SK01・SD05出土土器②



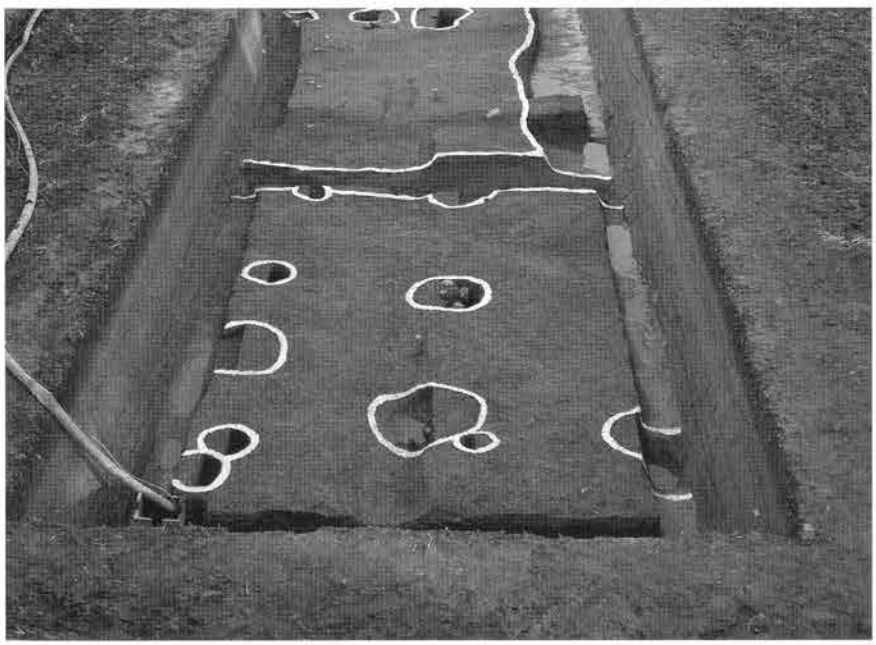
出土木製品



全景（南より）



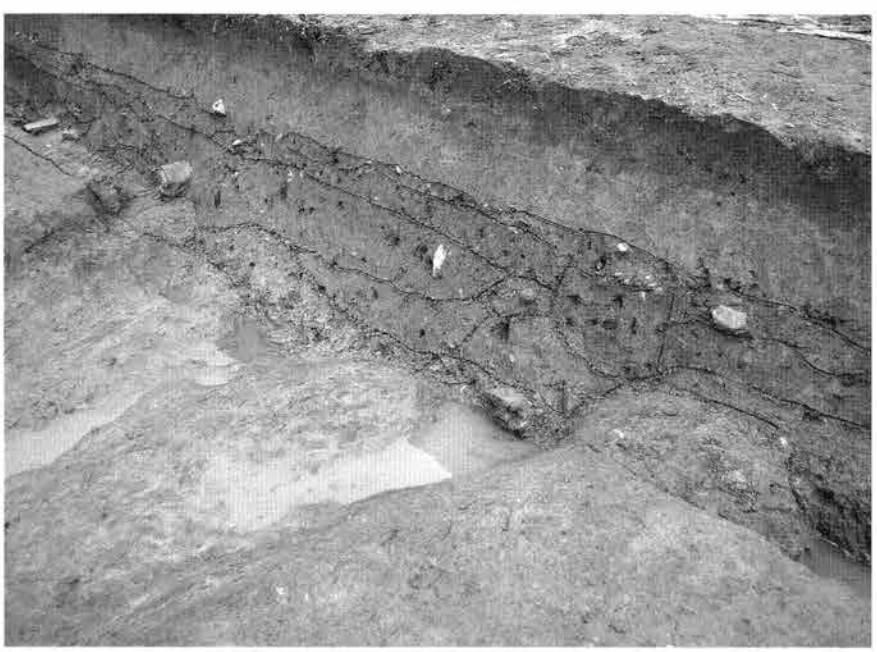
全景（北より）



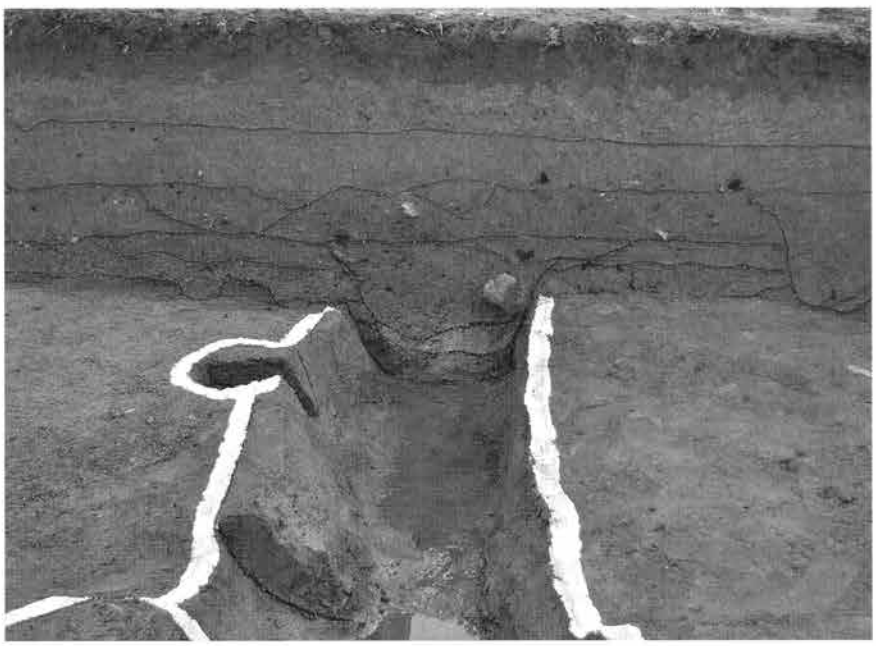
南ピット群（南より）

調査区中央部ピット群
（南西より）

SD101西壁断面（東より）



SD101東壁断面（南西より）



SD102西壁断面（東より）

SD104A地点断面（南より）

SD104B地点断面（南より）

SD104C地点断面（南より）

北拡張北壁断面
SD104D地点断面
（南西より）

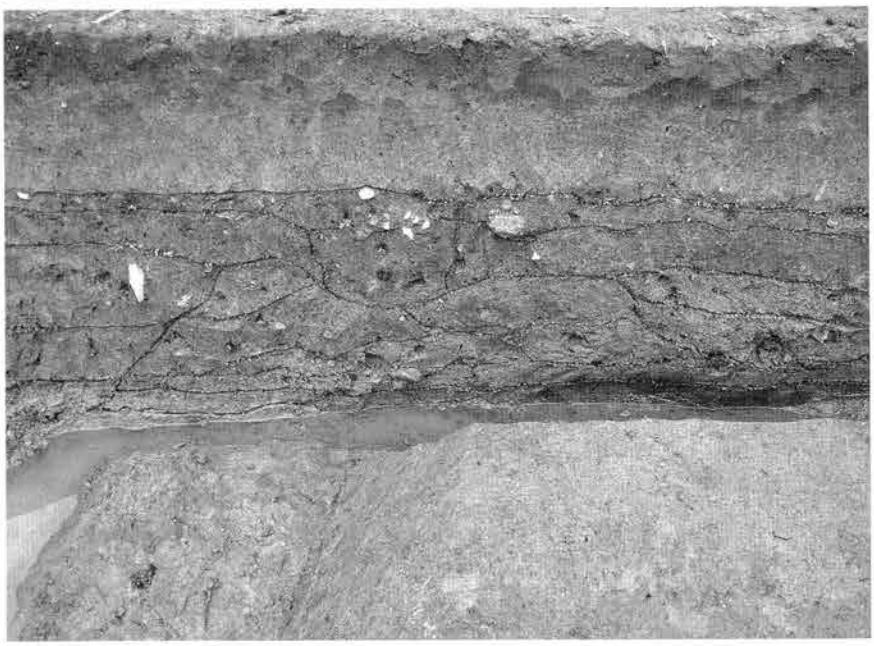
北拡張北壁断面
SD104・盛土状遺構検出状況
（南より）

SD104北側盛土状遺構
縦断面（北西より）

SD104北側盛土状遺構
遺物出土状況（北西より）

SD104北側盛土状遺構
断割状況（南西より）

SD104遺物出土状況（上より）



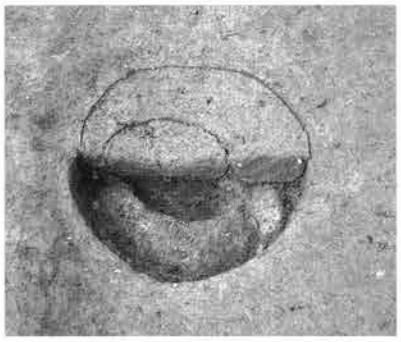
SD104南側盛土状遺構縦断面
（西より）

南拡張区SD104検出状況
（南より）

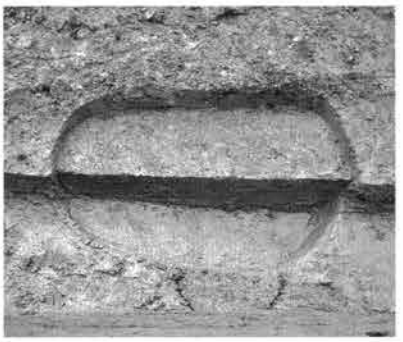
SK105

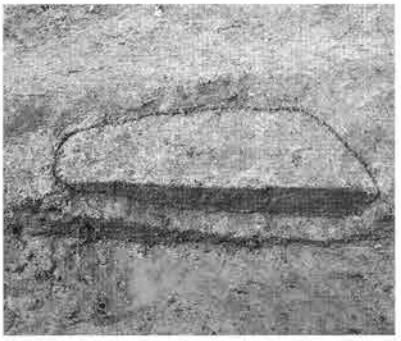
SK106

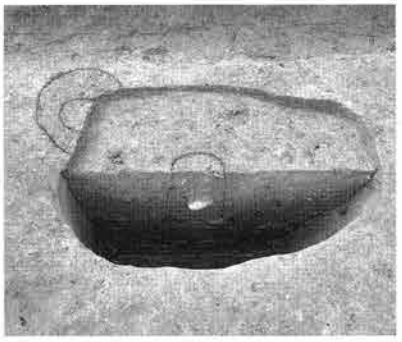
SP107

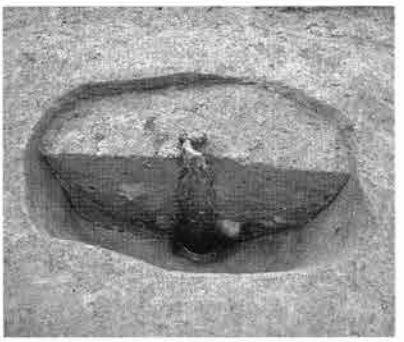

SP108

SP109


SP110

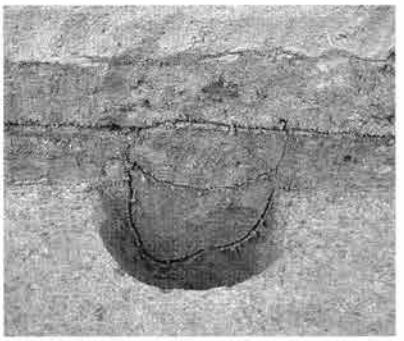

SP111

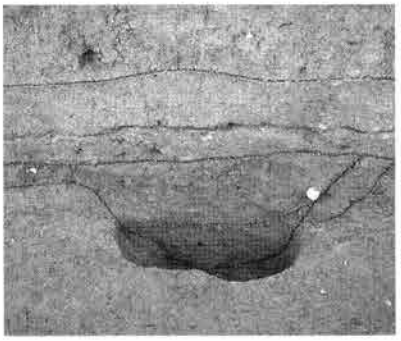

SP112

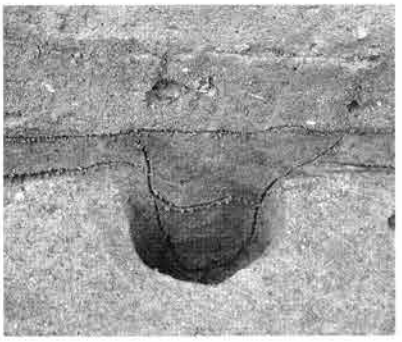

SP113

SP114

SP115


SP116


SP117


SP118

SP119

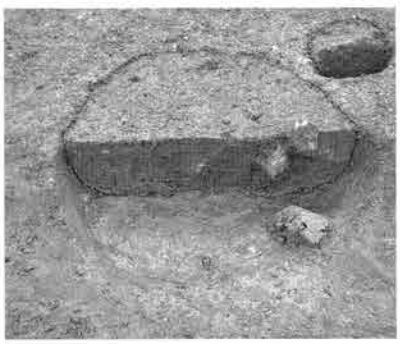
遺構断面①

SP120

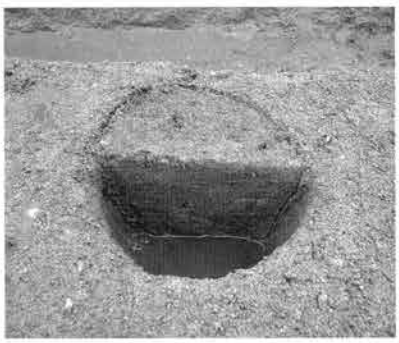
SP121

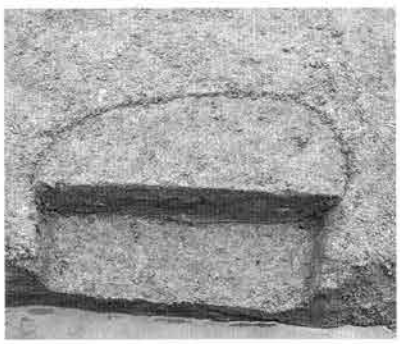
SP123

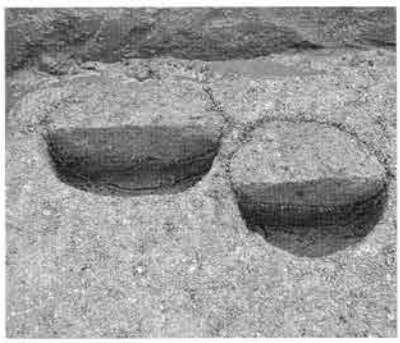
SP124


SP125

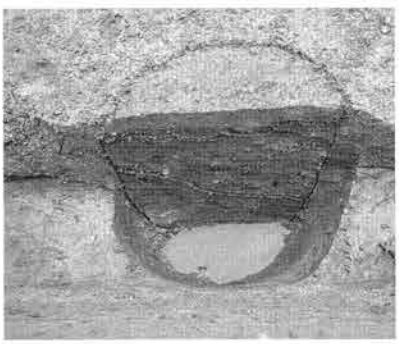
SP126


SP127

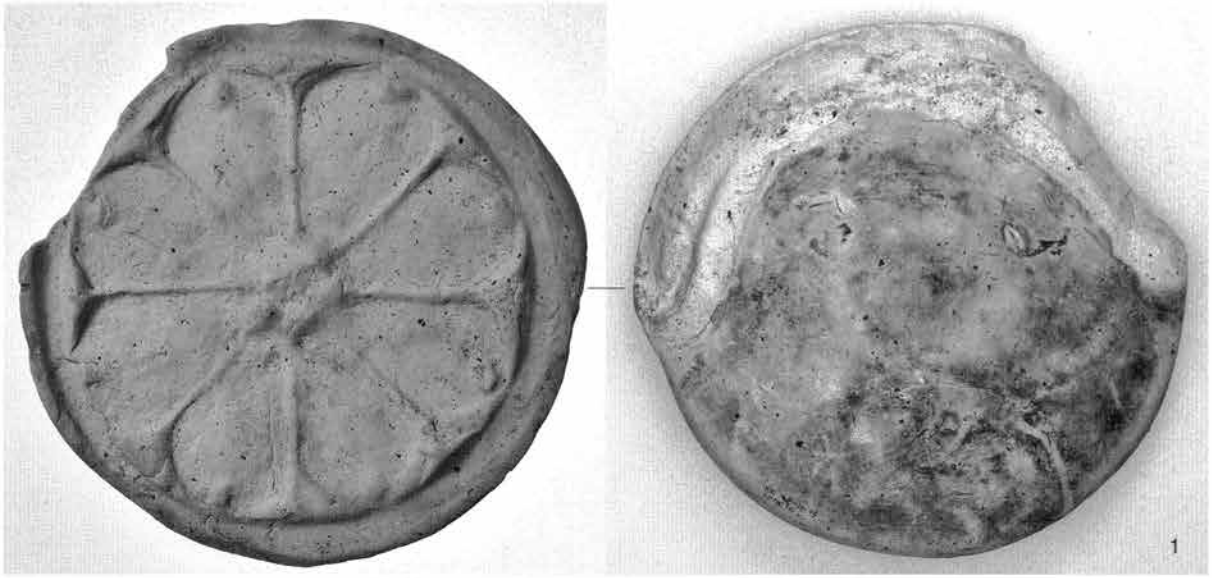

SP128

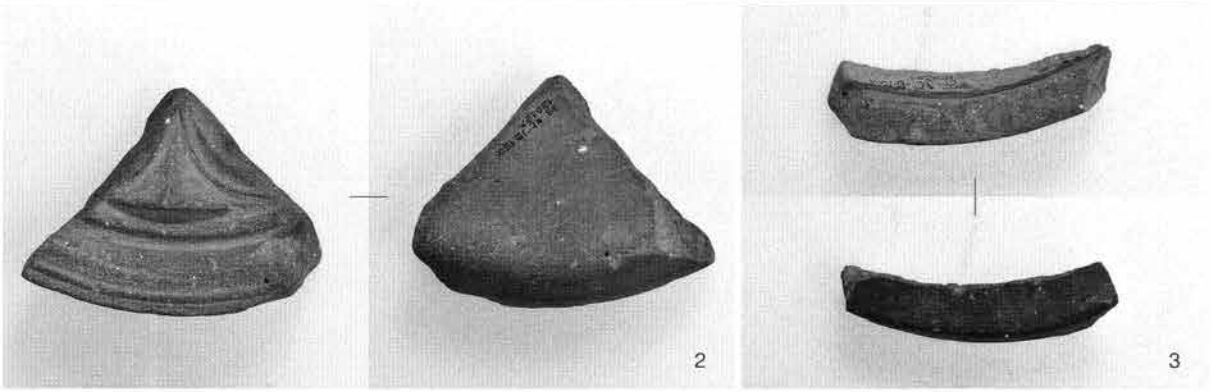

SP129・130

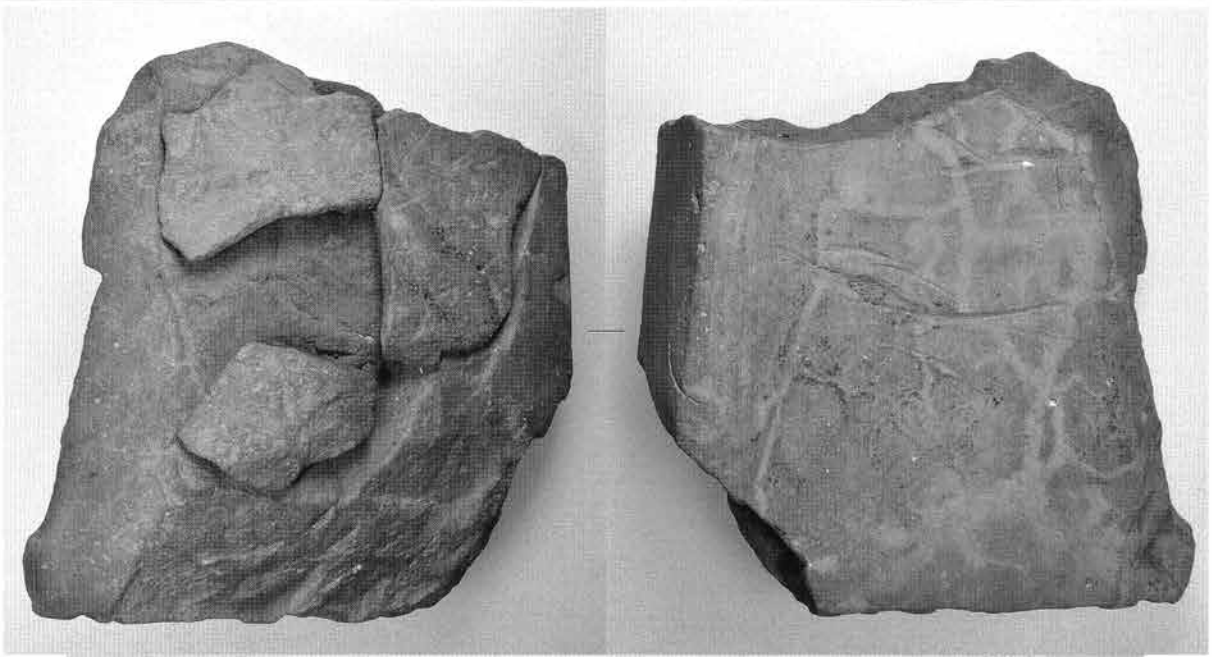
SP131


SP132

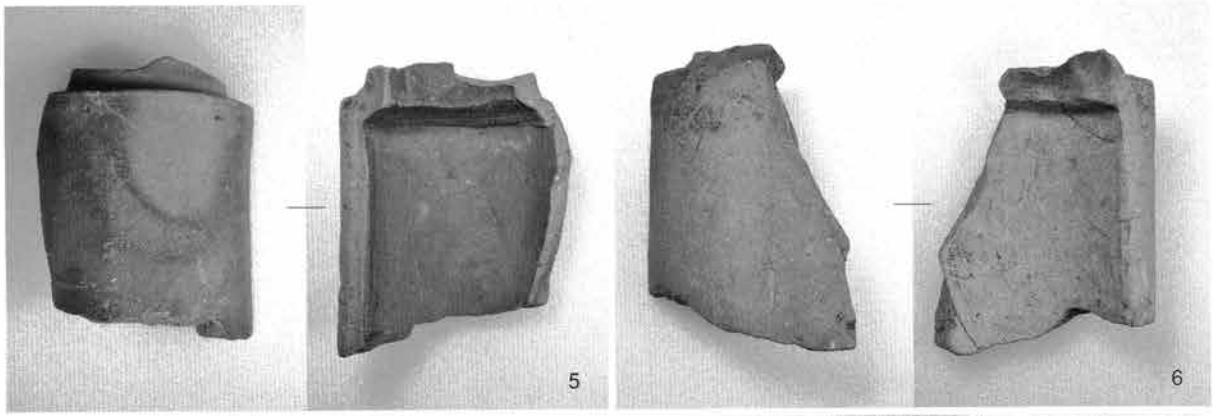
SP132
遺構断面②

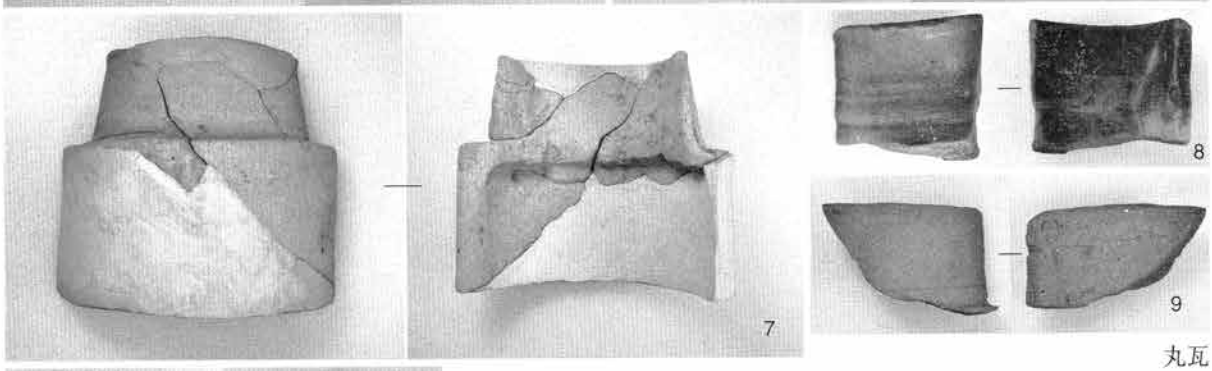




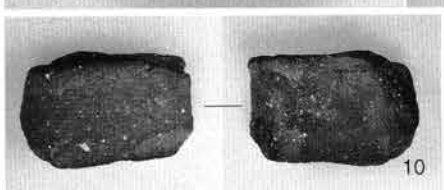


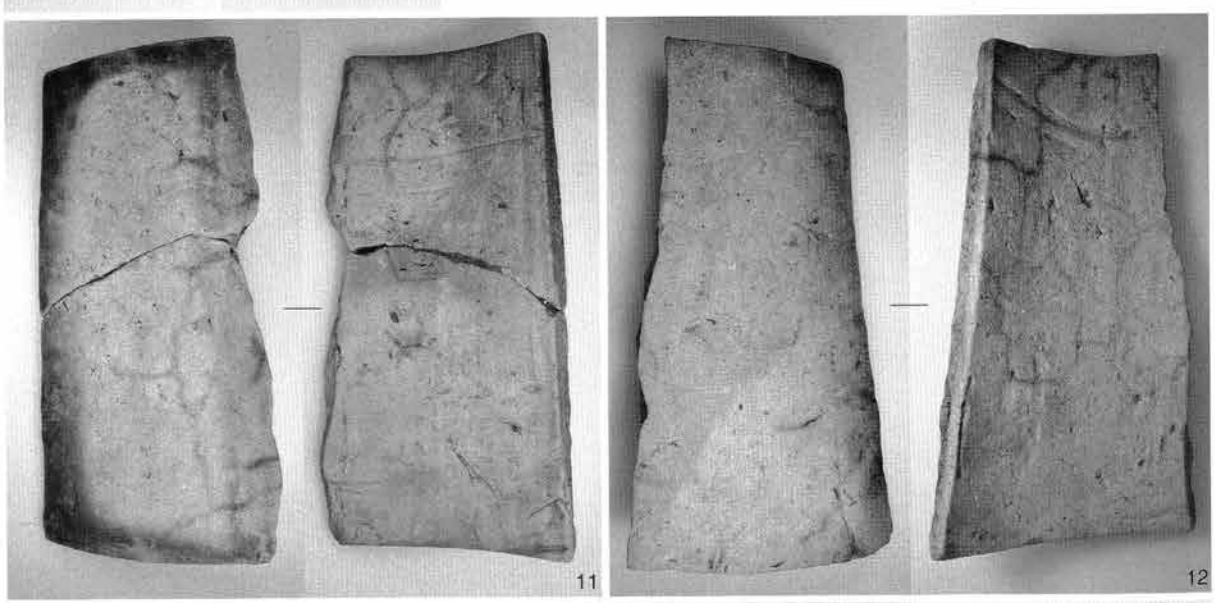
軒丸瓦・軒平瓦

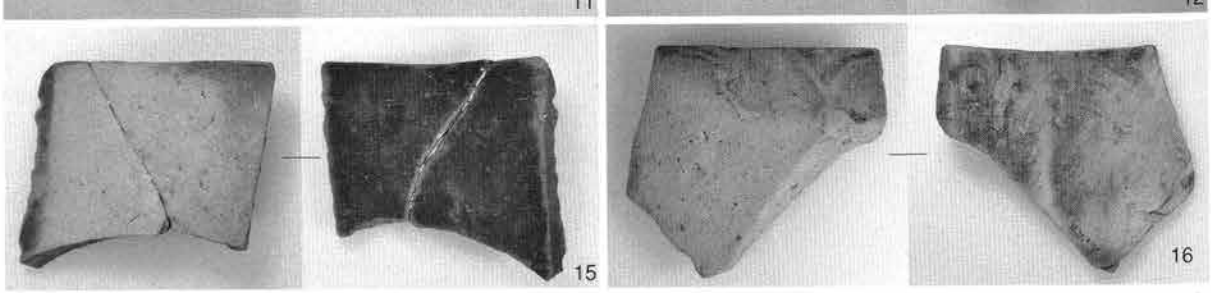




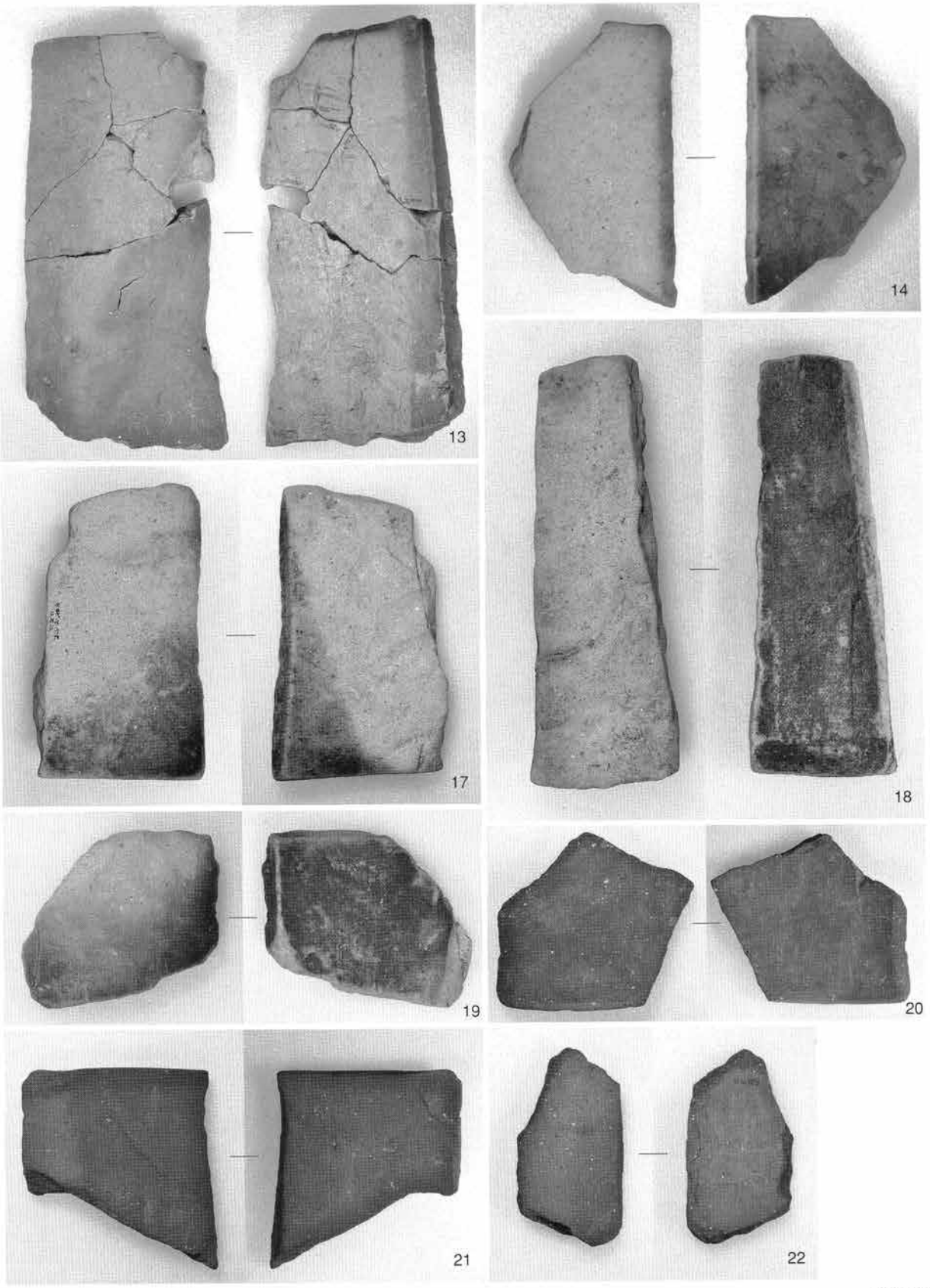
丸瓦



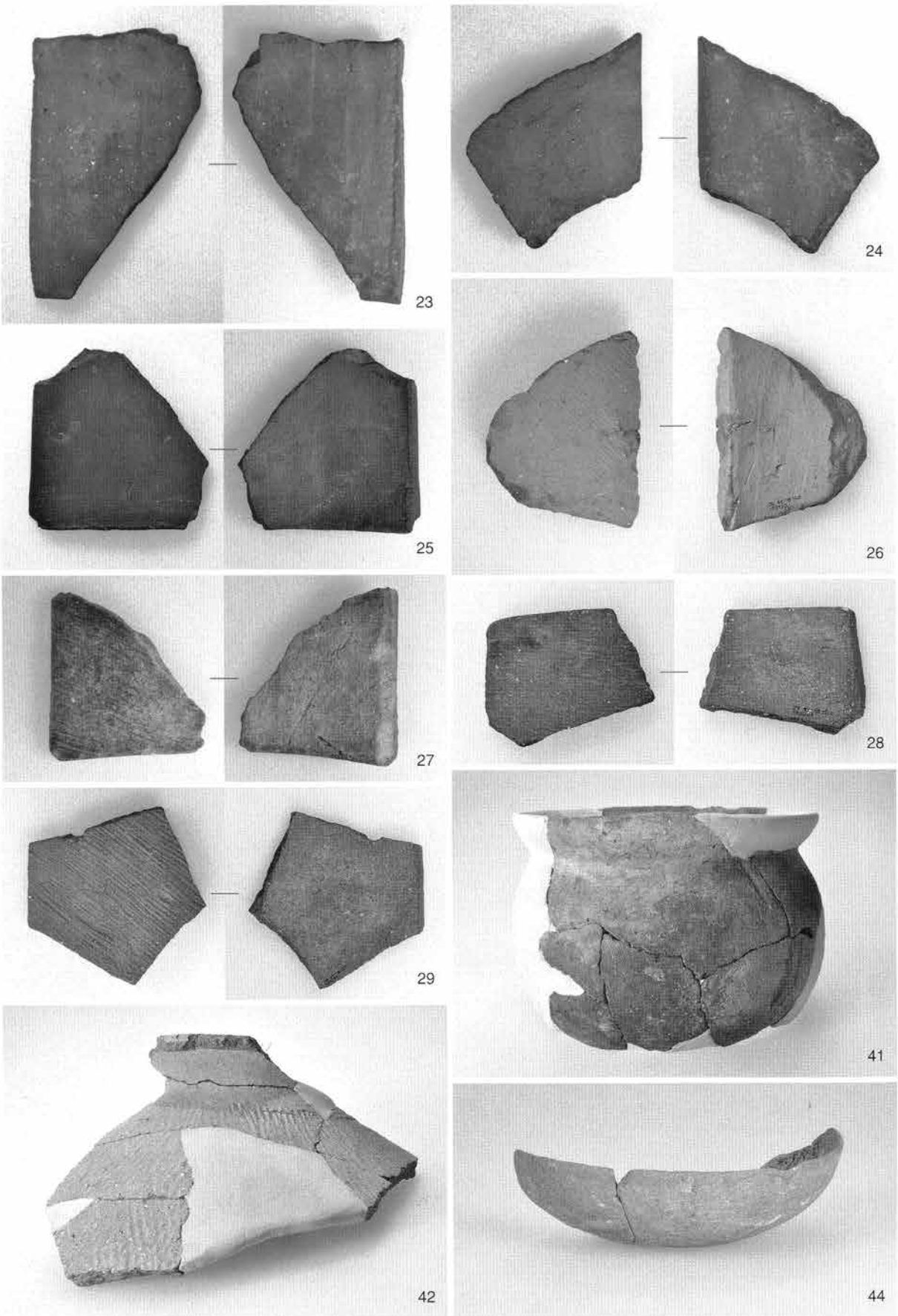




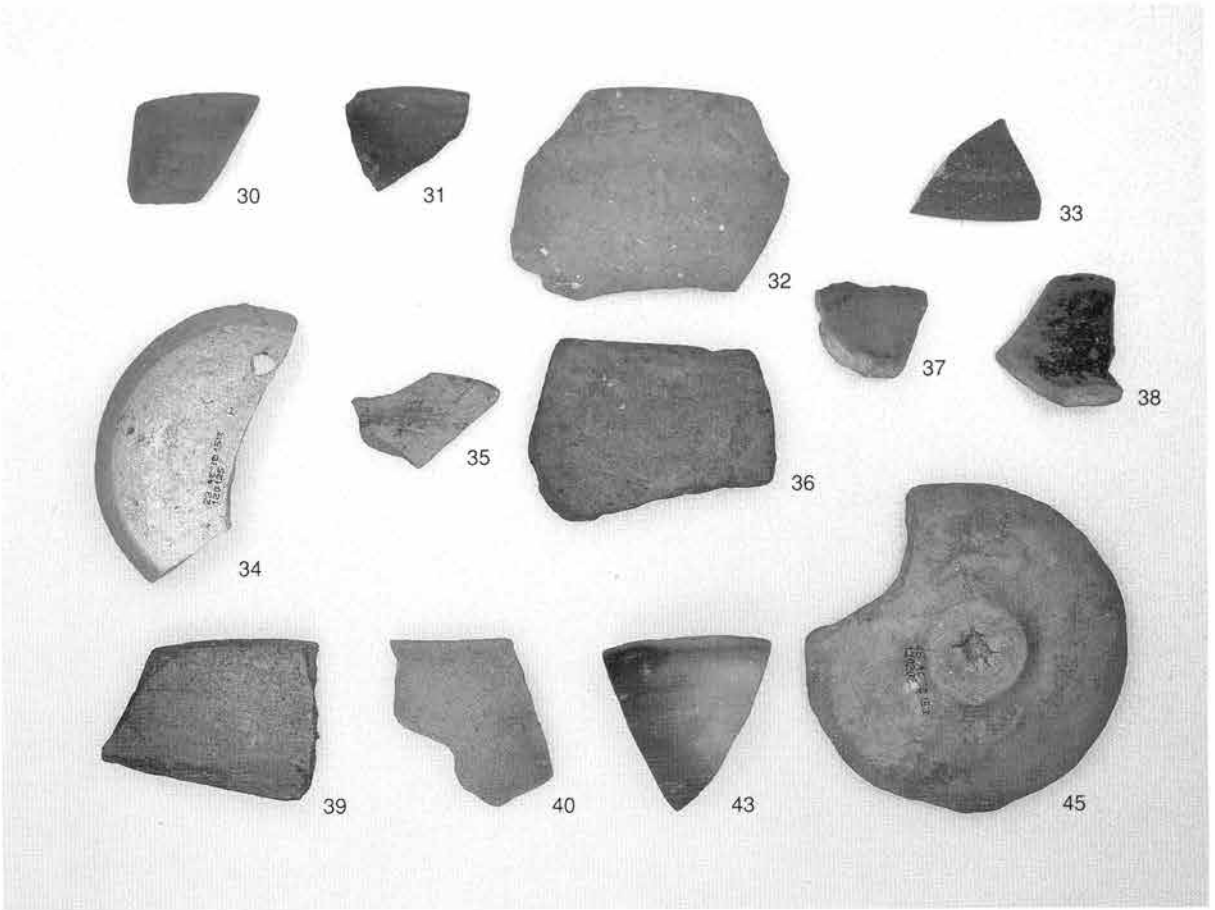
平瓦①



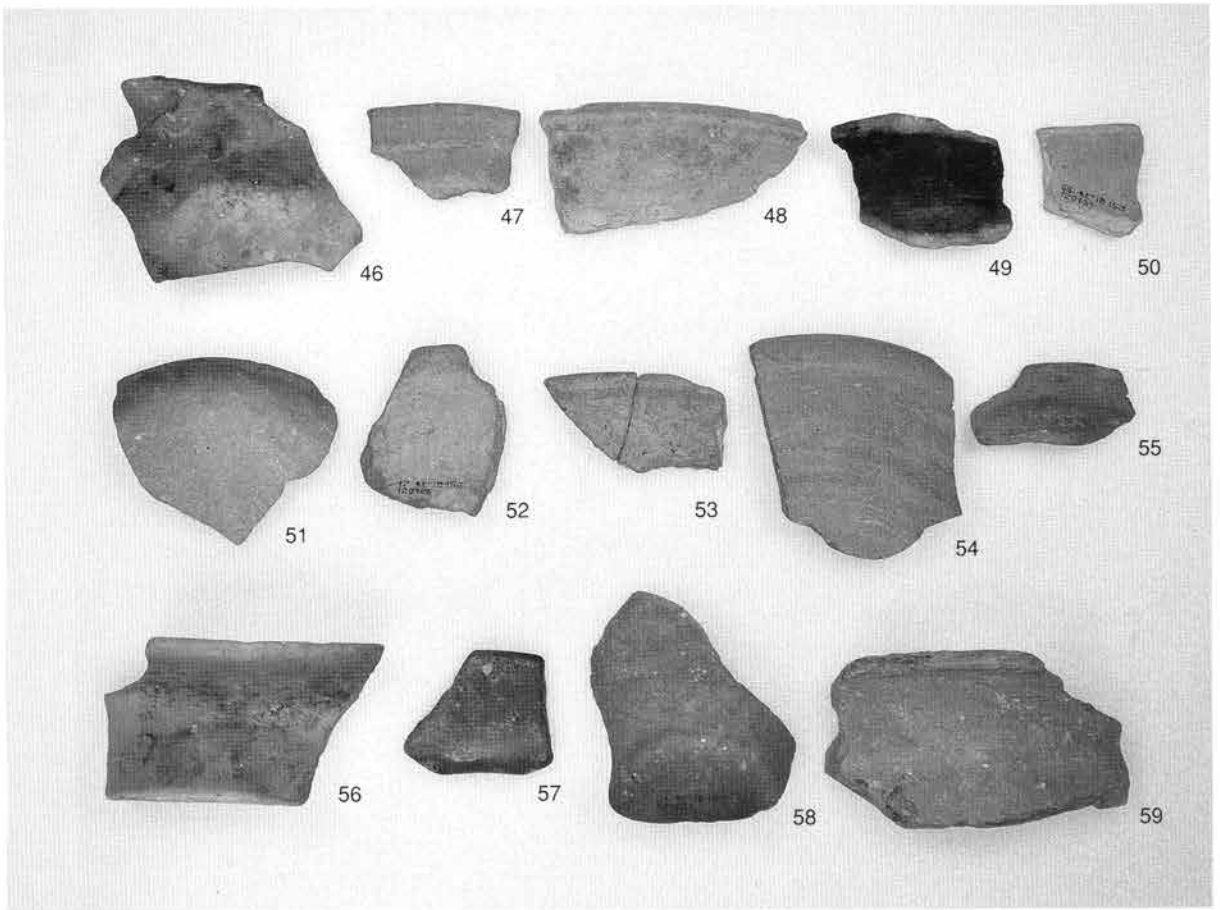
平瓦②



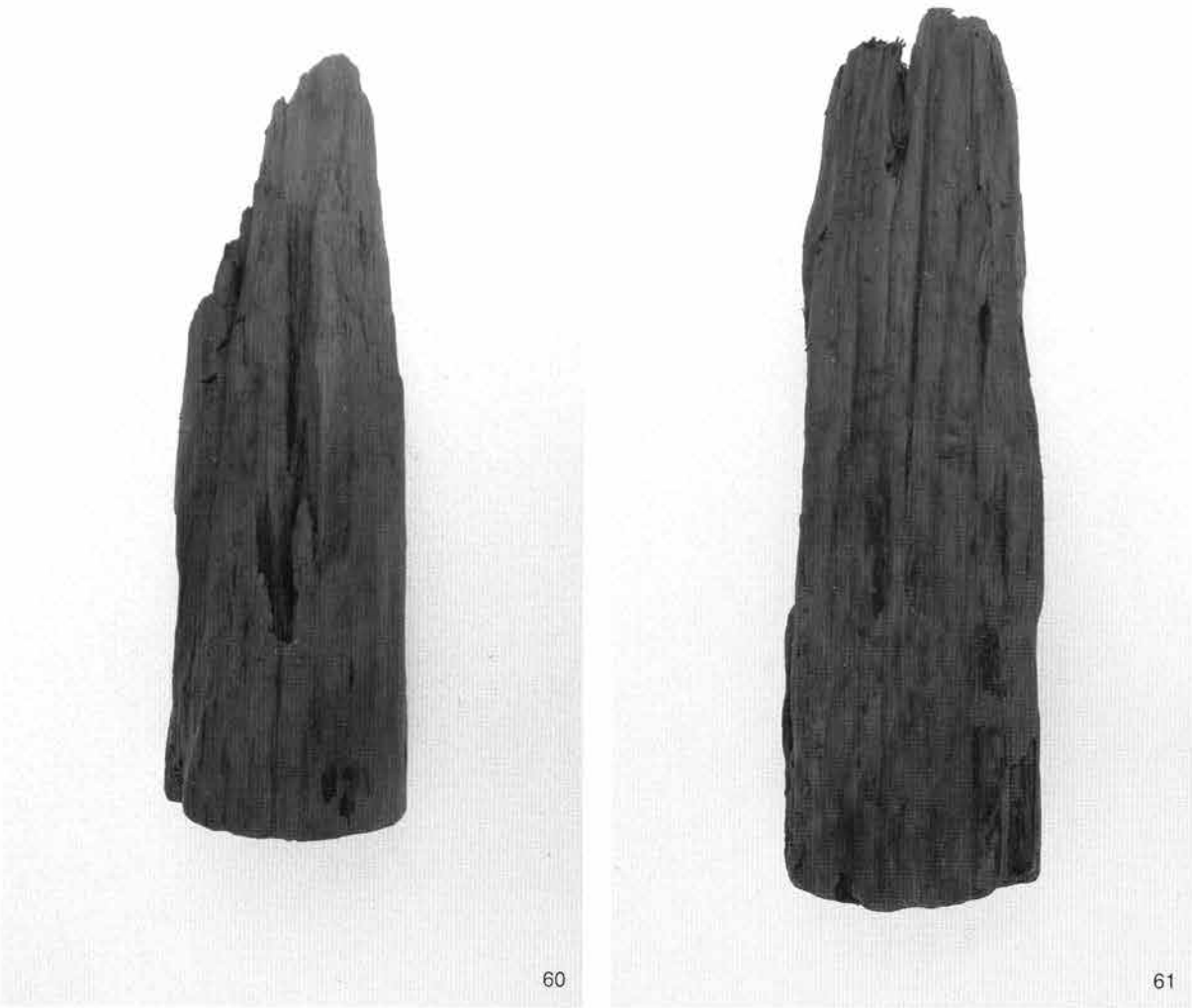
平瓦③・出土土器①


30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
43
45

出土土器②


46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59

出土土器③



柱材

SD104出土木片

報告書抄録

書名	桜井市平成23年度国庫補助による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第39集
編著者名	丹羽恵二（編集）、森暢郎、武田雄志
編集機関	桜井市教育委員会
所在地	〒633－0074　奈良県桜井市大字芝58－2　TEL0744－42－6005　FAX0744－42－1366
発行年月日	2013年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
纒向遺跡 第171次	桜井市 巻野内632	292061	11－D－487	34° 32′47″	135° 50′6″	20110531～ 20110609	36㎡	個人住宅建設に伴う
談山神社・妙楽寺跡第1次	桜井市 多武峰319	292061	17B－0206	34° 27′ 57′46″	135° 51′42″	20110524～ 20110706	4㎡	範囲確認調査
纒向遺跡 第172次	桜井市 東田358－3	292061	11－D－487	34° 32′47″	135° 50′6″	20110805～ 20110907	42㎡	個人住宅建設に伴う
吉備池遺跡 第15次	桜井市 橋本446	292061	14B－0024	34° 30′14″	135° 50′1″	20120116～ 20120228	127㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
纒向遺跡第171次	集落遺跡	ピット		
談山神社・妙楽寺跡第1次	社寺	土坑、整地層	輪宝、ガラス玉、土器	本殿床下の調査
纒向遺跡第172次	集落遺跡	土坑、溝	土器、鋤、埴輪	
吉備池遺跡第15次	集落遺跡	溝、土坑	土器・瓦	素弁蓮華文軒丸瓦出土

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書　第39集

桜 井 市
平成23年度国庫補助による
発 掘 調 査 報 告 書

発 行　桜 井 市 教 育 委 員 会
文 化 財 課
〒633-0074　奈良県桜井市大字芝58－２番地
TEL　0744－42－6005
FAX　0744－42－1366

年月日　平成25年３月29日

印 刷　株 式 会 社 明 新 社
〒630-8141　奈良市南京終町３－464